
挾啓、魔王様

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拝啓、魔王様

【Zコード】

Z0001Z

【作者名】

国高コウチ

【あらすじ】

私は悪魔。魔と呼ばれる存在の中で、唯一の色彩を持つただ一人の存在。

死に掛け薄汚れた私を拾ってくださったただ一人の方のためのみに存在する。

この髪もこの瞳もこの心もこの体も、全てがただの方のために。

「ねえ、知ってるかしら。悪魔は誰より一途なものよ。天使と違い博愛は謳わず、人間と違い余所に眼も移らぬ。私達はただ一人と定

めた相手に捧げるの「

一途な悪魔とその悪魔に焦がれる男たちの逆ハーストーリー。

ツンツン悪魔の純愛が通るのか。それとも他の誰かが彼女を射止め
るのか。

もてもて悪魔の恋物語です。注：主人公は魔王様以外との絡みがあ
ります。

挙啓、魔王様【登場人物】*隨時更新します。

伽羅きやら

職業：悪魔。魔王の側近

性別：女

年齢：921

一人称：私

魔王であり、養い親である白檀に崇拜と恋愛をあわせた感情を向ける一途な悪魔。

魔と呼ばれる存在でただ一人金色の髪と碧の瞳を持つ。緩やかに波打つ癖のある髪をサイドでまとめ垂らしている。

性格はきつく、自己の主張もきつちりとする。悪魔として絶世の魅力を持ち、美しい容姿で幾人もの天使を墮天させた。

白檀びやくたん

職業：魔王

性別：男

年齢：2026

一人称：俺

黒髪に黒目。魔界で最強と歌われる黒の瞳を持つ数少ない存在。幾人か存在する魔王の中の一人。

魔力が強く、怠惰でありながら退屈を嫌う。女も男も好みに合えば手を出すが、飽ければ消滅させることもしばしば。

子供の頃から面倒を見ている養い子の伽羅に関しては過保護な一面もあるが、基本的に素直ではない。

自身の住む世界で公爵の地位を得ており、その関連で異世界である

勇者が住む世界を定期的に訪れている。

本来の世界では人界にある城とは比べ物にならないほどの面積の敷地と居を構えている。

上から下まで黒の衣装に身を包むが、纏っている外套は伽羅からの千五百歳記念のプレゼント。

梅香
ばいか

職業：悪魔侯爵。魔王の側近

性別：男

年齢：921

一人称：僕

紫がかつた短い黒髪に、藍の瞳を持つ。身長210cmと体格が良く、人型であるときの魔王よりも身長は高い。

魔力よりも武道を得意とし拳で敵を叩きのめす。

普段は人界で言うチャイナ服のような衣装を好んで身に着けている。黒地に金の昇り竜。

伽羅とは同期であり同じ年の幼馴染もある。

いつでもマイペースでフェミニースト。女たらしとしても有名である。

菊花
きつか

職業：墮天使。魔王の右腕

性別：男

年齢：2100

一人称：私

銀髪を緩やかに三つ編みにし、同色の瞳を持つメガネを掛けたクールビューティ。

冷静沈着で魔王の参謀とも謠われる。細身の体つきだが、魔力は強く彼に適うものはそう居ない。

慄懾無礼を地でいく男で相手が直属の上司である白檀でも変わらない。彼らの中で一番の年長者もある。

レイノルド・F・ラツチエ

職業：勇者

性別：男

年齢：21

一人称：俺

世界でただ一人蒼い目と蒼い髪を持つ勇者さま。勇者の存在は血筋であり、勇者になれるのはラツチエ家の次男と決まっている。だが勇者が生まれる時期はランダムで、いつ生まれるかは決まってない。今代の勇者は蒼い髪を短く揃え、眉がきりりと上がった精悍な顔つきである。顔の造作自体は今までの勇者と瓜二つ。ぶつきらぼうな話し方をし、どこか人を寄せ付けない雰囲気がある。

ハーグ

職業：元・宫廷近衛隊隊長

性別：男

年齢：28

一人称：俺・我ら

髪・瞳：共に限りなく黒に近い藍色。切れ長の一重でオールバック。冷たく見える怜俐で精悍な顔立ち。

双子の兄。黒子がない方。

王立近衛隊隊長で剣も魔法も得意。しかし弟に比べると剣を得手としている。

弟に比べると口数が少なく感情表現が苦手。

アーク

職業：元・宫廷近衛隊副隊長

性別：男

年齢：28

一人称：俺・我ら

髪・瞳：共に限りなく黒に近い藍色。切れ長の二重でオールバック。

兄とよく似ているが良く見てみれば彼の方が柔和な顔立ち。

双子の弟。口元に自分から見て右側に黒子がある。

宫廷近衛隊副隊長で剣も魔法も得意。しかし兄に比べると魔法を得意としている。

兄に比べると口数は多く、口調も柔らかい。兄の足りない言葉を補う内にそうなつた。

シェリル 白魔術師。回復を得意とする。

17歳：女。マイペースな気質を持つ。レイノルドの幼馴染であり、彼に恋をしている。

アイル 格闘家。可愛らしい名前に反し腕前は十分。

19歳：男。女の子が大好きで子供から大人まで守備範囲は広い。体格はよく精悍な顔つきをしている。

ウェイ 黒魔術師。年齢の割にやや身長が低いのを気にしている。天才肌で扱う魔術は一級品。しかしあくまで人間ではと注釈が付くレベル。

14歳・男。自分よりも身長が低い小悪魔の伽羅に好意を持つ。好奇心旺盛なツンデレ体质。

アドニス・ファン・デル・サール 昔々の魔法使い。

魔法使いだというのに随分と体格がよく、その顔立ちは勇者のそれより精悍できりりとしており、短く刈り揃えられたメイプルレッドの髪のところどころにアッシュグリーンのメッシュが入った色彩が派手な男だった。

「おー、お前」

真っ暗な世界。

遠くから脳に直接語り掛けようつた声に、沈みかけていた意識が少しづつ浮ぐ。

「死んでるのか」

「・・・・・う」

髪を引っ張り上げられ、顔を持ち上げられる。

向けられる魔力はびりびりと肌を刺激し、今にも消えてしまいそうだ。

けれど、強すぎるとそれに意識が沈むことを許してもうれない。

「生きてるのか。なら、返事をしないか」

「・・・・・・・・」

「太陽を模した金色の髪に海と森を混ぜた碧の瞳か。こんな感じで珍しい」

「・・・・・・・・」

唐突に手が離され、顔が地面にぶつかる。

鈍い衝撃に、まだ残っている痛覚が頭が切れたと私に囁いた。

温い温度が頬を伝う。

「退屈凌ぎこはちよつどこいかもしねないな」

あの方にとつて、私の命は気まぐれに過ぎなかつた。
けれど、私には彼に拾われた事実だけが全て。

序章【1】

「何を仰るのですか、魔王様！！」

唐突なことを告げた主に、背を一杯に伸ばして私は声を上げた。こんな態度を許される筈が無いのに、自制する気力が根こそぎ奪われた。

本来なら彼の抑止をすべきはずの右腕を睨み付けると、長い銀髪を緩やかに編みこんだ彼、菊花^{キツカ}は、メガネを指の腹で押し上げつつそりと息を吐いた。

墮天した過去を持つ彼は、この城では異例の存在ではあるが力こそ全ての魔物の基準で魔王の右腕を任されるほどのやり手だ。

理解できないのは白地の衣服を纏うセンスのみだが、基本的に常識的な彼ですら止めるのを放棄し諦めの境地に居るらしい。

眉間の皺の刻み具合から、賛成はしていないだろうに、押し切られたとでも言つのか。

頼りにならないと一瞬で切り捨てる、右隣を見る。
私と同じ白檀様の側近という立場の幼馴染、赤地に金の糸で刺繡が入った人間世界で言つところの東国の衣服を纏う梅香^{バイカ}は肩を竦めてこちらを見ていた。

浮かぶのは苦笑で、こいつもダメだとじろりと睨む。
結局頼りになるのは自分だけと気合を入れると、数メートル先の玉座に足を組んでゆつたりと座る白檀様に瞳を向けた。

「やう怒らないで欲しいものだな、可愛い養い子。怒つたとしても碧の瞳が輝きを増し、白い頬が上気して益々可愛くなるだけだ」

「何を戯言を！！」

「はははは。 なあ、伽羅^{キャラ}。俺の言つことが聞けないか？」

「いえ、いえ、魔王様。ですが……」

「俺の名は白檀だ、可愛い養い子
「つ。白檀様！」

魔界の闇よりもなお黒い瞳が私を射抜く。

睨まれたわけではなく、ただ見詰められただけ。それだけで全身震えが走り、冷や汗がどつと流れた。

かたかたと制御できない細かさで身体が揺れる。

彼は怒つているわけではない。

ただ、少しの力を解放しただけで、私は身が竦み動けなくなる。

白檀様の側近と呼ばれても、彼との力の差は歴然とし、その気になれば羽虫のように指先で潰される。

圧倒的な存在感。

だが、それでもあつさりと引けぬ理由が確かにあった。

震える身体をどうにか宥め、掠れる声を絞り出す。

「・・・それでも、勇者を魔王城に一週間も泊めるなどとは
「 そこまでにしておきなさい、伽羅

「菊花」

「白檀様が仰られるのです。私たちの応えは『是』以外にないでし
ょう

「ああ。それに、白檀様が人間如きにどうこうなるはずがない。それを良く知っているのは、僕達ではなく君自身のはずだが」

「貴様に言われなくとも つ。私が白檀様のお力を疑つてると
でも言つのか！！」

ぶわり、と魔力を開放する。

小悪魔で居る状態の金色の髪が揺れるのが視界に映る。

例え子供の姿でいようとも、魔力が薄れるわけではない。

白檀様の養い子として恥ずかしくない力を身につけるために、血の滲むような努力も、死に掛けるほどの修行も欠かしたことは無かつ

た。

例え相手が男性系であろうとも、人間と違ひ悪魔の私には関係無い。私が遅れを取る理由にはならない。

私の本気の怒りに早々と両手を上げ、降参の意思を示した梅香に力を納める。

青く発光していた魔力が小さくなると同時に、壇上の白檀様に声を掛けられ慌ててかしこまる。

醜態をさらしたことに後悔が湧き上がり、恥ずかしくて消えたくなつた。

どれもこれも、隣に立つ幼馴染の所為だ。

「伽羅」

「・・・はい、白檀様」

「俺の言葉はお願いではない」

「はい。・・・申し訳ございませんでした、白檀様」

「許そ、可愛い養い子。俺の心配するなどという行為も、俺の言葉に反論するところ行為も。代わりに命令しよう。遊びに来る勇者の面倒はお前が見るので」

脳裏に覚えている勇者の顔が浮かぶ。

世界に選ばれた勇者の癖に、やる気が無くへらへらと白檀様のところに遊びに来ていた、空を写したような蒼い髪を持つ男の事を。世界でただ一人持つ蒼色の髪を後ろで軽く結わえ、白銀色の鎧を纏う、この世界の勇者を。

思い浮かべるだけで胸の奥がざわめき落ち着かなくなる。だが、感情を一切顔に映すことなく私は口を開いた。

「はい、白檀様。仰る通りに」

ゆつたりと肘に顎を乗せて、じめりを見る白檀様は、ゆるりと唇を上げて満足げに頷いた。

その麗しい笑みを向けてもらえたるだけで、これからのかつらも報われるのだと思まって頭を下した。

序章【2】

「やれやれ。本当にあなたは心配性でいけない」

「ひるさいわ」

「本当だな。魔物のトップレベルにいると認識されている僕たちよりも、百倍は強いと知っているだろひる」

「黙れ」

「度を越えれば無礼にしかなりませんよ」

頭の上から降つてくる小言に、私は足を止めた。

謁見室からもう随分と歩いているが、菊花と梅香の言葉がやむこと

はない。

私の怒りを感じてか、すれ違う部下も一人もおらず、調子に乗っているらしい一人は普段は滅多に共同戦線などはらないはずなのにと忌々しく感じるほど息がぴつたりだ。

何が言いたいと睨もうにも身長差がありすぎて、首を上げるのも結構辛い。

なので端的に切って捨てていたが、我慢も限界に達しそうになつていた。

瞳を閉じ意識を集中させる。

「おや」

「おお」

瞳を開けたときには、彼らの視線は随分と近くにあった。

小悪魔の身体であるときの私は身長が僅かに135cmほどしかなく、長身である一人特に梅香は人型でも一メートルを超える巨体である。に視線を合わせるだけでも一苦労だが、本来の姿に戻った今ならばさして難しくない。

髪の色が濃くなりさらなる輝きを放つ。右で結つてあるそれを後ろに流すとすっと手を細め彼らを睨んだ。

肌を包むのは黒革で出来た露出の高い衣装。長い足にヒールの高いブーツを履いた高らかに靴音を響かせ距離を詰める。先程よりも首を上げる角度が柔らかくなつた菊花を睨み、次いで視線をすらすと少し首を上げ梅香も睨む。

「静かにしろと言つてはいるのが聞こえないの」

「怖いな。小悪魔の姿でいるときはまだ可愛らしさが前面に立つくなに、本来の姿に戻ると怒りもまた違つた印象を与える」

「全くです。白檀様の側近としては余程そちらの姿の方が相応しいでしよう」「でに」

「煩い。菊花、あなたの言葉に従つ謂われは無い」

「まあ、そうでしょうね」

「勿体無いとは思うけどな。いい身体をしているのに

無造作に伸ばされた手が胸を掴む。

頬を赤らめる必要も、いまさら恥りつ関係でもなかつた。だが、不快には思つ。

眉間に皺を刻み、力を使おうとした瞬間。

ばちり、と音が弾け青白い閃光が火花を散らす。

「おつと・・・これはまた」

黒焦げになつた己の掌を余裕の表情で眺めた梅香は、くすくすと笑いながら自分の手を前に翳した。

その顔に驚きは無く、むしろ面白がる様子だった。

ちらり、と横目で梅香とは反対隣にいる菊花を眺めればため息を吐

きながら眼鏡を指先で押し上げている。
その姿に内心で胸を撫で下ろした。

「大丈夫ですか！？お姉さま！」

大理石の廊下に響いたアルトの声。

様々な呪が刻みこまれた褐色の肌に濃緑の髪を持つ少女は、黒地に赤の入ったターバンを髪に巻いている。伏せられたままの瞳は彼女が盲目であることを示していた。

何よりも特徴的なのは身体中に彫られた呪。普段は黒いそれを怒りのため赤く発光させた存在にため息を一つ落とす。

成体でいる私の胸ほどまでしかない少女 香は私のただ一人の傍仕えであり腹心の部下だ。

だが白檀様の側近である私の傍仕えであつても、一個人で見れば私と肩を並べる梅香の方が当たり前に香より身分は上になる。

普段どれだけおちゃらけていようと、気が向けば城のメイドどころか人間にすら手を出す好色男であると、彼は魔王側近なのだ。けじめをつけるべき相手 つまり、他人の目がないところで何をされても子猫に引っかかれた程度にしか思わない梅香は処罰を下したりしないだろう。

だが、相手が菊花となれば話は別となる。

元天使であつた所為か彼には規律に厳しい部分がある。

上下関係をはつきりとさせるのを好み、分別を弁えない小物は容赦無く消すこともあった。

しかしながら何故見逃すのかは理解できないが、今のところ香に手を出す気は無いらしい。

「香。こちらへ来なさい」

「はい、お姉さま」

「　　怪我はない?」

「はい。あたしは大丈夫です」

「酷いな、伽羅。今のは何をどう見ても僕がやられてただろう?僕の心配はなしなのか?」

「あなたのは自業自得でしょう。その位で済んだことを感謝すべきです。あと数瞬でも遅ければ伽羅があなたの手を吹き飛ばしていたでしょうから」

「そうね。その右手首があるのは香のおかげよ。感謝なさい」

「二人とも友達がないコメントをありがと」

「友人になった記憶は無いですからね」

「腐れ縁ではあるけどね」

「それはどうも。涙がでそうなコメントだ」

「　　涙が出たら魔族として欠陥品ですよ、梅香様。変な病気だ
といけません。速やかにお姉さまから離れてください。永久に、久
遠に消えてくださいと尚良いです」

「君は本当に伽羅以外は眼中にないんだな。年も力も身分も上の相
手に物怖じ無く命知らずに主張するところは感心するよ」

「あたしはお姉さまのことでは譲らないと決めているんです。人目
をはばからずお姉さまに不埒な真似をする輩など全て滅べばいい」

「・・・本当に、感心する。他の誰にでもなく、この僕に対しても
それを言うのだから」

じんわりと、藍色の一重の瞳を細めた梅香は香を眺めて頷いた。

その仕草は今にも狙いを定めんとする獸に酷似していて嫌になる。
香の腕を引っ張り抱き込むと小さな悲鳴を上げた少女は、すぐに腕
の中で大人しくなった。

「おや？ 伽羅に抱きしめられるなんて羨ましい限りだな。僕にもする気は無い？」

「全く無いわ。私の可愛い香とあなたと一緒にしないで」

「本当に手厳しいな、伽羅は。千年近くも付き合いがあるのに」

「だからこそ、とでも言つべきかしら？」

「はあ。本当につれないな。ま、そこも含めて魅力的なんだが」

「気持ち悪いわ」

「全くです。早く居なくなつてトセー」

「本当に辛らつだな」

「仕方がありませんね、それは。普段の行いを省みてからアプローチすればいいんじやないですか？ さて、ではそろそろ私たちは失礼しましよう」

「はいはい」

「私たちは勇者様ご一行の為にしつかりとした警備体制を準備します。伽羅。あなたは白檀様直々に面倒を見るようにと言われていますのでくれぐれも粗相が無いように」

「判つてるわ。ここに居る、誰よりもね」

「そうですか。ならば宜しい。勇者が来るのは数日後と聞いてあります。部屋の準備はあなたに任せます」

「随分と早いのね」

「話自体は前から上がっていた内容でしたので。人間からの面会の申し込みが続いているのはあなたもご存知でしょう？」

「ええ。この地に現れるたびに繰り返される行事ですもの」

「ならば、あなたの為に白檀様がぎりぎりまで口を開かないのも毎度のことど」存知のはず。の方の過保護、ふりにも呆れますか」

眼鏡のつるを押し上げた菊花は、腕を組むとため息を吐いた。

言葉通りに呆れているのだろう。けれど白檀様はたかだか養い子一人の為にそこまで視野が狭くなる方ではない。

考え方をしていると指摘しようかと思つたけれど、それより先に二人は踵を返し背を向けた。

序章【3】

「お姉さま」

「何?」

「勇者どもがこの城へ来るとは本当ですか?」

「ええ。菊花も言つていたでしょ?」この世界の恒例行事のようないいよ」

「恒例行事」

「そう。あなたも知つてゐる通りに、私たちが住む世界には幾つもの鏡面世界があるわ。その世界一つ一つを伯爵以上の地位がある人が支配している。白檀様はこの支配者。世界の『王』よ」

「世界の・・・王」

「白檀様が望めば天候も自然も全てが従う。滅べと願えば世界が消える。私たち『魔族』は力を持たぬ人間とは違う。その長命さと人知を超えた力は『天使族』と同じものだけれど、人間へ力を貸す『天使族』とも違う。ここは私たち魔族が支配する世界。その中のトップは白檀様。だから彼は魔の中の王、『魔王』と呼ばれる」

「それでは勇者とはこの世界では何の役割を果たすのです?異界の御伽噺のように白檀様を打ち倒しに来るのですか?」

首を傾げた香の、至極真面目な問いかけに噴出した。まさか、そんなのありえない。

確かに、勇者の一族は破魔と呼ばれる特別な力を持っている。

己の魂の存在と引き換えに、ただ一度だけ魔王に対抗する力を。

それを与えたのは私たちの世界に存在する神で、一方的な支配に対する勢力として与えたのだと聞いていた。

だが。

「この世界の勇者の主な役割は交渉よ。白檀様に對して力を行使することはないわ」

「交渉ですか？」

「ええ。この世界に長く居座らずに、なるべく早くあるべき世界へ帰れと。私たちからすれば瞬きするような時間でも人にしてみれば随分と永い。圧倒的な力を持つ『魔族』がこの地に滞在する時間が長ければ長いほどこの地の受ける影響は大きいわ。事実、この地に住みつづけて二十年。白檀様のお好みでこの地は常に夜と同じ闇に包まれているけど、その間に死滅した動植物は数知れない。彼らからすれば私たちの存在は害悪のようね。まあ私たちがこちらに来る都度、世界に出来た歪から下級の魔物が現れるくらいなのだし、そう感じるのも仕方が無いけれど」

「ですが白檀様がお治めにならなければこの世界の歪はもつと大きなものとなりましょ」

「人はそれを知らないわ。知る必要も無いことよ。それに長居をすれば忌々しい天使たちがこの地に姿を表すわ。無駄な接触はお互いに避けたいものよ」

盲目の少女の頭に手を乗せる。短いけれど柔らかい感触のそれに唇を緩ませた。

心地よさ気に目を細める仕草はまるで上品な猫のよう。安心しきつて甘えてくる香の耳を指先だけで擦ると、うつとりしている彼女に忠告する。

「いいこと、香。彼らは『人間』。私たちとは種族が違うわ。想いの表し方も、感情の起伏も、恐怖する対象も愛情の示し方も。人は偉く泡沫の存在。気を許してはいけないわ」

勇者が『魔王』の存在を脅かす最初で最後の駒なのは、何処の世界でも同じなのだから

序章【4】

翌日の朝、普段着ている革の衣服ではなく、流れるドレープも豊かなドレスに着替えた私は長い階段の中腹に居た。

赤い絨毯がしかれているそれは、全ての屋敷に切れ目無く届いている。

もちろん、今見下ろしている玄関に向けても。

近づいてくる気配に苛立ち、仕舞つている羽がつむづと動く。すると私の落ち着かない様子に気がついた梅香が苦笑して私に手を伸ばしてきた。

小悪魔で居る私からすれば見上げるほどの大男は、あやすように私を抱き上げる。

藍色の瞳が目前に迫り、じとじと睨みつけるが抱き上げた手は離されない。

「落ち着かないみたいだね、伽羅。 そんなに勇者」一行が来るのが気に入らない?」

「ええ。判つているでしょう? 私は白檀様に仇成そうとするもの全てが嫌いなの。」命令でなければこの屋敷の敷居を跨ぐ前に消し去つてやりたいわ」

「それはまた物騒な話だな。折角可愛らしい姿をしているのに」

「これは私の趣味じゃないわ。菊花に無理やり押し付けられたのよ。白檀様のお顔を立てるためでなければ、誰が『白』なんて着るものですか」

見下ろす衣装は染まらぬ純白。

いりり、と湧き上がる黒い想いに唇を噛む。

他の魔族の趣味は知らないが、私は白は好みない。

私が好きなのは白檀様の色である黒で、基本的に服もリボンも装飾品につける石も黒で統一 それでいる。

それなのに用意されたのは菊花の意志が通された白。幾重にも重なるレースも好みではない。絡み付くように流れるリボンが不快ですらある。

それでも白檀様が良いと仰つたとの一言で、噛み付きたい気持ちは頭上から押さえ込まれる。

かの人と正反対の色を纏う屈辱と、かの人直々の言葉は複雑に私の心を乱し混乱させた。

私の感情を全て読み取っているとでも言いたげに唇を歪めた梅香は、子供にするように頭を撫でた。

落ち着かせようとしてるのだろうが正直全くの逆効果だ。

けれども見詰める眼差しがあまりにも静かで、仕方なく深呼吸をして気を静める。

「仕方がないさ。こここの世界の人間は僕たちと違つて『黒』よりも『白』を好む。僕たち魔族よりも天使族により近い生活を送つているからね」

「いつそ、永遠に天使族に管理されていればいいのよ」

「それは出来ないと君も知つてはいるだろう。世界は正と負で成り立つものだ」

「それくらい判つてはいるわ」

「ならそろそろ機嫌を直すんだ。勇者様」一 行が門を潜つたみたいだ

言葉と同時に宙に映像が映し出された。見なれない馬車ががたごとと揺れている。

立派な葦毛は賢そうな目をしていた。

この魔力の波動は菊花のものだ。きっと、いい加減に持ち場に戻れと無言で促しているのだろう。

一つ息を吐き出すと梅香の腕を叩く。こうなれば初めての体験だからと下がらせた香を傍に置いておけばよかつたと少しだけ後悔した。力が緩んだのを確認して、彼の腕から飛び降りる。

視界の端に赤いリボンが揺れて、少しだけ気が紛れた。

唯一身に纏う白い外の色は、ずっと昔に白檀様に与えられたものだ。魔力で加工して使っているので腐食は見当たらない、血の色よりも濃い紅色のお気に入りの一品だった。

「一人で大丈夫かい？」

「誰に言つてるの？」

「それはまた失礼。なら僕は大人しくここから観察させてもらひうよ

言葉と同時に姿が消える。

紛れるように感じた気配に、存在はまだここにあるのを意識した。

別の部屋から見ている菊花とは違い、彼はこの場での見物を選んだらしい。

それも人には判らぬよう、しっかりと姿と気配を消して。

悪趣味だと瞳を眇めれば、幼馴染だからこそ判る微かな気配が笑いに揺れる。

どうせ止めても聞きはしない。ならば無駄骨は折りたくないと一つ息を吐き踵を返す。

気配を辿れたとしても彼の姿は目に映らない。

私にすら姿を隠し、けれどその存在感だけをアピールしたまま留まるのは、感傷に流されそうになる私を阻めようとしての彼らしくない配慮かもしれない。

序章【5】

馬車から降りる人影を待たずして宙に流れている映像が途切れた。全くの静謐が屋敷を包む。

今なら針の落ちる音でも大きく反響するかもしない。

玄関の前で気配が止まる。

目を眇めれば、魂の輝きがはつきりと見えた。

桃色、浅黄、黄緑、そして一際大きな蒼。

どうやら今回の勇者」一行は四人連れらしい。

前回も確か四人だった。何か四という数字に意味でもあるのかもしれない。

こくりと首を傾げ、まあどうでもいいかと息を吐き出す。

指先で小さく円を描きそのまま手前に引いた。

「……？」

一様に驚き足を止めた存在に目を細める。

白いローブを羽織った亞麻色の髪の少女を背に、半そでに長ズボンの身軽そうな格好をした鍛えた身体の茶髪の青年が立つ。手に嵌める力ギ爪に目を細めその特徴から白魔術師と格闘家かと日星をつける。

丸っこい目を好奇心に輝かせきょろきょろと当たりを見まわしながらも杖を構えた小柄な少年は、不意に顔を上げて動きを止めた。幼いながらも随分と魔力が強いらしい。

そして彼らの真中に立つ蒼い髪が印象的な青年は、相も変わらず白銀の鎧に剣を構えている。

幾度会合を繰り返しても変わらぬ装いに作ったものではない笑いが

漏れた。

じつと姿を見詰めるが違和感を感じて眉を顰める。まさか、と息を呑み観察しつづけ確信に至る。

どうやらあの小柄な少年以外に私の姿は見えていないらしい。今回のご一行のレベルの底が知れたと息を吐く。

階段を一段一段降りながら徐々に力を解放すれば、残りの人間も漸く気づいて顔を上げた。

ばさり、と意識して羽を広げれば、目論見通りに視線がくぎ付けになる。

これは彼らと私の境界線。

人と、そうでないものとを意識させるための儀式。

羽ばたき彼らの視線よりも微かに高い場所で動きを止める。

そのまま白檀様にするように、優雅に一礼して見せた。

髪を揺らす角度すら意識し、首を僅かに傾げ唇をゆるりと持ち上げる。

自分の容姿が人間に對しどれ程の影響力を持ち得ているか、私はきちんと理解している。

人では持ち得ない肌理細かく透けるような白い肌。頬は桜色に染まり唇は何もせずとも桃色に色づく。

光を紡いだような輝く金糸の髪は右サイドで結い上げて波を打ちくるくると流れれる。

長い睫に彩られた碧の瞳はエメラルドですら及ばないと吟遊詩人に言わしめた。

小悪魔の姿であるためメリハリはないが、それが返つて華奢な身体を引き立たせる。

幼い容姿に悪戯っぽい笑みを浮かべれば、人どころか魅了に慣れている魔族ですら『墮ちず』にいるのは難しいと、白檀様に言わしめた小悪魔が一人誕生だ。

「こりゃいまし、『魔者』様方。よつゝ『魔王の城』へ」

「いらっしゃいまし、『勇者』様方。ようこそ『魔王の城』へ」

朗々と響く声で本音とは逆の言葉を口にする。

厭味を存分に乗せた笑顔は、けれども愚鈍な人間たちには通用しなかつたらしい。

白いローブを纏った少女はまるで天使にでも逢つたように胸の前で手を組み、格闘家らしき青年と小さな少年は息を忘れて見入っている。

目を細めて微笑みかければ、一拍の間を置いて茹るほど勢いで頬を染め上げた。

黒い羽の羽ばたきを弱め床に舞い降りる。

ここで羽が数枚散れば良かつたが生憎悪魔の羽は天使のそれのように鳥のようには出来ていない。

つま先から着地し伏せていた瞳を上げる。

真正面に立ちながら、けれど見上げる形となつた勇者と視線が絡み合つた。

そこでもたしても違和感に襲われる。

蒼の瞳を眇めた彼から、戸惑い以外の感情を見つけられないのだ。不思議に思い小首を傾げる。

「私の顔に何かついておりますか？『勇者』様」

問いかけに、随分と間をたっぷりと置いた後、漸く口を開いたのは目の前の青年ではなく周りを囲む『その他』の人物だった。

割り込むように間に入り込み、目を輝かした少女は何を考えたのか
私の両手を両手で包み、しゃがみこんで視線を合わせてきた。
その勢いに微かに押され、思わず身を引くも引きつった態度に気づ
きもしない。

「あの、私！私の名前はシェリルって言います！職業白魔術師で、
回復を専門にします」

「俺はアイルだ、お嬢さん。ところで君、お姉さんいない？」

「馬鹿なこと言ってないでどうじょ。　　僕の名前はウェイ。天

才黒魔術師さ。君、僕よりも小さいね。気に入つたよ

わっと群がる彼らに一瞬瞳を眇め、悟られないように小さく息を吐
き出す。

この感覚は、遙か昔にも一度だけ感じたものに酷似していた。

群がれる煩わしさに眉を顰めたくなるが、相手は主の客人と幾度言
い聞かせ特大の猫を被る。

本音を言えば彼に仇為すかもしれない存在に笑顔を向けるのは嫌だ
つたが、何とか心を落ち着かせた。

私が誰かを忘れ因う人間を一瞥し微笑むと、全てを有耶無耶にする
ためまだ一言も話していない青年に向かう。

「こんにちは、レイノルド」

「え？」

「私があなたの名前を知っているのが可笑しいかしら？」

「…………」

難しい顔をして沈黙を保つ相手に、疑惑は確信に変わる。

蒼い髪に蒼い目。この世界で唯一の色を保持する勇者様。

けれども逢つ度に伸ばしていた髪は短く、結わえていた飾り紐もな

い。

覚えている『人』と重なりながら、けれども決して同じではありません。

ふつと唇が弧を描く。所詮人間などその程度のものだつたのだ。

「この世界の勇者の名前は全て同じでしょ」「レイノルド・ラッチ

」

正確に言えば、俺の名はレイノルド・F・ラッチェだ

眉間の皺を解くことなく重々しく告げられる。幾度も見てきた顔なのにこんな表情を向けられるのは初めてで何やら新鮮だ。

「何故、俺の名を?」

「私はこう見えてもあなたの方の数十倍は生きているの。あなたより

前の勇者たちも全員が『レイノルド』を名乗つたわ

「あなたは俺より前の勇者を』存知か』

「ええ。私は『魔王』様の側近ですもの。『勇者』を知つているのは当然でしょ」「

「そうか」

それきり黙りこんだ青年は、これ以上話を続けるつもりはないようだつた。

「それで、君の名前は何て言うの？お嬢さん」

脂の下がった表情で、問つてくる男に少しだけ迷う。果たしてこれに応えは必要だろうか。

しばしの沈黙後、彼に返事をしたのは私ではなく別の声。

「彼女の名前は伽羅と言つ。そして、僕の名は梅香。好きなように呼んでくれて構わない」

「何故出てきたの？」

「君が困つているように見えたからね」

ひょいと背後から抱きかかえられ視界が一気に高くなる。近くなった藍色の瞳は飄々とウインクした。

はしたなく舌打ちしそうになり慌てて堪える。

認めたくないが今この場にいるのは客人で、はしたない真似は白檀様の顔に泥を塗るのと同じ行為だ。

同族に抱き上げられていることで十分に私の面子は潰れたと思うが、苛立ちに任せて行動するには『えられた役目に背くも同じ』。

「キヤラ？キヤラって言つの？可愛らしい名前ね

「キヤラちゃんか・・・うん。君にぴったりだ」

微笑ましそうに頷く彼らにうなづく。私たちの名前は彼らの

国にはない発音なので浮いた発音が耳障りだった。しかも自身よりも遙かに年下の相手に『ちゃん』づけ。自国の民にすらそんな呼び方はされない。虫唾が走りそうではあるがそこは気合で乗り切った。

「呼び捨てで十分ですわ。私は今回あなた方の案内役を仰せつかつておりますもの」

精々ふんわりと微笑めば、了解の言をあっさりと得れた。正直少し話しただけでこれ程に疲れる彼らの相手を一週間なんて気が遠くなリそうだ。自分を抱き上げる腕を叩けば、あっさりと床に下ろされた。

毛足の長い絨毯に足を下ろせば、赤い糸が足首を擦る。

「それでは、勇者様方。魔王様の御所へお連れいたします

こちらを見詰める蒼の眼差し。懐かしくもあるそれに笑いかけ踵を返した。

隣を歩く幼馴染は何処となく機嫌が良さそうに見えた。

今にも鼻歌を歌い出しそうな雰囲気で、ショリルと名乗った白魔術師と会話をしている。

話題が豊富な梅香は『さる』とのない話題で女性を楽しませるのが得意だ。種族を問わない女説しなのは知っているが、その手腕を目の当たりにするのは久しぶりだ。

だがどうせ説しこむなら全員を会話に巻き込んでくれればいいのに。心の中で小さく毒づく。

『何、伽羅。妬いてるのか?』

『馬鹿なことを言わないで。あなたが一人しか相手をしないお陰で残りの全てが私に回っていることに腹を立てているのよ』

『でも久方ぶりの勇者様だらうへ、『さきない』会話があるんじやないのかい』

『厭味のつもり?』

『まさか』

くつくつと笑う声が脳裏に響く。思念だけの会話は聞き取られる心配がない分安全もあるが、同時に自覚するよりも深くまで考えを読み取られる可能性がある。勇者たちとの会話の一方で続けるには梅香は油断がならない相手だ。一方的に繋がっていた思念を打ち切り、馴れ馴れしくも肩を抱いてきてきた男をかわす。

「こやあ、でもこんなに可愛らしい子が出迎えてくれると思わなか

つたな。最悪いきなり命を狙われると考えていたし」

「そうだね。命を懸けてここまで来たんだ。どんな化け物が現れるかと思つていたよ。話が出来るのかも怪しいと思つていたし」

「だな。ところが蓋を開けてみれば話も通じて見目麗しい美少女の登場だ。正直、キャラちゃんくらい可愛い子にお目に掛かつたのは初めてだよ。これじゃ我が国自慢のお姫様も姿が露むね」

「不敬だよ、イル。少し前までは姫、姫と煩かつたくせに」

「その通りだ。魔族は力が高い者ほど見目麗しいと聞く。気を抜きすぎるな。ついでに年を考える。色目を使うには相手が幼すぎる」

「レイノルドは堅物だな。折角こんなに可愛い子とお近づきになれるチャンスなのに」

ひょいと肩を竦めた青年の暢気さは天晴れなものだ。見た目に騙されるなど親切に忠告してやりたくなるくらいの馬鹿である。

幼い見た目に騙されること無かれ。美しい見た目に騙されること無かれ。

綺麗な薔薇に棘があるのは、全世界で共通であるつものを。ふわり、と微笑を浮かべれば、見詰めた相手は息を呑み耳まで顔を赤らめた。

私相手に人間が発情するのは良くあることだが、この姿でも簡単に墮ちる人間達には幼女趣味が多いのだろうか。

目の前の男に欠片も興味がないので確認する氣にもならないが、今回もその他の人間は簡単に御せそうだった。

「ねえ、キャラちゃん」

「何ですか？」

「君は魔王にとつてどんな役どころになるのかな？」

「役どころですか」

「やつだね。君は見たところそこの大男に比べて小さく華奢だ。僕ですら押さえ込めそうに見える位に」

侮辱とも取れる言葉に田を細める。すると私の怒氣を感じ取つたらしい梅香が、くすくすと笑いながら間に入つた。

「そこまでにしておいた方がいいよ、君たち。彼女はこう見えて魔王様の第一の側近だ。そして俺と同い年の幼馴染もある。見た目に騙されてはいけないよ。彼女とて千年に近い時を生きた魔族だ」

「千年！？」

「そうだ。勇者君。君の『先祖様である初代レイノルドを迎えたのも彼女だよ』

何処か挑戦的な色を交えた瞳を向ける梅香は、先ほどまでの陽気をすっぱりと脱ぎ捨てていた。感情を露にしているわけではないけれど、確かに違いを感じたのかレイノルド以外のメンバーは顔を引きつりせる。

久しぶりなので忘れていたけれど、そう言えば代々の勇者と梅香の関係は中々に最悪だつた。

今回の勇者はどうなのだろう。

唇に指を当て観察すれば、眉間の皺を深めたレイノルドはゆっくりと口を開いた。

「それを俺に話してどうしようと云つんだ？俺は初代ではないし、話題に出されても困る」

「へえ。それが君の出した答えか

「何がだ？」

「いいや？ 判らないならそれでいい。所詮僕らは相容れない存在だと確認しただけだ」

唇を歪めた姿は普段の飄々とした態度からは考えられないほどに、実際に魔族と呼ばれるに相応しいものだった。

唐突にそれを向けられたレイノルドは戸惑いの眼差しをこちらに向ける。

一つため息を落とすと、過保護な幼馴染の袖を引っ張った。彼の理性は普段はしつかりしているのに、相性の悪い勇者相手だとすぐに振り切れる。

「梅香。無礼よ」

「そりかね？」

「過剰な態度は白檀様のお顔に泥を塗る結果になるわ。自重しなさい」

「そりだつた。君の最大の基準を忘れるところだつたよ。悪かつたね、勇者殿。僕はどうも可愛らしい幼馴染に関しては理性が緩むらしい」

「ああ、それ判ります。キャラちゃんは可愛らしいですね」

「いいや。この子の本当の姿を見たら、さすがにその台詞はぱっと出てこなくなるよ。まあ、危うげな雰囲気は変わらないけれど

「本当の姿？」

首を傾げるシェリルに、唇の前で指を立てた梅香は綺麗にウインクを決める。その仕草にぞわぞわと鳥肌が立った。相変わらず気障な男だ。

「これ以上は秘密だよ。それに知らない方が君たちのためもある。深入りはしない方がお互のためだ」

「でも・・・」

「折角の滞在を無残なものにしたくないだろ？僕たちも君たちにはいい記憶だけを残してもらいたい。ねえ、伽羅」

「そうね。その為にもその悪い手癖を働かせないように気をつけて頂戴。梅香は魔界きつての女誑しですわ。シェリル様もお気をつければせ」

私の言葉に目を丸くした少女は、ふわりと頬を淡く染めた。

赤くなつた頬を両手で押さえ込み、隣を歩くレイノルドに視線を送る。

その姿にピンと来て、横目で梅香を見れば面白そうに腕を組んで見物していた。

忠告した端からつけこむ隙をとれるなど愚かだと思つが、素直そつな少女には伝わらないだろう。

その気になつた梅香につけられる薬はなく、飽きるまでは放つておくのが一番いい。

下手に関わつたら思わぬ火の粉が飛び散りそうだ。

最後の角を曲がれば謁見室への扉が見えた。

一度足を止め勇者一行を振り返る。

一人一人と視線を合わせればさすがにここが何処か理解できたのか先ほどまでの暢気な雰囲気はなりを潜めた。

「これからが謁見室となります。心の準備は宜しいでしょうか？」

先ほどまでの騒がしさを一変させ、引きつった表情を浮かべる彼らにもさすがに白檀様の威光は理解しているらしい。緊張に固まる中、それぞれの武器を握り締める。

その態度は反乱分子と見なしても良いものだと注意しても良かつたが、所詮彼らの力では傷一つつけることは適わない。この世界で、白檀様を傷つけられる可能性がある人間はただ一人だ。

そのただ一人に視線を向ければ、何故かこちらを見詰めていたら彼と視線が絡む。

他のメンバーとは違い彼の手は武器に掛かっていない。意外に思い目を丸くすれば、眉間に皺を深深と刻みこんだ。

しかめつ面を曝したレイノルドに小さく笑う。

「あなたは、武器を手にしなくて宜しいのですか？」

「俺が武器に手をかけたなら、あんたは容赦なく俺を殺しに掛かるだろうが」

「断言なさるのですか？私はあなたの仲間が武器を構えても何も言わなかつたのに」

「こいつらと俺は違う。俺はこの世界の勇者で、唯一魔王に対抗しうる人間だ。そしてあんたは魔王の一の部下で彼にこの上なく忠誠を誓っている。本当は今だって魔王に武器を向けようとしているこいつらを消したくてうずうずしているはずだ」

「・・・・・随分と、私を判つてているような仰りようです」と
「はずれていたか？」

真つ直ぐに見詰めてくる瞳に微笑みで答える。子供だからと侮るところがない姿は確かに覚えているものと面影が重なった。私たちの会話を聞いていた他の面々は、青い顔をして武器を持つ手に力をこめ

る。

漸く私が何者であるかを理解してくれたらうしい。

不必要に無礼を働く気はないけれど、馴れ合いつまつはないので警戒するのにはいい心がけだ。

勇者」一行を名乗るのであれば、それくらいは始めから判つていて良さそうなものだけれど。

「さあ、伽羅。魔王様がお待ちだ。こんなところで何時までも無駄な時間をとるものじゃない」

「そうね。それでは皆様、くれぐれも粗相のない様にお願いいたしますわ。間違つてもそのお手にあるもの魔王様に向けられたのなら、私は困つてしまつて何をするか判りませんもの」

「君たちが君たちの王の為に命を懸けるように、僕たちも僕たちの王の為になら命を懸けること、忘れないように頼むよ」

青白い顔で頷いた彼らの指が武器から離れるのを見て、私は扉に向き直つた。

『これこれ。そんなに齎すものじゃないよ、お前たち』

響き渡る声に、目を眇める。すかさず隣を見上げれば、梅香は眉を下げて苦笑しながらひょいと肩を竦めた。

どうやら予定外の事態に眉間に皺を刻む。

お戯れが大好きな方は、待ちきれなくなってしまつたらしい。子供のような部分を持ち合わせているのを理解しているので今更驚くことはなかつたが、けれど十分に頭が痛い事態だ。

私と梅香が何かするよりも先に扉が開き、赤い絨毯が敷かれた先にいる方はゆつたりとした王座に腰掛け行儀悪くも肘掛け腕をついていた。

指先を動かす仕草にふわりと身体が浮く。圧倒的な力だがそれが私の身体を傷つけるはずがないと知つてるので身は委ねた。ふわりとした力に包まれ視線が高くなる。眇めた蒼色の瞳と一瞬だけ視線が絡み、それと知られぬように目を逸らした。

面白そうに唇を持ち上げる幼馴染はどうやら状況を見守る事を選んだらしい。お気に入りの白魔術師の隣を陣取ると、ひらひらと掌を振つてよこした。

平行移動する視界をそれとなく眺めると、僅かな後に自分を包んでいた力が緩むのを感じ自身の力を展開しようとする。だが、さらに大きな力に握りつぶされ僅かにバランスを崩した。

「白檀様！」

小声でその力の主を奢めるも、何を思いついたのか楽しそうに瞳だけで笑う彼は私を膝の上へと抱き込む。慌てて控えている菊花に視

線をやれば肩を竦めお手上げとジェスチャーで伝えてきた。

本当に役に立たない男だと唇をかみ締め睨み付けるが、何処吹く風と相手は涼しい顔のままだ。

どうにかして状況を立て直そうと身を捩るも、それほど力が籠められていなそうに見える彼の腕を払いのけるなど無理な所業だつた。仕方なしに彼の膝に抱かれたまま顔を上げれば、最早こちらを見ていない視線は一直線に勇者一行に向いていた。

「白檀様」

「ああ、何だ、養い子？」

「機嫌が良さそうですね」

「そうだな。そうかもしねない。なあ、俺の養い子。あの勇

者は本当に俺を退屈させぬな」

黒い瞳を眇めて喉を震わせる白檀様は、勇者の異変に早くも気づいたらしい。愉快そうに唇に手を当て、くつくつと声を漏らす。

その姿に、不敬だと知りつつも私は眉根を寄せて反感の意を露にした。

昔から白檀様は何かと言つと勇者の肩を持つが、私はそれが気に入らない。

厭きないから気に入つてゐる。

その言葉を彼に貰える存在など、一握りも居ないと誰より知つていたから。

不機嫌になつた私に気づいたのか、宥めるよつに大きな掌が髪を弄る。優しく触れる様はまるで慈しむようだと勘違いしてしまいそうで、俯き唇をかみ締めた。

だがそんな反応など一瞬で、この身体になつてゐる間は普段よりも大きく感じる掌をやんわりと両手でどかす。

愛しさを恋しさが超える前に、この感情を整理する必要があつた。

「白檀様。勇者一行を御前へとお連れしますが、宜しいですか？」

「ああ、構わぬ」

「伽羅はそのままで？」

「ああ。 反応を確かめたい故な」

まるで私の想いを見透かすようなタイミングで割り込んだ菊花は、何食わぬ顔で白檀様へと語りかける。

感情の色のない言葉。白檀様よりも年上の彼らしい制御の行き届いた声を多少羨ましく思うが、今はそれどころではないと気分を切り替えた。

白檀様の指示に従い力を使つた菊花は、指を動かし入り口から動かないレイノルド達を先ほどの私と同じように浮かすとそのまま移動させた。

ただ一人術の制御下に入らなかつた梅香は肩を竦めると、瞬間移動で菊花と反対側の白檀様の隣へと並ぶ。

「あんたが魔王か」

口を開いたのは叩頭すらせらず真つ直ぐに突つ立つたままの勇者一行の真中に居た、勇者様本人。

飾らぬ口調と言えば聞こえは言ひが、無礼にも程がある態度に私の髪がふわりと浮く。

危うく力の発現を催そびとした私を、押さえ込んだのはやはり白檀様だつた。

「そうだ」

「俺の名は

「知つて居る。レイノルド・ラッչェだらうへ否、今生ではレイノ

ルド・F・ラッчикだつたか

「何故知つてゐる?」

「何故?それを俺に問うのか?クククッ、愉快だなレイノルド。お

前は本当に俺を厭きさせぬ

蒼色の瞳を剣呑に細めた『彼』は、やはり何故か判らぬらしい。魔王と呼ばれる白檀様が笑う理由も、彼が何故『彼』の名を知つてゐるかも。それが判らぬからこそ更に白檀様が笑いを堪えれぬというのも。

短く刈り上げた海を映した蒼い髪。硬質そうな髪型は私も初めて見るが中々に似合つてゐる。

苛立ちを湛えた空と同じ蒼い瞳。虹彩の色も、中の少し濃い瞳孔も覚えているのと同じ色。覚えていより面立ちは幼いが、それでも十分に記憶と重なる。手に出来た剣だこ、身に纏う褪せぬ銀の鎧。だが私が知つてゐる『勇者』は『彼』とは違ひ、もつと。

「伽羅

「ツ、はい、魔王様」

物思いにふけつてゐる途中で呼ばれ慌てて身を正す。

先ほどとは違ひ距離はないので彼の名は呼ばない。白檀様が名乗らなかつたのはそういう意味だらうから。

姿勢を正した私の頭を撫でると、勇者の顔から視線を逸らし私の耳へと唇を寄せた。

耳に当たる吐息がくすぐつたく氣恥ずかしい。この程度の接触は慣れているはずなのに、彼に対してだけいつこつに慣れなかつた。

「勇者をもてなすがよい。お前の本来の姿をもつて」

「!?」

「魔王様!」

諫めるよつた響きで声を上げたのは菊花で、氣を重くしたのは梅香。私はと言えば驚きで目を見開き硬直したまま、じかうを真つ直ぐに射抜く蒼い瞳を呆然と見た。

だから勇者は嫌いなのだ。

お願いではなく、ましてや懇願でもない命令を耳にした私は、屈辱で唇を噛みただ一人を睨み付けた。

唇を噛み締め黙り込んだ私の頭を撫ると、白檀様は私の脇の下に手を入れひょいと抱える。そしてそのまま自らの隣に置き、静かに立ち上がった。

その一挙一動に勇者一行は釘付けになり、青ざめた顔色ながらも視線を外せないで居る。きっと白檀様の壮絶な美貌と霸気に押されているのだろう。弱き人間にありがちだが、すぐにも意識を失わないところを見ると、なるほど、やはり勇者の仲間に選ばれただけはあるらしい。

ただ一人真っ直ぐに白檀様を見上げるレイノルドの蒼い瞳は揺らがず真っ直ぐに彼を見据えていた。

その瞳の強さが気に入らず、思い切り睨みつける。

よりもよつて白檀様を睨むなど、何という厚かましさか。本来ならすぐにでも首を飛ばしてやりたいが、残念にも白檀様本人が『彼』の存在を気に入っているため果たせない。それが苛立たしく腹立たしい。

殺気を向け気がついたのか、蒼い瞳がこちらを向く。先ほどまでの鋭さが嘘のように消えたその瞳は、過去を思い出させ更に私を苛立たせた。

そんな私の感情に気づいているに違いないのに、喉の奥を震わせた白檀様は私の髪を梳ぐとそのままぽんと背中を押した。

たらを踏み前に倒れこみそうになる私を、横から菊花の手が掬い取る。そのまま何故か片腕で抱き上げられ、涼しい顔をしている男を思い切り睨みあげたがあつさりと流された。

「俺の可愛い養い子」

「・・・はい」

「お前は必ず本来の姿で『彼』をもてなさなければならぬ」

「はい」

「だがそのタイミングはお前に任せよう。ああ、そうだ。いつだつたかの時のように奴隸志望の人間は作るな。魂に刻まれた想いを消すのは手間だし、追い払うのも厄介だ。お前も、面倒は望んでいいんだろう?」

「はい」

白檀様の言葉に深く頷く。

何代か前の勇者の時代、芸術が好きだという魔法使いをうつかりと墮としてしまった経験がある。面倒にも約束の一週間が終わつた後も彼は城の周りをうろつき、結界を張つたまま自分の世界に帰り安堵したのも束の間。次の時代の勇者に会うため時を経てこの世界に戻れば、何故か自分の絵姿を聖女としてそこかしこに残されていた。無駄に絵画の才能があつたらしい彼は、私を天使の如く美化し何故か旅した場所のそこかしこのその絵を飾り、今でもそれは教会や王族の城に飾られているらしい。

次代の勇者に話を聞いた際には背筋を怖気が走つたものだ。

魔王の部下である私を指し聖女とのうとのたまつた挙句、それを歴史に刻み残すなどどうかしている。挙句その絵を残した本人は人を勝手に聖女に祀り上げ永遠の愛を述べたくせに、堂々と妻帯し子供も何人も作つたと言うのだから最悪だ。悪魔である私は誰かを墮とすために自分を使う。それ故別に他の女に手を出したからどうというのではないが、結婚するならその女に永遠の愛を誓えと全力で言いたい。やはり人間の価値感は理解できない。

面白がつた白檀様はその時代の勇者に私の肖像画を持つてこさせたが、慌てて焼却したのでそれを見られてはいなはづだ。私は白檀様には絶対に本来の姿を見られたくないので、その時代の勇者に酷く怒りをぶつけた記憶がある。

確かに、あんな目に合うのはもう御免だし、今は人間の使い魔も必要としていない。白檀様の言葉に頷くと、彼は一つ頷きもう一度勇

者一向に向き直った。

「しきたり通りにこの屋敷に住むのは一週間。その間に人の世界で起きた内容を語ってくれ。魔王である俺との話し合いが勇者の役割。レイノルド・F・ラッシュ。お前が本来の役目と目的を違わずに居てくれるのを願うとしよう。では、また明日。ああ、部屋の案内は梅香お前が致せ」

「は、魔王様」

梅香が礼を取るのに合わせ、私と菊花も頭を下げる。本来ならきちんとした礼をとりたいのに、菊花が手を放さないためそれも叶わなかつた。瘦身であるくせに彼はとても力が強い。現在もぎりぎりと腕に爪を立てているが、全く気にした様子も見せない。この涼しい顔を引っかいたらスッとするだろうが、勇者一行の目があるのでそれも出来ない。

頭を下げていてる間に白檀様の気配も消える。顔を上げれば重圧から開放されたように惚ける人間達が居て、その姿を冷めた目で眺めた。そんな私の静かな苛立ちに気づいたらしい梅香が、苦笑すると手を叩き勇者一行の視線を集める。呪縛から開放されたように視線を集中させた彼らにウインクすると、あくまでペースを崩さず口を開いた。

「さて。では僕が君達を寝所へと案内しよう。全員で眠れる部屋と一人部屋、どちらがいい?」

「もちろん、全員で眠れる部屋をお願いいたします、バイカ様」

「おや?君は女の子なのに男と同じ部屋でいいのかい?シェリル」

「ええ」

「ふふふ、どうやら警戒されてしまったようだね。もちろん、僕は君の願いを叶えるとしよう。他に異論がある者は?」

「俺は、一人部屋にしてもらいたい」

「レイノルド！？」

「何言つてんだよ、お前が居なきゃこことこつ時俺らじゅうじつ
うもないだろ！？」

「そりだよー僕達じや何かあつたときシーリルを守りきれない！」

「先ほどの魔王の言葉を聞いてなかつたのか？話し合いが勇者の役
割だと魔王は言つた。ならば迂闊に手を出すわけがないだろ。違
うか、伽羅」

呼ばれた名にひつそりと眉を寄せる。他の面々と違ひ完璧に発音さ
れた私の名前に、彼は欠片も違和感を抱いていないらしい。ひつそ
りと眉根を寄せる私をじつと見詰める彼の表情は動かず、応えるま
ではずつとこのまま見詰めあわなければいけなさうなのでため息
を一つ落とし仕方なしに折れる事にした。

「ええ。魔王様はあなた方に手を出す気はしません。あなた方
が手を出されるなら反撃はしましうが、何もされぬのに何かする
理由はありませんから」

そう。蟻がうろついていようとも大して気に留めないと同じだ。
噛み付かれたら振り払い潰すが、そうでなければ放つておく。私達
にとつて人間の力などその程度のものでしかなく、彼らが自覚する
以上に遙かに差があつた。

不安に顔を曇らすリシェルに向かい微笑む。作り物の笑顔であつて
も、それだけで彼女の気負いが和らぐのを見て益々笑みを深くした。

「心配であれば扉の前に護衛をお付けしますわ。私の直属の部下に
致します。それでも、心配ですか？私を信じてはいただけま

せんか？」

「・・・いいえ。私、キャラちゃんを信じるわ

梅香は様で何故私はちゃんとづけなのかと問いただしたいが、奥歯を噛んでぐつと堪える。

そのままこちらを見ているレイノルドへ視線を移すと、小首を傾げ聞いてみた。

「勇者様はお一人の部屋で宜しいの? 部下はいじ入用でしょ? つか?」

「いや、必要ない」

「そう。では梅香、案内をお願い」

「了解」

私に向け小さく微笑んだ梅香が指を鳴らすと、勇者達の姿は消えた。気配がしつかりと消えるのを待ち、自分を抱き上げたままの菊花を殺氣を籠めて睨み上げた。

「いつまで抱いているつもり」

「あなたが落ち着くまでです」

「・・・菊花の分際で図々しい」

「ですがあなたは放せと言わなかつた」

「言えなかつたのは見て判つているでしょ? 私を放しなさい、菊花

「花」

「・・・・・はい」

暫くの無言の後頷いた菊花の腕から降りる。だがその手が未練がましく私の服を掴んだままなのに気づき、苛立ちで髪をかき上げた。

「まだ、何か用があるの?」

「食事がまだです」

「食事? お腹が空いたの?」

「はい」

こくり、と冷たくも見える美貌で頷いた菊花を見上げる。淡々とした口調と聲音はとても腹を空かせている様に見えなかつたが、強請るよつに服を引く仕草に肩を竦めると頷いた。

「私の部屋でいいですか？」

「構わないわ」

返事をするのが早かつたか。それとも彼の力の発動の方が早かつたか。

どちらか知れぬが、どちらでもいいと臉を瞑つた。

残り6日。勇者との日々はいつもどおり長く感じそうで、私は眉間に皺を深めた。

閑話【菊花】（前書き）

R15になります。伽羅が白檀以外と絡むのが駄目な方は、どうぞ
回れ右でお願いいたします。

しゅるり、と小さな音を立てて髪を結んでいたリボンを解く。極上のレースを利用し作られたそれは菊花が自分で選んだものだが、生憎伽羅が気に入ることはなかつた。

彼女の嗜好はあくまで白檀が中心であり、彼の名にあるのに彼女は『白』を嫌つている。それもこれも彼女が敬愛する白檀自身が白を嫌つてゐるからで、それ故に彼女は極力白を身につけようとしなかつた。

解いたリボンを投げ捨てれば、波打つ金の髪がさらりとほどけ腰元まで流れる。小悪魔の姿であるのと、白いドレスを纏うことから生娘のようにあどけなく無垢に見える様子に、喉の奥で小さく笑えは掛けていた眼鏡を飛ばされた。柳眉を顰める伽羅に笑いかけ気にせず顔を近づける。菊花の場合眼鏡は別に視力強制に必要なものでもないので、そのまま白くまろい頬に口付け小さな体を抱き上げた。華奢な体は比喩表現でなく空氣より軽い気がする。抱きしめれば彼女特有の熟れた果実のような甘い香が漂い頭がくらくらした。

こみ上げる愛しさを押さえる術を知らぬまま、菊花のベッドへとその体を下ろす。白いシーツに埋もれるように置かれた伽羅は、碧の瞳の色を濃くし菊花を見詰める。

カーテンが締められていない窓から、人間界でも美しいと感じる月の光が差し込み、きらきらと金色の髪を輝かせた。黄金の海のように美しいそれは、指に掬つてもさらさらと音を立てて流れ落ちる。気紛れで留めて置けない様が彼女の本質を現しているようで、伽羅の前でしか見せない笑顔でくすりと笑つた。

菊花が目の前の悪魔にあつたのは、もつ軽く700年以上は前にならう。その時から彼女の美貌は秀でていたが、時を経て益々磨きが掛かってきた。

天界でも見ることが出来なかつた見事な金色の髪に、宝石より美しい碧の瞳。肌はぬけるような雪白で、華奢な体は抱きしめたら折れてしまうのではないかと思えるくらいだつたのに、それでも抱きたいと願う気持ちが抑えきれない強烈な欲望を抱いた。その感情の強さに、自分でも驚いたほどだ。

一般に天使は博愛主義といわれている。それは実際に本當で、天使族は漏れなく誰にでも平等の愛を注ぐ。誰にでも等しく公平に。それが天使の特徴でもある。

しかしながら、その天使の博愛の意味を正しく理解する存在は、同じ天使以外にはいないう。

天使の博愛は一種類ある。文字通り全てを愛する博愛と、誰にも関心がない故に平等性を保つ博愛。

菊花の場合は当然後者であり、その中でも変り種と呼ばれる存在だつた。

天使は常に微笑みを浮かべ愛を説く。それなのに菊花は笑顔を浮かべるのが極端に苦手で、むしろ楽しくもないのに笑つている同僚を見て虫唾が走つたものだ。悪魔と違い淡い色を纏う天使。白を好むのも相俟つて人には敬愛されたが、その実質は菊花の好むものではない。関心がない故に平等でいられた菊花は、微温湯のような生活を受け止めていた。

「 伽羅 」

蕩けそうな声が自分から出でているなど、700年以上経つた今でも信じられない。人の身であれば自分は幼女趣味に分類されるのかもしないと今日来た勇者を思い出し、また小さく笑つた。

腕の中の存在が愛しい。この存在だけが愛しく、好ましいために菊花は墮天した。

博愛を謳う天使は特別を作つてはならない。王である神はあくまで平等を説き、それを守るのが天使の主文だ。それを守れなければ、

卑しいとされる魔に身を墮とさなければならない。そしてそれは天使がもつとも恐れることでもあった。

細い首筋に口付け、ちゅつと吸えれば赤い華が咲く。自分を刻み付ける行為は楽しく心が踊る。色が白い伽羅には簡単に痕が残り、それがまた歯止めの利かない行為を助長させた。

ふつと漏れる息が耳に掛かり、ぞくりと背筋を駆け上るのが快感だと理解したのはいつだつたか。噛んでも殺しても漏れる愛しさに、胸が苦しく呼吸が困難になる。

魂を握られている感覚。息すら難しいほど荒れる感情は彼女が原因であるのに、菊花を留めるのもまた彼女の存在だった。愛しくて恋しくて仕方ない。

唇で鎖骨を辿り、ドレスから見える胸元ぎりぎりに唇を落とす。吸い付けばやはりあつさりとしるしが残り、とても気分が昂揚した。もつと、もつと望む声に逆らつ気は起こらず、舌で辿ると薫りどおりに甘い体を満足するまで舐め回す。どんどんと薫りが濃くなり、菊花の理性を徐々に奪つた。

「愛します、伽羅」

博愛主義の天使は一人に愛を告げることも出来ない。

菊花は伽羅に恋したがために墮天した。

彼女に唯一の愛を捧げたいがために墮天し、そして彼女のものとなつた。

「あなただけを愛しています」

天使は悪魔を忌避する。しかしながら唯一の愛を捧げるためにはとても都合がいい。

墮天した天使は悪魔と同じ。だからこそ、伽羅も菊花の言葉を信じ

る。

悪魔は唯一の愛を囁く。見せ掛けだけでない想いを一途に捧げる。

それを愚かだと思っていた菊花はもう存在しない。

ばさり、と意識して羽を出せば、在りし日には白かったそれは漆黒に近い色になっていた。

三対六枚の羽を見て、伽羅は満足そうに瞳を細めて笑う。

この色に羽を染めたのは伽羅で、ここから先菊花が生き続ける限りこの色が白に戻ることはないのだろう。

悪魔から天使へと変わるものも稀に存在するが、菊花にはそれは望めない。

「あなたが恋しい」

甘つたるい氣は伽羅のもの。それを吸い込むたびに菊花はどんどんと墮ちていく。

塗り替えられる体の構造。否、体だけでなく魂から作り変えられる。目の前の存在が失くしては生きていけないよつに。

それは何とも喜びに満ちた変化で、どんどん深まる愛情に眩暈がしそうだ。

愛しくて恋しくて仕方ない。

彼女が願うから菊花は白檀の側近へと納まつた。そしてこれからも彼女が願えば何だつてしてやるのだろう。

「伽羅」

桃色の唇に唇を合わせれば、菊花にひとつて極上の氣が奔流となり流れ込む。

彼女の唇を舌で開け、辺り、貪れば貪るほどその甘く美味しい伽羅の気が体を支配するのが判つた。

甘美な束縛に抗う術はなく、もつと自分を堕として欲しいと望む。生きるために摄取しなくてはいけない伽羅の生氣。これが絶えれば菊花はただ死に絶えるしかなく、それを望まれたら喜んでそうするだろう自分を知つていた。

月明かりに照らされた部屋の中、ただ一人に愛を囁くために堕天した愚かな男は、満足いくまでその原因を貪つた。

静かな夜、世界よりも大事な伽羅は、確かに菊花の腕の中に存在していた。

目が覚めてまず感じたのは、重いの一言だ。

腰に回った腕は、子供の姿になつてゐる私の足よりも太く、緩く抱いてるよう見えながらも絶対的に抜けない拘束。自身の足を使い挟むようにして私を抱きしめる相手は、色々な意味で重い。

取り敢えずは物理的な重さを除去しようと自身の魔力を使い拘束する腕を無理やり？ぎ放せば、その力で目を覚ましたらしい菊花が、眼鏡をしてるときにはついて見せない甘つたるい表情で私の姿を瞳に映した。

ところに蕩けるのではないかと思える柔らかな顔は、私個人においては割りと良く見かけるものだが、城の他の面々が眺めたなら腰を抜かすかもしれない。むしろ贋物と勘違いし、武器を向けられるかもしね。むしろ向けられると目が覚めた瞬間から冴える思考を働かせつつ、上半身を起こした。

「・・・おはよひぞいります、伽羅」

「おはよう、菊花」

魔族にはない銀色の瞳の瞳孔が大きくなり、身を起こした彼はゆっくりと唇を近づけた。

それを避けるでもなく受け、力を渡す。暫く口内を我が物顔で蹂躪した舌は、満足したのか唾液の橋を作りながらゆっくりと離れていった。途切れそれが口の端を汚すのを見て、嬉しげにまた近寄ると唇から顎を舐め取る。

「いい加減になさい、菊花。もづ、朝よ」

「駄目、ですか？」

「駄目。私は、白檀様を起こしに行くわ。離れなさい」

「・・・御意に」

強めに放たれた言葉に、渋々と菊花が身を放す。自分とは違う温もりが完全に自分を解放するのを感じ、開放感に背筋を伸ばした。カーテンが引かれているわけでもないのに、この部屋は薄暗い。否、この城の全ての部屋に日の光は届かない。現在白檀様が存在するこの空間は太陽を拒絶して作られている。故に、この部屋に光が射すなら夜に輝く月明かりだけだ。

裸のままベッドから降りると、自分の体を一瞥しため息を吐きたくなつた。

体中に散らばる赤い華。その数はひとつ控えめに断じても粘着質であり、つけていない場所を探す方が苦労する。

胸、鎖骨、腹、腕、腿にはもちろん。手の甲足の甲まではあるのは、些かいきすぎではないだろうか。しかし文句を言つても彼がこれを止めた事はないので、押し問答になるのも面倒で現在は黙認している。

どうせ、簡単に消せるものだつた。

指先をふり力を使えば、みるみる間に体から痕が消える。鋭い視線が体に刺さり、菊花が私を見つめているのも気づいているが、全て無視。私の体に他人の痕を残す予定はなく、それはこれからも変わらない。

私の体に痕を残していいのは白檀様のみで、他の誰かにそれを許すつもりはないのだから。

もう一度指をふると自分の魔力で衣服を作り出す。黒い布が幾重にも広がるドレスがあつという間に出来上がり、頭には白檀様から頂いたリボンを結わえ準備は完了した。

人のように布で出来た衣服を纏つのも悪くないが、急ぎの場合は自分で作る方が手つ取り早く理想のものが出来る。襟ぐりには纖細な

レースがあしらわれたそれは、以前白檀様に買つて頂いたドレスを模倣したものだった。

人間と違ひ風呂に入る必要もないが、暫し考えると伝心で香へと風呂の準備を頼んでおく。魔法で体を清潔に保てるが、ゆつたりとした湯船に浸かるのもいい。人間達の趣向の中で数少ない感心した一品だった。

それに風呂は気分の切り替えに丁度いい。この後しなくてはならない義務を考えると、少しは気を落ち着ける必要があった。

「伽羅

「何？」

「いいえ、何でもありません」

中途半端な部分で言葉を区切つた相手を、首だけで振り返る。しかしながらすでに衣服を纏い、眼鏡を身につけた菊花からは何か感情を読み取ることは出来なかつた。

ひょいと肩を竦めると、移動しようと力を使う。普段は歩くのだが、起床の時間が迫つていた。

「それじゃあ、また後で」
「はい。また、後で」

簡潔に別れの挨拶を済ますと、意識を彼へと飛ばした。

I | 四三【2】（前書き）

R15です。残酷表現がありますのでお気をつけ下さい。

この城の中でも一際大きく立派な造りの扉を前に、軽く深呼吸する。宝樹と呼ばれる樹を切りぬいたドアは纖細な細工と掘り込みがしてあり、磨きぬかれているため触りごこちも滑らかだ。

小悪魔の状態でなくとも見上げる高さのそれは、今の状態だと私はドアノブが顔の前にある。じつとそれを見てから心を決め、ノックを四回する。心を落ちつけるために瞼を閉じ、一拍おいて正面を見た。

「おはようございます、白檀様。伽羅です。失礼します」

私はこの城で　　否、幾つも存在する世界の中で、唯一かの人の返事を待たずとも室内に入る許可を経ている。それは彼の腹心である菊花や、同じく側近を勤める梅香、そして彼の身内である誰もかもを含め得られていない特権で、私はそれをいつでも行使できる立場にあつた。

本当は名乗りすらいらないと言われているのだが、それでも一応名乗るのは自分が覚悟を決めるためだ。

白檀様の部屋に、足を踏み入れる覚悟を。

暫く待つても返事がないのでいつも通りドアノブに手をかけると、自力で回すには重たいそれに魔力を注ぎ軽く捻る。そうすると僅かな軋みもなく、ドアは内側に開いた。

白檀様の部屋は、普段から混じり気ない闇に包まれている。元々この時期この世界のこの場所に彼が光りが注がないよう操作しているのも理由の一つであったが、さらに幾重にも遮光カーテンが引かれ新月の夜より暗い部屋が出来ている。

私は悪魔なので闇の中でも視力は衰えないが、人であれば指の先すら見えない闇に恐怖を抱くに違いない。

事実以前乗り込んできた人間を、白檀様の部屋と似た造りの牢獄に居れたところ、三日と持たず発狂した。闇は己の中の恐怖心を引きずり出し、想像力を膨らませる。思いこみで人は死ねると白檀様は仰つたが、実際にその通りだった。

悪魔は基本的に光りより闇を好むが、白檀様の好惡は徹底している。そして彼はこんな闇の中でないと眠れないと、私は知っていた。

寝室専用になつてゐるこの部屋は、寝酒を楽しむためと称し皮張りのソファーガ用意してある。寝転びながら酒を嗜むのは行儀が悪いと幾度注意しても利き入れてもらえず、そのソファーはもう何百年も代替わりしながら低位置にあつた。

窓は大きいものが三つ。朝の間は全て遮光カーテンで覆われている。それは、大体成体形の私と同じくらいの大きさがある。他は毛足の長い肌触りのいい絨毯。天蓋付きのベッド以外に置いてある家具はそれくらいで、物欲のない主の性格を明確にあらわした部屋になつていた。

室内に一步足を踏み入れると同時に足を覆つていていたブーツを消す。毛足の長い絨毯を味わうためと、白檀様はこの部屋で履物を履くのは私に禁止していた。

小さい歩幅で五十歩ほど歩いた場所に目的のベッドはあり、その上の皇かなシーツの上で目的の人が眠つてゐるのが見え、自然と顔が綻ぶ。入り口から数歩の場所で羽を出し広げると、羽ばたき目的の場所まで飛んだ。

音を立てないよう極力氣を使い黒いシーツの上にふわりと膝から降りる。ちょうど白檀様の顔の横だが、大柄な彼が五人眠つてもまだ余裕がある広さのそこは、私一人乗つたところで狭さは感じない。

低反発の魔力因子を集めて造られた極上のベッドはきしむ音すらなく私を受け止める。闇の中でも見間違えない美しい彼に手を伸ばすと、額の髪を搔き上げキスを落した。

「おはようござこます、白檀様。朝ですよ」

「・・・・・・・」

「起きてください」

もう一度、ちゅうとリップ音を響かせながらキスをする。朝の挨拶と教えられたこの仕草は、私が白檀様に拾われてから毎日欠かさず続けられる日常だ。何があつてもどんな場合でも、何処に居ても変わらない所作は、それでも衰えぬ胸のときめきを呼び起す。

ゆつたりと眠りから覚めるように梳いている髪に触れる手すら熱く、胸が高鳴り頬が熱くなる。幾度繰り返しても緊張するが、この瞬間ほど愛しいものはない。

眉を寄せ寝返りを打とうとする白檀様の顔を両手で包むと、今度は頬に唇を落す。幾度か繰り返すと漸く意識が浮上し始め、今だ半分まどろむ黒の瞳が漸く私を映し出した。

「・・・伽羅？」

「はい。おはようござこます、白檀様」

寝起きで掠れた声で名を呼ばれ、頷きふわりと微笑む。偽りでなく心から浮かぶ笑みは、彼の前でだけ無防備に曝け出せた。

そんな私を目を瞬き暫く眺めていた白檀様も、不意に目元を和ませる。そのまま腕を伸ばすと、私の身体を包み腕の中に閉じ込めて髪に鼻を埋めた。

人形を抱く子供の仕草と、それは似ているかもしれない。

きゅつと纖細なガラス細工を扱うように加減された腕に包まれ、う

つとりと田を細め幸せに浸る。養父であるこの人との他愛無い触れ合いは、優しい感情を私に与える。彼だけが私をこんな気持ちにしてくれ、彼だけを心から信用し、信頼していた。否、違う。信用や信頼などではなく、最早心を全て預けていると言つた方が適切だろう。白檀様のためになるなら、私は何でも出来る。彼が望むなら、何でも出来た。

それが例え、自分の心に沿わないことだつたとしても。

伸ばされた腕が頬を撫でる。ぬるり、とした感触と鼻につく匂いは、初めからこの部屋に充满しているものと同じで、塗りつけるように撫でまわす手を止めた。

闇になれた目にしっかりと映るこの光景。ほぼ毎日なので無視していたが、相変わらず彼は慣れない。その纖細さが愚かしくも愛しい。

部屋のそこかしこに転がる元は同族だったろうものの遺体。女性の凹凸が伺える切り離された胴体でしか性別は判断できない。顔だつたものは潰され、腕や耳も転がっている。右足は入り口付近にあつたのに、左足はベッドの脇に落ちていた。無造作にちぎり捨てられたそれは美しくなく、ひとつそりと眉を顰める。

「また、ですか？」

「ああ、まだだ。兄上の悪趣味な贈り物は要らないのにな」

抱きしめる、といつより縋りつくように腕を回され呼吸が苦しくなる。血塗れの彼に抱かれ、私にもとうに血臭は移っている。

彼が黒を好むのは、この血の色が目立たないからだ。乾いても黒は他の色ほど血を反射せず、そして闇の部屋に籠るのも同じ理由。しかし彼のこの脆さを知るのは私だけで、それが密かな優越感を抱かせる。

他の誰を抱こうとも、弱さを曝け出すのは私にだけ。それは彼に捨てる。

われた私の特権で、体をつなげるより遙かに重要な絆だった。

「伽羅。 俺の、 伽羅」

「はい、 白檀様」

「血塗れの俺は醜いか?」

悪魔の癖に、 酷く纖細な質問をする白檀様を可哀想だと思う。 けれど同時に彼が悪魔にしては愚かにも纖細であつてくれてよかつたとおもつてしまう。

だからこそ、 彼は私を拾い育ててくれた。 私を彼のものにしてくれた。 それがどれ程の幸福かなんて、 他の誰にも判らない。

もつと、 依存してくれればいいのに、 と思う。 けれどそれは駄目だと、 頭のどこかで私が呟く。

だからこれ以上は、 と理性が自分を引き止める内に、 顔を上げて微笑みかけた。

「血など洗えれば流れます。 私も血塗れになつてしましました。 共にお風呂に入りましょう」

「・・・ そうか。 そう、 だな」

こんなに小さい悪魔相手に、 安堵のため息を殺す白檀様の泣きそうに歪んだ顔に掌を当て、 もう一度頬にキスをした。

不安定なときにしか呼ばれぬ名が、 彼に安定をもたらしてくれれば良いと、 切ないまでに神でも本来あるべき自分たちの王でもなく、 彼自身へと願つた。

幸せと不幸の天秤はいつだって公平であるとのたまつたのはビーの賢人であろうか。

少なくとも現在の私はそれを身を持つて理解する立場にあり、恐ろしく面倒で嫌だと訴える心を宥めつつせかせかと足を動かした。力を使えば一瞬で終わる移動も、基本的には使わない。急いでるわけでもなし、歩いていれば面倒な相手その一と顔を合わせ、じとりと眉間に皺を寄せた。

しかし私の顔色を読むのを得意としているくせに、空氣は一切読む氣がない幼馴染は細い目をさらに細めて笑顔で近寄つてくる。小悪魔状態の私の1・5倍近くある長身の彼は、あつといつ間に距離を詰めると挨拶の前に私を片腕で抱き上げた。

丁度彼の腕に腰掛ける状態で持ち上げられれば、自然と視線は絡み合つ。殺氣を籠めて鋭く睨みついているのに、飄々と躲すのはさすがと警めるべきなのだろうか。

渋い顔をしているだろう私の頬を、何が楽しいのか知らないが崩れた表情で指先でつつく。思い切り噛み付きたい衝動に駆られたが、どうせ喜ぶだけなので止めておく。代わりに心底嫌々ながら口を開いた。

「何か用なの？」

「はははっ、朝からつれはない伽羅。まずは挨拶からじゃないのかい？」

「挨拶云々をあなたが言えるの？ いきなり抱きかかえて頬を突付けだすような礼儀知らずに、礼儀を守る謂ではないわ」

「手厳しいな。じゃあ、僕から挨拶したら返してくれるね？ おはよう伽羅。今日も飛び切りの美人さんだね」

「下らない修飾語は必要ないわ。私相手に美辞麗句は不要よ。

おはよう、梅香。今日も朝から鬱陶しいわね

「君への愛が溢れて止まらないだけだ」

「怖気が走るからやめて頂戴」

「冗談抜きで一気に鳥肌が立ち、寒氣に体をすり合わせる。

そんな私を情けなく眉を下げる苦笑しながら眺める梅香は、つれな
いなと一言呟いてから移動を開始した。どこへ向かうかなど問う必
要もない。彼が来たなら行き先は一つだと始めから判っているのだ
から。

白檀様との心温まる触れ合いの後、自室に戻った私を迎えたのは相
変わらず白いドレスだ。蝶をかたちどつた纖細なレースが幾重にも
巻かれたドレスは、腰元を大きなりボンで結ぶ子供向けのものだつ
た。

明らかな私の趣味ではないそれを用意したのは菊花に違いない。こ
の城で私に白い服を着せるなんて悪趣味な行動は彼以外は取らない
のですぐに判つたが、この恥ずかしさ溢れる子供向けドレスを一
どんな顔をして選んだか見てみたい。

一瞬そう考えたが、慌てて否定した。普段どおりの顔で選んでいれ
ば詰まらないと思いながらも納得できる。しかしそうでなかつたら、
色々な意味で怖すぎた。

レースの感触が気に入つたのか、スカートの裾についているそれを
指先で弄る梅香を好きにさせていたら、悪戯な指先が裾から潜り込
んで来た。腿を直に這う掌を思い切りドレス越しに抓り、涙目にな
つた幼馴染を見上げる。

「勇者様一行は？」

「もう食堂へ案内したよ。君が指定したとおり、広すぎる場所では
なく人數が丁度入る部屋だ。彼らについているのは君が選んだ人間
の部下。コツクも指示通りに彼らの希望を取り入れた朝食を作つて
いる。君は、『勇者は嫌いだ』と言いながらどうしてそこま

で甘いのかな」

「甘い？どこが？最低限のもてなししかせずに、狭い部屋に押し込めた私のどこが甘いと言つの？私の眷属を彼らの下につけると言つの？人の相手は人で十分。違うかしら？」

「そう、人の相手は人で十分だ。態々君が気紛れで拾つた死に掛けの人間を彼らの世話役として与え、彼らが気後れしないように各自が傍に居られる席を与え、彼らが警戒しないように食事を選ぶ自由を与えた。それを甘さと言わずして何と言うんだい？」

「全ては白檀様のご意思よ。白檀様は私に彼らの面倒を見るよう命を受けているの。あなたも見ていたでしょ？」

「ああ」

「なれば私はそれを完璧に遂行する義務がある。白檀様のお望み通りに全てを滞りなく進める義務があるのよ」

「だから君は彼らに本性をさらすつもりなのか？」

「・・・それを、白檀様がお命じになられたなら、享受するのが私の存在意義よ」

「君は、馬鹿だね」

しみじみと言われた言葉は、彼との付き合いの中でもう四桁以上は聞いただろう。それだけの永き間を共に過ごした幼馴染は、普段の彼らしくない、どこか泣きそうな眼差しを私に向けていた。

その視線の意味を知らないとは言わない。その視線がいつも私を見ていて、どんな想いを持っているか知らないなどと私は言えない。彼の想いは私にとつて価値があるので、それを梅香自身が明確に理解している間は、私達は共にあり続けるのだろう。

「馬鹿で結構よ。そんなの、昔から知つていてるわ」

「追加するよ。ただの馬鹿じゃなくて、酷く残酷で賢い馬鹿だ」

矛盾する言葉を吐き出した梅香に視線を向ける。

いつも通りに一直線にこちらを見詰める眼差しに、その籠められた熱さに私は晒つた。

「随分と矛盾してるのね
「男心は複雑なんだ」

絡めた視線は一瞬。そして次の瞬間には、燃え盛る焰のように熱く宿っていた何かを瞳から消し去った梅香は、にこり、と心の内を読ませぬ笑顔を浮かべた。

口端を僅かに持ち上げることでそれに応えると、私達は試練の場へと向かった。

室内に足を踏み入れた瞬間、三対六つプラスの視線が私を射た。その視線は昨日と違ひ剣呑な意味合いを含んでいるものが多く、何かが彼らをそうさせたのだろうと考えながらも視線を無視して梅香は進む。そして当然私も視線の意味など興味の欠片もないでの無視をした。

私の興味を引いたのはそんな剣呑に向けられた視線の意味ではなく、別にある。

ちらりと瞳だけで室内を見渡すが目的とする相手はその場におらず、梅香に視線を向けても肩を竦めるだけ。何か隠しているのかと思つたが、それにしては反応が薄い。

通常私に対し何か隠し事をしているなら、もつと面倒な感じにテンションが上がり瞳がキラキラと輝いている。隠しておく気があるのかと問い合わせたくなるくらいにあからさまな態度をとるので、本当に知らないに違ひない。

梅香からは答えを得ないと判断した私は、唯一この部屋で答えをくれそうな人物たちに視線を向けた。すると心得たように僅かな微笑みを見せた彼らは、こくりと頷く。

疑問の解消が出来る当てが出来た私は、それまで無視していた視線を正面から受けると鮮やかに微笑んだ。

「このような格好で挨拶するのをお許しくださいませ、皆様。おはよひざいます、昨夜はよく寝れまして?」

「・・・ああ、柔らかいベッドに清潔なシーツに温かい風呂。何かあればすぐにお付きの人間が来てくれて何一つ不満はなかつたぜ」「それは宜しゅうひざいました」

口を開いた垂れ目がちな男が瞳を細めてこちらに答えた。ナンパな

態度を取つていた彼の名前は、確かイルだつたか。警戒した眼差しを向けているが、答えを返しただけまだマシなのだろう。

そ知らぬフリでぱちぱちと瞬きを繰り返し小首を傾げる。視線を向けずとも残り一人の眼光がこちらに突き刺さるのを感じ、梅香の気が揺らいだのを慌てて押さえた。

見た目と反し気が短い幼馴染は、押さえ込まれたのに気がつくと苦笑して私を床へと下ろす。漸く地に足が着き自分の意思で歩けるようになつたので、スカートの端を持ち上げ一礼すると用意された自分の席に足を進めた。

空席は一つ。

梅香と私が座つても余る席に座る予定者は、レイノルドと菊花だつた。一人だけいないのならともかく一人ともいないのなら、菊花が何らかの意図を持ち彼を何処かへ連れて行つたと考えるのが自然だろひ。

面倒になつていなければいいがと内心で苦く咳きながら、微笑みはキープして下げられた椅子に腰掛ける。そして視線をイルに向け、微笑みを浮かべながらどうしたのかと問うてみた。

すると判りやすくみる眉間の皺を深くした彼は、行儀悪くも私を指差して声を荒げる。否、性格には私の後ろを指差して声を荒げた。

「一つ答える。何であんたの後ろに近衛隊隊長のハーケ様とアーク様がいらっしゃるんだ！場合によつちやあ俺たちはあんたに刃を向けなきやならねえぞ！？」

弱い獣が自身より強い獣を威嚇するときのように、声を裏返して叫んだ男に目を細める。

何を勘違いして上から目線で私にものを申しているのか。勇者さえ居なければ彼らは鳥合の集だと自覚すらしていないのだろうか。

それとも私の見た目で勝てると判断しているのだろうか。ならば実力差すら気づかぬ愚か者だと、嗤うことすら億劫だ。

見た目は笑顔をキープしたまま内心で苛立ちを抑える。

『どうする伽羅？彼ら自分の立場が判つてないようだけど』

『さあ、どうしましょう？』

『僕たちが気にするのは勇者の存在だけなのにな。ついでに言えば勇者が倒せるのだって魔王である白檀様だけで、僕たちには対抗策すらないのに。何を勘違いしているのやら』

『本当に。これだから人は愚かでいけないわ』

『その愚かな人を君が拾つてこなければ、こんな面倒もなかつたんだが』

笑いを含んだ声に苛立ち強制的に伝心を断ち切る。

すると今度は飽き足らず実際に声を出して笑い出したので、優雅に微笑みながら彼らに見えない角度で思い切り睨み付けた。

その視線に苦笑した梅香がひらひらと掌を振るのを見届け意識を元に戻す。

私と梅香が放している間にも糾弾だか、質問だか判断が出来ない言葉が席を飛び交い、気がつけば参加していなかつた二人すら発言を始めていた。

億劫になりながらそれを眺め、面倒になつたので問題となつた『人』を指先で手招く。すると先ほどまでは彫像のように動かなかつた彼らは従順に私の傍まで近寄ると配下の礼を取つた。

下から私の顔を仰ぐ彼らの顔は鏡で合せたようにそつくりだつた。唯一の違いは口元に黒子があるかないか。

黒に限りなく近い藍色の髪に、同じ藍色の瞳。顔立ちは人間にしては整つており、切れ長の一重とオールバックにした髪形が特徴と言えば特徴になるだろう。細身でありながらしっかりと筋肉はついて

おり、試しに魔物と争わせたところ、相手は下級であつたが一人は競り勝つた。

梅香に揶揄された通りの拾い物の一人だつたが、ここまで面倒な具合に詰問されて手元に置く筋合いはない。

「ハーケとアークとは彼らの名前でござりますか、アイル様？」

「・・・そうだよ。もしかして、名前も知らないのか？」

「ええ、存じ上げませんでした。何しろほとんど会話も交わしておりませんので」

「どういうことだ？」

「彼らはね、伽羅が拾ってきた人間なんだよ。一月くらい前かな？散歩をしに出かけた伽羅が死に損ないの一人を拾ってきたのは」

「そうね。確かにそれくらい前だわ。もう一月も経つのね」

「こんな面倒になるなら見捨ててこれば良かつたな。懃々助けた挙句に責められるなんて、面倒この上ない。君の甘さはどうしようもないものだよ、伽羅」

何度も面倒だと口にしたのはわざとに違いない。私に聞かせるためと、この場に居る人間全員に聞かせるために繰り返された言葉は、不愉快に耳を打つ。

しかし実際自分でも面倒だと感じていたので反論の言葉もない。黙り込んだ私に何を思つたのか、厳しい表情をしたままのアイルが問いかけた。

「お一人は王女直属の近衛であり、同時に彼女の許婚候補筆頭でもあつたんだ。一月ほど前に魔物に襲われ失踪したと言っていたのだが、君が攫つたんじゃないのか？」

言葉はあくまで問いかけであるのに、彼の心はそれを否定しているようだつた。

始めから私が攫つたと思っているのなら、何故疑問の形を取るのか。回りくどく責められた気がして、歪みそうになる表情を何とか押さえ込んだのは、白檀様に対する忠誠心故だ。私の態度は白檀様への評価へと直結する。それはこの世界以外でも共通する事項で、身に刻まれていた。

自分の怒りを落ち着けようと静かに呼吸を繰り返していると、更に追い討ちが掛かつた。

「悪魔は自分の好みの人間を攫い飼うことがあるという。君は彼らを眷属へ加えたのか？」

その言葉は、きりきりと膨らみかけていた怒りをぼたりと落とした。歯牙に掛ける必要すらない愚考だ。ここまで言わると、最早侮辱されているとすら感じない。

ただ思うのは、やはり面倒だとその一言だけ。

隣に腰掛ける梅香が笑顔で力を溜め始めたのを抑える気は今度はなかつた。白檀様とてこの矮小な人間達を一人一人消しても何も言わないのでないかと思い始める。

だが寸でのところで理性が勝り、梅香の力の発動と同時に結界を張つてやることにした。そうすれば一応自分を守つた相手に対し見方は変わらう。

伝心でそれを告げれば愉しげに笑つた梅香から了承の言質が取れ、彼に合せて力を膨らませる。人である身が受ければ一瞬で蒸発してしまつ程度の力なのに、彼らはそれを感じ取ることすら出来ないらしい。

しかし結局その力を発動することはなかつた。

「伽羅様を貶めるのはやめてもらおう」

「我らは確かに伽羅様に命を救われこの場に存在するのだから」

流れるバリトンは勿論私のものでもなければ梅香のものでもない。啞然と口を開く勇者一行を眺めれば彼らでもないのは判断できた。この場に居るのは残りは一人で、跪いたままの彼らに視線を向ける。すると目を細め慈しむように微笑んだ彼らは、その光を一転させると勇者一行に向ける。

剣呑な眼差しと殺氣に塗れた雰囲気は戦いに慣れた者が発するそれで、勇者一行であるくせに剣すら持たない存在に怯んだ彼らは喉を鳴らし一人に釘付けになつた。

『どうするんだ、伽羅？ 傍観するか？』

『 そうね。この二人が話したのなんて一月ぶりだし、いい余興になるかもしないわね』

『ついでに利用できるといいんだがな』

『ええ』

視線で頷きあつた私と梅香は判断を下す。そして私は足元に跪いたままの一人を立たせると、発言を許した。

I | 四三【5】（前書き）

少し残酷表現が入りますのでご注意ください。

立ち上がった二人は、梅香ほどではないが菊花よりも身長がある。と言つても、その差は小指の関節一つ分程度だが。それでも人にしては長身だろう。

改めて観察したが、ハーケとアーク、彼らの見た目は見れば見るほどよく似ている。きっと双子なのだろう。

どちらがハーケでどちらがアークか知らないが、静かに放たれる殺氣もよく似ていた。彼らの経験値はこの場にいる勇者ご一行の誰よりも高そうで、勇者の一行を名乗る割にはお粗末な実力だと内心で嘲笑つた。

人にしては珍しい黒に近い藍色の瞳をしたハーケだかアークだかが、厭いだ眼差しをアイルに向けた。鋭くした殺氣は衰えないのに、随分と器用なことだ。

「彼女は、伽羅様は、死に掛けた我らの命を救つてくださった」

耳に心地よいバリトンが伝えるのは先ほどと同じ言葉。幾度も繰り返しても状況は変わらないだろうに、愚直に伝えるのは口元に黒子がない方の男。

「伽羅様は我らの生い立ちも、所属も、人としての立場も何もかもご存じない。それでも無条件で死に掛けていた我らに再び命を下さつた。手厚く加護し、何不自由なく生活をさせてください。伽羅様に連れられて一月近く。我らは伽羅様に見返りを求められたこともなければ、何かを強制されたこともない」

先に話した男と全く同じに聞こえるバリトンの声。しかしながら朴

訥でぶつきりぽうな先ほどの男よりも、口元に黒子があるこの男の方が口が達者らしい。

やはり見た目が同じであっても、中身までは同じではないといったところか。

「しかし、あなたの方の失踪は未だに国内を巻き込んでの捜索が続き、中でも許婚候補であつた王女の錯乱状態は酷く、お一人の弟君が連日付きつきりでお慰めをして漸く落ち着くほどの有様で」

「王女が混乱しているだと？」

「ハーケ様？」

「・・・弟が付きつきりで、か」

「アーケ様？」

個人個人で呼びかけたイルの反応で、私は漸くどちらがハーケでどちらがアーケか判断できた。

先に口を開いた黒子のない素つ氣無い口調の方がハーケで、彼よりも弁が立つ黒子がある方がアーケらしい。

ふむふむと頷いていると、梅香からの伝心が繋がった。

『おい、伽羅

『何？』

『何やら少しばかりややこしそうな話しになりそうだが、どうする？僕たちに必要な情報だと判断するか？』

『・・・そう、ね。彼ら一人が国の要人で、王女の許婚候補だと言うのは理解したわ。ついでに何やら泥臭い内容に巻き込まれて瀕死の状態だつたらしいってことも』

『利用できる話になると思うかい？僕はなんだか話しが聞くのに飽きてきたよ。・・・人のいざこざは面倒なだけで、僕たちに有利な何かが出てくるとは思えないな』

『でも余興にはなりそうよ。それに、白檀様はこうこうこうぞいぞいを

聞くのはお好きだわ。退屈が嫌いな方だから』

『君はいつもそればかりだ。 でも、確かに白檀様はお好きだろつね。勇者もまだ戻つてこないようだし、もう少し見物するか』

懲々ため息まで伝心で伝えた梅香を横目で睨みつつ、目の前の光景に意識を戻す。

少し梅香と話している間にも、話は続いていたらしい。ハーグとアーヴの瞳の色が危険色に光つている。助ける際に私の血を一滴飲ませたので、彼らは私の眷属扱いになる。自分のものにする気など欠片もなく、怪我さえ全て治ればどこにでも出て行けば良いと思ってるが、血を抜かない限りは彼らは私の特徴を受け継いでいた。人の身であるくせに、私の名を正確に発音できるのもその所為だ。

私の瞳の色は碧。彼らの瞳の色は濃い藍色。全く違う色合いであるが、彼らが怒ると私の眷属としての力が僅かに発現する。血の一滴程度なら中級の魔物にも及ばないだろうが、人に比べれば遙かに強い。肉体的にも、魔力的にも、だ。

私の血を受け入れてから彼らが怒りに支配される状態を見たことがなかつたのだが、どうやら余程腹に据えかねる言葉をもらつたらしい。ぴりぴりと空気が震え、怒りが皮膚を刺す。

悪魔として力ある私ですらこの程度の刺激を受けるのだ。人である勇者一行はさぞかし強烈な殺氣に身を焼かれる気分でいるだろう。事実、アイルもシェリルもウェイも今にも気絶しそうな土気色の顔色をしていた。いつそ気絶できれば楽なのだろうに、中途半端に戦闘経験があり修羅場を潜つたから意識すら失えないのだろう。

私としては、この程度の殺気に当たられているのに、どうして私や梅香を威嚇出来たのか心底疑問だ。この二人程度の力の方が弱くて判りやすいのだろうか。少なくとも、レイノルドであればこうはいかないだろうに。

この場に居ない勇者を思い出したため息を吐けば、何故か梅香から鋭い視線を送られた。伝心を繋げたでもないのに、全く察しのいい幼馴染だ。

飽きつつある私と梅香を横目に、シリアルスな空気は続く。

「王女が錯乱状態に陥るはずがない。弟が、彼女に付きつきりなのは本当だろがな」

「・・・どういう、意味ですか？」

「簡単で単純な理由だ。我らを瀕死の状態に追い込んだのは、その錯乱状態の王女様だという話ただけだ。魔物に襲われ彼女の護衛についていた我らは、王女を護るために命を懸けた。腕が？がれても胸が裂かれても、我らは護る心積もりでいた」

「死に掛けながら戦う我らに、王女はおっしゃった。『私のために、死んでもくださいませ』と」

「我らは意味が判らなかつた。混乱し、胸を貫かれたハーグを見て、王女は美しい顔に花が綻ぶような笑みを浮かべられた。全ては彼女と弟が仕組んだ罠だつた」

『ありがちだな』

『ええ、ありがちね』

『あつちの世界のドラマでありそうな内容じゃないか。昼の時間に流れている感じのどりどろした』

『あなたが良く体験してそうな雰囲気の内容のあれ?』

『失礼な。僕は遊ぶ女は選ぶよ。三文芝居につき合わされるのは真つ平じめんだ。出会いは運命的に、別れはスマートにが僕のモットーだ』

『・・・刺されなさい、一度』

ハーグとアークの話よりも梅香の話が身近な私としては、この幼馴染を焼却処分するかを真剣に悩み始める。白檀様の直属の部下であ

るぐせに、そいら中から隠し子が出てきたらどうすればいいのだろうか。

彼がどれだけ女好きか、そして女の扱いに慣れているかを知つていいが、いくら子供が出来にくい体质の私達でも数を打てば当たる。もし隠し子を連れている女性が名乗り出たら、絶対に責任を取らせてやろうと密かに決意していると、僕がそんなへまをするかと最悪極まりない伝心が来てぶちきつた。

私達が心中でそんな下らない遣り取りをしているとは知らない人間達は、シリアルムードを継続している。

信じられないと首を振るアイルたちに、ハーケとアークは碧の田をしたまま続けた。

「王女は魔よけの守護を持つタリスマントを弟から受け取つていた。そして同時に我らには逆の効果のタリスマントを持たせていた」

「どうせ死ぬのだからと、彼女は我らに色々と教えてくださつた。曰く、我らがいると弟と結婚できない。曰く、我らがいると弟が当主になれない。曰く、我らがいると近衛隊を制圧出来ない。曰く、我らが生きていることは邪魔で仕方ない、と」

「あれほど嬉しそうに微笑まれた彼女は初めてだつた」

「我らが慈しみお育てした王女は、物心ついたときから我らが邪魔で仕方なかつたそうだ。　　殺す瞬間まで、絶望を与えようと望むほどに」

深い闇を感じさせる声音で告げた彼らは、いつも鮮やかに微笑んでを見せた。彼らの普段の笑顔は知らないが、それが酷く歪なものだと私でも判る。

怒り、悲しみ、絶望、悔しさ、憎悪、切望、哀切、その他もうもうを含んだ笑みは、凶悪なまでに美しい。

彼らはきっとその王女を大切にしていたのだろう。そこにあつたの

が愛慕や恋慕、思慕なのか、それともただ単に敬愛だったのか知らないが、慈しんでいたのには違いない。命を懸けるのに躊躇を覚えない程度に特別に想つていた相手は、しかし彼らを裏切つた。彼らと弟の関係がどうだったのか知らないし、知りたいとも思わないが、心中は複雑で当然だ。

絶対零度の眼差しと、今にも牙を剥かんばかりの殺氣に、アイルたちが晒されるのは仕方ないだろう。

踏み込んでいけない領域に、彼は土足で踏み込んだ。それは知らないで言い訳は利かない纖細な領域で、当然の権利とばかりに主張した彼の言葉がどれ程外れたものかを物語つていた。

アイル自身もきっと二人の発言に驚いているだろう。昨日ちらりと聞いた内容では、彼は王女に強い憧れを抱いていたようだったから。そこまで考え、気が付いた。付け入るための隙は、とても大きく口を開いて待つていたのではないか。

『梅香』

『何だい、伽羅』

『目の前のこの勇者一行を取り込むのは下策だと思つ?』

『さあ、どうだらうな。・・・彼らを取り入れて浮かぶデメリットはないが、メリットも思い浮かばない。ああ、でも勇者対策にはなるかもしけないな。いざと言うとき目の前の彼らが君の肩を持てば、勇者も簡単に白檀様に手を出せなくなる』

『・・・そうね。そんな状況作り出すはずがないけれど、一瞬の躊躇さえ得れば手は打てる。ならば、この者たち取り込みましょう』
『どうする気だ?』

『成体に戻るわ』

伝心で告げた内容に、梅香は少しも驚かなかつた。

私は白檀様の側近だ。誰よりも彼に忠誠を誓い、誰よりも彼を敬愛している。養女として可愛がつてもらつており、彼の様々な面を誰より知つていると自負している。誰よりも信頼していただいているし、誰よりも信用していただいている。

その信頼信用に応える為日夜修練は積んでいるが、世の中は努力だけではどうにもならない部分もある。私は文武魔に秀でていると名高い悪魔だが、それは器用貪^{ばら}でしかないと自分が一番判つていてる。武の面ではどうしたつて梅香に劣る。文と魔の面では墮天使の菊花に劣る。戦闘力は高いが、二人を超えるほどはなく、魔力は高いが菊花ほど癒しの力を持たない。

それでも私は白檀様の役に立つために、他の誰にも負けないものを一つだけ有している。

使い方次第では状況を引つくり返す、白檀様に教えられた自分の使い方。

魅了の力。

悪魔の癖に金色の瞳と碧の瞳を持つ私だが、物珍しさもあつて魅惑の力だけは他の悪魔より優れていた。美貌を誇るのは悪魔の常識。力が強い者ほど容姿が優れる世界にあつて、私は全てにおき異色を放つていた。

何しろ、私の魅了の力は、その気になれば王族を超える。恋心を忠誠心と置き換える悪魔の、王族のために育成された暗部の者さえ説し込めるほどに。

生まれ持つての力だと、これだけは白檀様も称賛してくださつた。そしてこの力があるからこそ、私は彼の側近でいれる。

成体であろうと小悪魔であろうと魅了の力は使える。存在するだけ

で魅了されると誉めそやす相手も少なくないが、それでも場に相応しい格好がある。

何か特別のことをするわけではない。ただ意識するだけでその力は強まり、姿は関係ない。しかしこの力を使うと意識するならば、と昔白檀様と約束した。

もっとも効果的に、鮮やかに全てを攫つて見せろ、と。

『俺の娘ならば、何もかも奪つて嗤つて見せろ。何より誰より美しい、泥中でさえも咲き誇れ』

薄汚れ死に掛けた私が回復し初めて敵を魅了した時に、白檀様は僕しもべとも奴隸とも呼べる存在を連れた私にそう言って笑った。

私の美学は彼の規律に反しない、ただそれだけ。鮮やかに全てを奪い、上から見下ろし嗤うだけ。魅了すると決めたなら、美しく鮮やかであれ。

微笑み方を変えた私に、梅香はひょいと片眉を上げた。物言いたげにしながらも、口を噤む代わりに力を使う。この部屋の入り口を魔力で閉じ、人は入れないよう工夫した彼は、何食わぬ顔で伝心を繋いだ。

『墮ハラとすのか?』

『ええ』

『そうか』

短い会話の後、一方的に繋がりは切れる。

視線は逸らされたままでちらりともこちらを見る気配はない。けれど梅香の意識がこちらに集中していて、尚且つ彼が不機嫌であるのは長い付き合いで判つた。

彼は表に出していいだけでこの世界の『人』が嫌いだ。その原因

の一端を担う身としてどうにしそうとは微塵も思わないが、上辺に騙され氣を許しつつある勇者一行 取り分け女性というだけで親切にされたシェリルを哀れと思わないでもない。

何しろ梅香がちやほやしたとしても、それは逆上せさせるための演技でしかなく、最終的に彼は自分へ向いた想いを踏み躡ると決まっているから。

ああ、でもそれなら今この瞬間に私に魅了されるのは幸せかもしない。

私の血を一滴とはいえ持っているくせに、持ち主の雰囲気の変化にすら気付かぬ愚鈍な男たちを見れば、相変わらず瞳の色を変えて目の前の、敵にすらならない存在を脅かしていた。

余程逆鱗に触れる内容だったのだろうが、空気を読んでいたきたい。

仕方なしに指先を弾き小さな風を起こす。

はつと瞳の色を本来のものに戻した一人が執事服で礼を取り、そうすることで彼らの視線の先にいた私に意識が集中した。

部屋の人間の視線が集中したところで、指を鳴らし幻の花を空から降らす。形も色も様々なそれらは、けれどきちんと芳しい香を一つ一つが放っていた。

幻なのに芸が細かいと梅香には言われるけれど、より本物に近づけるのが幻の骨頂。本物と認識させれば、幻でも生物は息絶える。贋物は時に本物を越える。

頭を下げたハークとアークとは違い、この幻想的な雰囲気を直に見た三人は啞然と口を開けた。幻想により高くなつた天上から、花は降つてくるように見えるのだろう。窓すらない場所から光が差し、私を中心に照らしていく。

正直作りすぎだと思うが、『人』にはこれくらいが判りやすくて丁度いい。視覚、聴覚、嗅覚を支配すれば容易に術に嵌るのが『人』だ。

一番奪いやすいのは視覚。だからこそ見た目は派手に美しく幻想的に。

視線が集まつたのを感じ、口角を上げる。

相手の好みを読み、より相手の理想に近づける。彼らと話をした上で、一番彼らを堕とし易いと感じた形へ。

僅かに小首を傾げ、髪を結んでいたリボンを風の力で解く。

ふわりと金髪が舞い顔を隠す。その動きにあわせて光を流し、自分の姿を覆い隠す。足元から布を解くように光を退けて行くのとあわせ体の作りを本来のものへと戻していく。

ふわふわだつた白いドレスから、体にフィットした形の黒のドレスへ。

いかにもお姫様が着そうなレースが幾重にも重なるチューリップ型のドレスではなく、アシンメトリーなデザインのそれは、右側に腰に届くすれすれまでのスリットが入つており、歩くたびに足が露出する。白檀様の髪とお揃いの黒と対比する白い肌。スリットネットラインの胸元に飾る薔薇のコサージュは毒々しさ一歩手前の赤色。それと同色のピンヒールを履けば、視界が随分と高い位置へと変わる。

右側でまとめてあげていた髪は優雅に流し、右に分けたて胸まで垂らした髪にリボンを編みこんだ。右手だけ肘まであるレースで蝶が描かれた手袋をすれば出来上がり。

口を開き、魂すら抜けるのではないかと思わせる間抜け面を晒す勇者一行に、精々鮮やかに微笑んで見せた。

呼吸をしているのか怪しい彼らの顔は徐々に紅潮し、今にも卒倒しそうだ。倒れられたら面倒だからやめて欲しいと考えながら、微笑みは継続する。

頭を垂れているはずのハーグとアークの耳すら紅いのが視界に入り、一部しか開放していないとはいえそれでも私の前で礼を崩さぬ態度に感心した。何しろ同族ですら下級の相手であれば、呆気なく理性を失うくらいだ。その自制心には人にしては中々のものだろう。目の前の勇者一行はすでに自意識すら保てているのか怪しいところなので、彼らの自立心の高さは相当だ。

たっぷり五分ほど経つても何も反応を示さない勇者一行に痺れを切らしたらしい梅香が、ぱちんと指を鳴らす。

同時に空気を伝い微弱な雷が彼らを貫き、止まっていた時がよつやく流れ始めた。

「・・・黒の、聖女様」

その名を広めたのも人間であれば、その名を呼ぶのもまた人間。忌々しくも面倒な呼び名を私に付けた男はもう世界に存在しないのに、鬱陶しくも時を跨いで一つ名は受け継がれた。

先ほどまでの警戒心丸出しの視線から、羨望と恋慕と思慕と敬慕、ありとあらゆる憧憬の視線を籠めた彼らに、嫣然と微笑んだ。

閑話【むかしむかしの魔法使い・前編】

この世界の時間枠での昔の昔の昔。そして私の住んでいた世界でも十分に昔と言える過去に、私の人生の汚点が作られた。それはほんの些細な気持ちが生み出したとんでもない面倒で、私はその後手痛い失敗を元に慎重になつた。

私の人生に汚点を刻んだ男の名は『アドニス・ファン・デル・サルル』。

今から数えて四代前の勇者の一行に魔法使いとして同行していた男であり、当時の世界にこの人ありと歌われる人最高の魔法使いだつた。

魔法使いだというのに随分と体格がよく、その顔立ちは勇者のそれより精悍できりりとしており、短く刈り揃えられたメイプルレッドの髪のところどころにアッシュグリーンのメッシュが入った色彩が派手な男だつた。

真面目を絵に描いたような男で、いつだつて私を見る眼は疑惑に塗れ、無口な性質だつたらしく偶に口を開いても一言一言で会話は途切れる。さらに言葉以上に明確に、眉間に刻まれた皺が私達に対する感情を教えていた。

曰く『鬱陶しい』『魔物』ときが『穢れた存在め』『俺に近づくな』などなどなど。

目は口ほどにものを言つと昔勇者に教えてもらつたが、確かにその通りだと、感慨深げに彼の言葉に感心してしまつた。ありえない不覚だ。

とにかく、アドニスの私に対する拒絶はとても判り易くあからさまで、一度当時の勇者が仲を取り持とうとして返り討ちにあつたくらいだつた。

そう、何の因果か知らないが、魔法使いの彼は格闘術にも優れていて、残念な勇者より腕が立つた。それでも彼が一人でこの場に来れなかつたのは、彼の腕がどれだけだとしても所詮は『人間』の枠に収まる程度であり、私達とは歴然の差があつたからだ。

力で遙か及ばない彼らの切り札は勇者のみ。世界中でただ一人魔王の白檀様に傷をつけることが出来る存在のみだ。どれほど魔力が強くとも、どれほど武術に優れてもそれは判断の基準にならない。

私は最初アドニスは勇者が嫌いで、だからこそあんな態度なのかと思つた。

しかしながら、彼は勇者の無一の親友だつたらしく、仲良くしてやつてくれと頼まれた。頼まれたからと言つて聞く理由は欠片も持ち合わせぬ私は普段通りに振る舞い、そして日が経つにつれ徐々に彼の瞳は鋭さを増していった。

アドニスは私が嫌いだつた。その事実は当時の私にとつて魅力的な内容であり、実験台を探していた私としては、彼は丁度いいモルモットに過ぎなかつた。

当時の私は自分の力を試したくて仕方がない年頃だつた。王族の暗部も傲慢な貴族も、誇り高い天使でさえ墮天知らしめた実力である私だつたが、片手に満たない数だがどうしても墮とせない存在もあつた。

自分より高位である白檀様や王族の方々ならまだ我慢も出来た。魅了が利かない相手に、『人間』が居たのが私のプライドを酷く刺激した。

いつの時代も私に向かつてヘラヘラと笑いかけてきた勇者。いつだつて油断していく隙を見つけるのは簡単なのに、いざ捉えようとしても彼は私の手の内に堕ちて来ない。だからずつと実験してみたかった。

私を愛さなくとも私に好意を持たない存在は数少ない。力を使わなくともそうで、野良の魔物や動物、果ては知性の高い『人間』や『悪魔』『天使』もそうだ。だから、彼は体のいい実験体だった。

「あなた、私が嫌いね？」

一応疑問符をつけているが、問いかけは疑問ではない。むしろ心の内では確定した真実であり、彼がそれを否定するはずがないと自信があった。

しかし目の前の男は目を細めただけで無言を貫いた。思つたより馬鹿ではないらしい。

人の身で魔王の城へ交渉に来ている現状をよく理解している。口にしてくれれば言質が取れてまた面白いのだろうが、別に構わない。

この地域一体はもう幾度も利用しているが、相変わらず日が差すことはない。今は昼の時間帯であるが、太陽が嫌いな白檀様の力により厚い雲で覆われ空は闇色に濁っていた。ところどころ雷雲があるのも白檀様の趣味で、時折暴風雨を起こすのが密かなマイブームらしい。

その嗜好は理解できないけれど、白檀様が宜しいなら私に文句はない。子供みたいな笑顔で作った雷を私に語る白檀様は可愛らしく、素敵だ。

ああ、話は反れてしまつたが、何が言いたかったかとこの部屋には明かりが乏しく光源が少ない。ただでさえ外は薄暗いのに更に遮光カーテンが引かれ、人は闇に慣れるまで時間が掛かるはずだ。そして私の自室に明かりはなく、人であれば闇の濃さに恐れを抱くだろう。

それなのに言葉を発する私から微塵も目を逸らさぬアドニスは、濃い闇に怯まずいつも通りに仏頂面だった。警戒するように魔力のアンテナを広げ、私を探っている。

振り扱うのは簡単だが好きにさせてやつていると、危険がないと理解したのか警戒しながらもアンテナを引っ込んだ。

普段ならそんな無礼な真似をされたらさつさと魔力を開放しているが、今日の私は知的探究心が前面に出されている。よつて少しの無礼は赦すことにした。

「明かりは必要?」

「・・・頼む」

アドニスはきっと失語症に違いない。言葉を二三言以上発音している姿を目にしないし、ついでに彼に付けている部下も見てないと言つ。顔立ちは整つていてが女に怖がられると勇者が言つていた理由の一端はそれだろう。それでいて女に慣れてないわけじゃないと教えてもらつてしているので、本当に都合がいい。

指を振り部屋の中を照らす光源を作ると宙に浮かべた。闇に慣れた彼は眩しげに目を細めたが、私は気にせず観察を続ける。

見れば見るほど容姿の優れた男だつた。

柔らかな光源に照らされた髪は、本来よりも薄い色に見え綺麗と言えないこともない。

明らかに苛立ちを含んだ視線を向けてくるアドニスに、私はにこりと微笑んだ。

本来の姿へと戻つたときの、彼の反応が楽しみだつた。

誰かを墮とすのに時間は関係ない。場合により臨機応変に使い分ける。ようは心の隙間さえ作ればいいのだ。

僅かに油断し出来た亀裂から心の奥深くへ入り込みその人の核を掴み取ればいい。

人の核は魂と呼ばれるそれだ。把握するには心の内に入り込み掌握すればいいだけで、握った手綱を放さなければそれで簡単に墮ちる。目の前の彼らの隙を呼んだのは、大げさなまでの壮麗な演出。いかにも人が好みそうな美しい光景に惑い油断した瞬間に、魂を把握すればいい。

そう、それだけでいいはずだった。

『菊花』

『何ですか?』

『弾いたわね?』

『ええ』

全てを掌握しようとしたものの、相手が人間だとどこかで油断していたのだろう。

後僅かで掌握しきるという瞬間、魂の底に触れようとした私の力は悉く跳ね飛ばされた。良く知った力によって。

薄い膜状の力は私の力が発動する瞬間までその気配すら感じさせなかつた。それなのに、今は全てを反射し近づけない。その力は、紛れもなく菊花のものだつた。

菊花は私の力が通用しないわけではないが、私の力を弾くことは出来る。予めトラップのように保険として仕掛けておいたのだろう。それが何時成されたのかは知らないが、私にすら感知させない力の強さは相変わらず憎たらしい。

伝心を繋げて問うた質問の返事は、欠片も迷いなく判り易いもの。端的な答えだけに心の内が読み辛く、苛立ちが高まる。

目の前の人間達はハーケとアークを除き床に倒れ伏していた。自我を保てない状態まで持つていつたのを無理やりに弾き返したのだ。それ相応のダメージはあるのだろう。

倒れ伏す勇者一行を前に晒うだけの梅香と、未だに頭を下げたままの残りの人間二人組み。

誰一人動こうとしない状態で、私は伝心を続ける。

『どうして邪魔をしたの？もう少しで把握しきれたのに』

『どうして？どうしてと、貴女が問うのですか？随分と貴女らしくない失策だ』

『どういう意味？』

『白檀様の御言葉を忘れたのですか？奴隸志望の輩は作るなど、』

『ええ、仰つていらしたわ。私が忘れると思ったの？』

『それなら』

『奴隸志望の輩を作るつもりはなかつたわ。完全な傀儡にする予定だつたもの』

『伽羅』

『全てを把握し忘れさせる予定だつたわ。私への想いを深層心理の奥に隠し、いざという時に白檀様の盾になつてもらう手筈だつたもの。いくら勇者といえども仲間を斬るには躊躇は生まれるでしょう』

『それは約束に反します』

『どうして？私は別に操る訳じゃないわ。彼らにお願いするだけよ』

『貴女のお願いにどれ程威力があるか、何もかも判つてらつしやるでしょう？』

私を諭そうとしているのか、淡々と訴える菊花に段々と気分が落ちてきた。

デメリットがないから使おうとしたが、菊花の説教が長々と続くなり、これは彼らを利用する上でデメリットに違いない。意識が戻らぬまま倒れている力なき人間に目をやれば、一分ほど経つてもそのままぴくりとも動かない。

魂の力に寄り衝撃は変わるはずだが、どうやら彼らはただ人よりも少し上程度らしい。体は鍛えても魂を鍛える人間は少ない。人としてなら上等の部類なのだろう。

それでも力不足は否めず、何故彼らが選ばれたのか首を傾げるが、その疑問は当分は解決しそうになかった。

取り合えず言えるのは、彼らを傀儡にするメリットは急速に魅力を失った。

どちらにせよ、いざという時は私や梅香、菊花も居る。保険を掛けようと思ったが、この場に居る彼らから判断するに、実力差は明らかだ。

唯一つ、悔いが残るとすれば、力を使い切れなかつた一点のみ。

白檀様がこの場に居られなくて良かつたと心から思うが、あの方が見ていなくとも、失敗は恥でしかない。

きりりと唇を噛み締めれば、態々菊花が伝心を使ってため息を聞かせた。

それに尚屈辱感を煽られ、実力不足を痛感する。もつと、力が欲しい。自分より上の菊花の術を上書きは出来なくとも、破壊できる術が欲しい。

その為にも力を強めるための修行をせねばと心に誓つている。

『おーい、伽羅

『何?』

『苛立つのは判るけどさ、この惨状は早く片付けた方がいい』

『・・・?』

『はあ、本当に君らしくないな。気付かないのか?君の勇者君が、

『ひにに向かっているのを』

『ひ

言いたいことは色々とあるが、あまりの不覚に恥辱を感じる。冷水を浴びせられたように頭が冷えた。

この地に存在する魔族であれば誰でも判るはずの勇者の気配を見落とすなど、本当に油断しそぎて居る。

『浮つくるのは判るが、いい加減に地に足をつける。ひに世界に居るたびに不安定になるのは君の悪い癖だ。騎りは油断を誘うものだ。度が過ぎるなり、僕が白檀様に報告する』

厳しく聞こえる言葉だが、全て反論出来ぬ事実であるが故益々唇を噛み締めた。

白檀様の為にならないと判断したひ、梅香は迷いなく私の失態を報告するだろう。

今回の失敗も、白檀様の側近であるなら油断しそぎであり、職務怠慢だと罵られても仕方ない。

例えそれが、梅香の狙いだったと今更気付いても、全てが遅すぎる。普段ならもつと早く気づき対応していたひに、浮ついてると指摘されても仕方ない。

『菊花は黙認するだろうが、生憎僕は甘くない。己の誇りにかけ、醜態を晒さないよつに気をつけるんだな』

『・・・わかったわ』

それでも一度は目を瞑ってくれるひに幼馴染に感謝をし、成体から小悪魔へと姿を戻した。

「さて、それで君はこの惨状をどうするつもりかな?」

席を立ちゆつたりとした体勢で腕を組んだ梅花が、顔に薄い笑みを湛えたまま問う。

『この惨状』とは、勇者一行が床に平伏して意識を閉ざしている状況をさしているのだろう。

この場で意識を保てた人間はハーケとアークの二人だけで、彼らは未だに頭を下げたままだ。使用者としてはある意味正しいのかもしれないが、彼らを使用者として雇つた記憶もないため感心する気はない。

面倒な状況を作り出した一員に含めたいが、そもそも彼らを配置したところからが自らの失態だと理解しているので、彼らを責めるのもお門違いだ。

一つため息を吐くと、小悪魔の姿で指を振るつた。

淡い光に包まれた彼らが瞬時に姿を消し、移動先に指定した場所の気配を探る。

「移動先は彼らの寝室?」

「ええ。今の出来事は忘れてもらうわ。朝食はまだ準備ができるしない。彼らは慣れない場所で寝坊してしまった。起こしに来たのは魔王の側近。彼らは自分たち以外の人間は目にしていないし、女性の悪魔は見ていない」

「全て、夢の中の出来事つて?それは根本的な解決になつてないな、伽羅。今は忘れていても切欠があればすぐに思い出す。菊花の力に弾かれたんだろう?」

「時間を稼げる程度に暗示は掛けたわ。出会いはやり直しをさせる。記憶を上書きさせれば信じたい方を信じるでしょう。彼らを

不用意に会わせたのは私の失態。ならばそれを拭うのは私の義務よ
「やれやれ。僕は白檀様のために、君が醜態を曝さないのを祈るよ。
とりあえず君は昼まで謹慎だ。頭を冷やしたまえ」

「・・・判つたわ」

瞼を閉じて意識を集中させれば、脳裏に廊下を歩いている菊花と勇者姿が現れた。

どうやら菊花が力で空間を歪めたりしく、果てのない回廊を延々と歩いている。

時折勇者が何事か尋ね、菊花がそつなく返答していた。

『菊花』

『話は纏まつたみたいですね。では、勇者はどうぞ向かわせますか?』

『・・・彼に選択を委ねて頂戴。菊花は私から伝心で彼らがまだここに来ていなきを伝えて。その上で勇者がこちらに向かうか、それとも彼らの寝室に向かうか選ばせて欲しい』

『判りました』

『・・・時間を稼いでくれてありがとうございます。手間を掛けたわ』

『いいえ、お気になさらず』

切れた伝心に肩の力を抜く。

こちらの様子を力を使って覗いていた菊花は説明せぬとも話を理解して、眼鏡のつるを指先で押し上げた。

一瞬だけ視線を絡めると、力を断ち切つて意識を戻す。

「私が頭を冷やす間、勇者たちの相手を願えるかしら。午前は一応

城の案内の予定だったのだけれど

「君のお願いなら喜んで。ただし貸し一つだ。次の休みは一日僕に付き合つてもらうよ」

「 ありがとう」

綺麗にワインクを決め伊達男を氣取つた幼馴染に頷いて礼を言つ。次はないと忠告しながら、彼は今回の失態を黙認してくれる。手厳しく感じる物言いは、それだけ彼が案じてくれているからだ。

梅花は勇者が嫌いだ。多分、私が抱く感情の何倍、何十倍も膨れ上がりつた嫌悪感を抱いている。

だからこそ梅花は私を勇者に近づけないために引っ掛けようとするし、あわよくばこちらの世界から排除しようとするだろう。

彼は白檀様の側近で同僚であるが、同時に心配性な幼馴染もある。 「ああ、伽羅。君の屋敷に戻るなら、その日障りな人間一人も連れて行つてくれ。この場にいても邪魔なだけだ」

私に向けていた親近感のある視線でなく、言葉通り邪魔な虫けらでも見るような眼差しをハーケとアークに向けた彼は、冷ややかな笑みを浮かべる。

私の血が混じつていっても、梅香の目に彼らは人間に映り、尚且つ嫌悪の対象であるのには変わらないらしい。

視線に籠められた力は僅かだが、元が人である彼らにはさぞかしきついだろう。

近づき手を握ると、視線が私へと戻つてくる。首を縦に振れば嫌そに眉を顰めた梅花は、ひょいと肩を竦めた。

「君は本当に甘いね、伽羅」

「貴方は相変わらず心配性ね、梅花」

「そうだよ。僕が心配性になるのは、君に對してだけだ」

私を抱こうと伸ばされた手をワンステップでかわすと、本当につれないなと益々笑みを深めた。

「私は頭を冷やしに行くわ。番は向こうにいるから直接彼らの下に付くよ。」と言ひ、「おわすよ。」告げておいて「はいはい」とお姫様の仰るとおりに「時間があれば貴方の好物の『クッキー』を作つておくわ」「楽しみにしてるよ」

言葉以上に嬉しそうに笑つた梅花は、くしゃりと私の頭を撫でた。菊花の分も作らなくては、と考えながら、自身の力をもう一度展開した。

瞼を閉じ、ついで開いた時には目的の場所に移動していた。

部屋の広さは教えられた単位で数えると一十畳ほど。屋根に取り付けられた天窓と、そして壁に嵌る四つの窓から降り注ぐのは、この地には似合わぬ太陽の光。

私の『拾い物』が太陽がないと生きられないと仕方ないと、白檀様がここだけ力を緩めているのだ。

ただしその分城との境はきつちりと結界が張られている。きつちりと区切られた一角は結界のおかげで外からは見えないようになつているが、太陽のおかげで庭の緑は青々としており花も数多く咲き乱れていてここだけ別空間となつていた。

伽羅が使うのは屋敷の二階にある一室だ。この部屋の内装はちぐはぐで、城にある華美で品のいい調度品はほとんどない。

部屋の半分はフローリング、そしてもう半分は畳といつ草を編んだ床で構成されている。調度品としておかれているのは、この場にそぐわない装飾を施された天蓋つきのベッドと大きい扉つきの本棚のみで、他にはちゃぶ台と呼ばれる小さな机が置かれているだけだった。

手入れはされているが豪華でない屋敷、それが伽羅の与えられ白檀様により手入れされた、通称『伽羅の拾い物屋敷』だ。

城の部屋に比べるべくもないのに白衣を着て畳の上で座り込む青年は、人影がある。

医者でも研究者でもないのに白衣を着て畳の上で座り込む青年は、伽羅に気づくと顔を上げた。

瞳すら見えない分厚い黒縁眼鏡と白檀様と比べても遜色ないほど黒い髪。クリーム色の肌は私たちの世界ではあまり見かけないもので、

びつこいしょと掛け声をつけて腰を上げた彼が、私に部屋の瓜さの単位と畳を教えた本人だった。

畳に座つて本を読んでいた所為か、僅かにふらつきながら近寄つてきた男 黒方くろえは私を見下ろし首を傾げる。

「・・・あれ？伽羅仕事は？」

「梅花に頭を冷やせと追い出されたの」

「ぬわんですつてええ！？あたしのお姉さまを追い出したですつてえ！？信じられない暴挙です！」

「・・・香」

アルトの声で大絶叫した彼女は、私を見つけると走り寄り抱きついた。ぎゅうぎゅうと抱きつくというよりしがみ付く力の強さの香は、小悪魔でいると私より背が高い。彼女の肩に頬を押し付けつつ一つ息を吐く。

この盲目の少女は私を慕つてくれるのは嬉しいが、たびたび暴走しがちなのが困つたところだ。苦笑して頭を撫でると、漸く少し落ち着いたらしく力が抜けた。

香からそつと離れると、再び黒方と目が合つ。否、眼鏡が分厚すぎて合つているか判らないが、多分合つた気がした。

「頭を冷やせつて、何したんだ？あいつがお前にそんなこと言つて珍しいな」

「お前？お前とは誰を指して口にしたものですか！お姉さま？まさか、お姉さまと言わないわよね、この下郎が」

「・・・香。話が進まないから黙りなさい。黒方は昔からこの話しが方なの。子供の頃からこいつなの。私が許しているのだから、貴女の許可はいらないわ」

「でも、お姉さまつ」

「香」

威圧を籠めて名を呼べば、びくりと体を震わせた香は黙つて頭を下げる。肌に刻まれた呪が赤い光を消し、元の黒い呪へと戻った。その様子を見届けてから、もう一度髪をくしゃりと撫でる。

「お茶の用意をお願い出来るかしら。貴女のお茶は美味しいし、考えを纏めるには最適だわ」

「つ、はい！お姉さま！誠心誠意心を籠めてお淹れます！」

ぱあと顔を輝かせて全開の笑顔を見せた香は、一礼するとドアから出て行つた。この屋敷は基本的に白檀様のルールが適用され、敷地内では極力力を使わないようにしている。

お湯を沸かしてお茶の用意をしてから彼女がこの場へ戻るには少し時間がかかるだろう。

勢いよく出て行つた少女を見送ると、黒方の視線がこちらに向いているのに気づいた。そして連れて来た存在を思い出した。

「伽羅。『それ』、朝連れてつたんじゃないのか？何で速攻でお持ち帰りしてるんだ？」

「それが、どうやら勇者一行が顔見知りだつたらしいわ。王族関係者だつたみたい。私が誘拐犯みたいに思われたから、仕方なしに記憶を有耶無耶にしてここに連れてきたの」

「誘拐犯？伽羅が？」

「ええ。落ちていたから拾つただけなのだけれど、誤解を解くのも面倒だわ」

「それでどうするんだ？」

「出会いをやり直しさせる予定よ。いきなり予備知識なしに会わせ

るより、本人たちの口からワソクシヨン入れた方がいいでしょう」

「そうだな。で、それまでの間『それ』をどうするんだ？俺としては第三の選択肢、今すぐ捨ててくるがお勧めだ」

「・・・捨てる？私が？」

「捨てるは比喩みたいなもんだ。大体『それ』の体の傷はもう癒してあるだろ？ならば開放するのがルールだ」

「・・・・・・」

黒方の言葉に、思い出した一人を振り返れば未だに頭を下げ続けていた。

本当に、彼らはいつまでそうしているのだろう。あの体勢はどう見ても楽なものじゃないだろう。固まつたように動かない。

「いつまでそういうつもり

「・・・お許しが、いただけるまで」

「許し？」

「は。伽羅様の『許可』がいただけるまではこの体勢を崩すつもりはありません」

ならびに今まで出来るか試してみようかとひらつと脳裏を過ぎり、同時に冷静な声がそんな無駄なことに時間を使うなと突っ込んだ。黒方が呆れと苛立ちを含んだ気配を纏い、私は肩を竦めると彼らの望む許しを与えた。

漸くこちらに向けられた顔はやはり瓜二つで、黒子を探しどちらがどちらかを判断する。

「黒方の言葉を聞いたわよね？勇者一行の面前に出した上で判断する、貴方たちがここから居なくなるのも確かに選択肢の一つと判断するわ。怪我が治つたならここに居る必要はないでしょう。そうすればあの人間たちに説明する手間が省けるし、全てはあやふやで終わるわね」

「・・・・・・」

「元々貴方たちは気紛れで拾つただけ。怪我が治つたなら自由にす

るといいわ。勇者一行には香を付け、当初の予定通り私が面倒を見ればいい。生きる代価として純粹な人としては存在できないけれど、それは予め告げておいたわ。貴方たちは好きになさい」

「・・・・・」

私を見つめる一対の瞳に告げれば、彼らは微かに瞳を揺らした。何の感慨もなくそれを眺めていると、背後から寄った黒方が私を抱き上げる。世界の中でもイレギュラーな彼はとても非力だが、それでも私を抱き上げる力は持っていた。

突然の行為に僅かに目を見開くと、ゆるりと口角を持ち上げた黒方は私の額を指先でつつく。親しげな行為は好まないが、彼に対する許していた。

「伽羅。無言は抵抗に等しい。『それ』の意見も聞いてみたりビうだ？」

「・・・面倒ね」

「全く。でも、話が進まないからわざと発言を許せ」

「　　言いたいことがあるなら、早く言いなさい」

渋々と促せば、揃つて一礼した一人は私を真っ直ぐに見つめた。黒に近い藍色の瞳は悪魔の好む色合いだ。だがその程度の色は悪魔にあつて珍しくなく、さして私の興味を引くものでもない。

一瞬互いの片割れと目配せしあつた彼らは、漸く唇を開いた。

一 | 田中【一〇】（前書き）

気が付けば二十話突破しておりました。
ここまで読んでくださった皆様に、深く感謝を申し上げます。
本当に、ありがとうございます！

目の前の二人は黒方より掌半分くらい背が高い。普通の人間と同じ生態しか持たない黒方よりは鍛えられた体はがつしりとしており、瞳には戦いに慣れた者特有の鋭さがあった。

現在は知り合いから拝借した執事服を着ているが、初めて見えた時の衣服は彼らの世界で騎士が纏うものだつたので、単なる『人』の黒方と比べるのは初めから間違つてゐるのかもしれない。

微かに強張る体から緊張感が伝わる。幾度か口を開いて閉じを繰り返した彼らは、私が苛立ちを覚えるぎりぎりのところで漸く声を発した。

「・・・伽羅様は我らが邪魔ですか」

「邪魔・・・?」

躊躇の末悲しみを堪えるような声を出したのは、黒子がない方なのでハーケだつた。言つてゐる意味が理解できず軽くかぶりを振る。面倒だと思うが、邪魔と思うはずがない。まずそもそもからして邪魔と考える理由がないのだから。

私にとつて彼らの存在は『意味を持たない』ものだ。捨てられ死に掛けていたから拾つた。ただそれだけで、それ以上の意味を持ちようがない。

邪魔だと思うなら道端の石を拾つ者はそう居ないだろう。私にとつて彼らは石に等しい。拾つたからには面倒を見たが、怪我が治れば必要がない。

「我らは伽羅様に拾つて頂き生き長らえました。貴女様は我らになんら見返りを求めることがなく瀕死の我らを世話してくださつた。己の力を分け与え、傷口の手当をして下さつた。何も求めぬまま何も

かもを失つた我らに衣食住を提供して下さつた

「それが？」

「貴女様は我らの命の恩人です。そして、同時に今の我らの全てです」

「・・・だから、何だと言つの？私にとつて貴方たちを拾つた意味は何もないわ。捨てられたから拾つただけ。生きたいと望んだから生かしただけ。行く場所がないと言うからこの場に置いただけ。ただそれだけの話でしよう？私の屋敷にはルールがあるの。一つ、ここに連れてくるのは捨てられた存在のみ。一つ、ここで世話をするのは怪我が癒えるまで。一つ、怪我が治つたのならその後は自由にさせる。貴方たちはもう怪我は癒えている。だからこの場に留まる理由はないでしょう」

交互に話す一人を見て、双子とは不思議なものだと考える。互いの言葉を補うように続けるさまは息が合つといつよりも、何を口にするか判つていいようだ。ハーケが発言し足りない部分はアーケが補う。

だが一人の言葉の内容は私にとつて価値がない。彼らが発言したとおり、私は彼らに見返りは求めていない。拾いたかったから拾つた。助けたかったから助けた。ただそれだけだ。

「私は貴方たちに何も求めていないわ。私の血を飲んだからには貴方たちはもう人として純粹に生きられない。生き長らえた対価としてマシな方と思いなさい。それ以上の何が貴方たちに必要？」

生きたいと望んだから生き延びる手伝いをした。

怪我をしていたから生きていけるように怪我を癒した。

私の血を内包しているから馴染まない内には治癒の力も使えず、その分時間はかかつたが体を動かせるまでになつた。

それで、十分ではないのか。

私の問いに唇を噛んだ双子は、吐息と紛つよつた囁きを漏らした。

「・・・たが」

「言葉ははつきりと口になさー」

「・・・ あなたた、・・・さまが」

「あなたた、さまが？」

呪文か何かだろうか。中途半端な言葉に力は感じないが、意味が判ららず眉間に皺を寄せる。

私を抱く黒方に力が籠り、双子から意識を逸らし見上げれば、面白くなさそうに唇を曲げていた。

血は繋がってないが、昔から弟のように可愛がってきた彼の仕草が、今よりもっと幼い頃と重なつて思わず手を伸ばす。昔よくそうしてやつたように白檀様のそれより僅かに固い髪質を梳いてやれば、黒方は撫つたそうに首を竦めた。愛玩動物が甘えるように、私の肩に額を摺り寄せて息を一つ漏らす。

目の前に立つ人間二人とのやり取りより、黒方との交流の方が私にとって遙かに意味と価値があつた。

体ばかり大きくなつたがまだまだ甘えたい盛りの弟分は、自分から話を聞けと言つたくせに独占しようとばかりに私を抱きしめる。ほんのささやかな力であるのに、彼の心が伝わる抱擁に心が和らいだ。しかしそんな柔らかな空間も、無粋な声により破られる。

「伽羅様！」

「伽羅様、こちらを！」覗ください！」

強い口調についと眉を上げ視線を向ける。

きつきりと整つた眉を吊り上げた双子は、そつくりの顔にそつくり

な表情を浮かべている。

苛立ち、悲しみ、悔しさ、羨望。表情からは様々な感情が伺えるが、どれが一番強いかは判断付かない。

そう言えば、彼らが自分から意思を持つて私に呼び掛けたのは初めてかもしない。だからといってどうという話でもないが。強い口調に意識を戻せば、瞳の色を碧くした彼らはじつと私を見詰めた。

「　　会話が出来ないなら、貴方たちに意見を求める気はないわ」

「伽羅様・・・」

「言いたいことがあるなら言いなさい。自分の意思を殺せと私は言つてないはずよ」

いい加減苛立ちながら彼らを眺めれば、息を呑んだ彼らは、今度こそ私に判る言葉を発した。

「我らを傍に置いて下さりませ」

「・・・何故? 何故私がこの世界の人間」ときを傍に置かなくてはならないの?」

「我らはもう人間ではありません。貴女様の血を分け与えられた我らは純粹な人でないと、仰つたのは貴女様です」

「だから何? 傍に置くために拾つたのではないわ」

「我らを拾つたのは貴女様です」

「意味はないと言つてるでしょ?」

「意味なら我らが持ちました。与えるだけで何も求めぬ貴女様に、全て捧げると誓つたのです」

「そんなこと、望んでないわ」

「我らが望みました」

「我らが願いました」

『この命存えたなら、貴女様のために生きよつと』

先ほどまでのやり取りが嘘のようになり、一人の口から言葉が流れ出る。否定しても否定しても次の瞬間には全て肯定され、面倒で仕方ない。言葉は交わされても会話が出来てない。何を口にしているか、彼らは理解しているのだろうか。

悪魔の私の傍に居たいと望むのならば、『家族』も『世界』も『人生』も捨てねばならないということを。そもそも私は望んでないと、言っているのに。何と強引で厚かましいのか。

「そんな脆弱な身で私の傍を望むと、いつの」「強くなりま。貴女様に恥を搔かせぬほど強くなります」「全てを捨てて何を得るの」「貴女様のお傍に存在する栄誉を得られます。何にも勝る幸せです」「私は」「やめる、伽羅。」これ以上は無意味だ

苛立ちに紛れて言葉を放とした私を留めたのは黒方だった。白衣を纏う腕で私の頭を柔らかに抱きしめると、宥めるように背中を撫ぜる。あやすリズムに心が落ち着き、どちらが年上か判らないとため息を落とした。

降ろして欲しいとジェスチャーで示すと、逆らうでもなく畳へ降ろす。私に触れはしないものの、それでもぴたりと寄り添う黒方を見上げた。

「諦める方が早い、伽羅。『彼ら』を拾つたのはお前だ。折角俺が『開放』こそルールだと言つたのに、『自由』にすればいいと言い直したのはお前だ。拾い物の自由を保障するならば、彼らを傍に置いてやれ」

「黒方。貴方はそれでいいの?」

「嫌に決まってる。伽羅は俺のなのに、害虫は田障りだ」「なら」

「でもこの程度の存在でも、矛になれなくとも盾にはなれる。お前の血を与えたなら、お前の役に立つはずだ」

言葉とは裏腹に、黒方は私よりよほど不機嫌に見えた。

それも仕方ないかもしない。私が白檀様に依存するように、彼も私に依存している。私たちと価値観が違う彼にとつて、田の前の双子を傍に置けと口にするのも業腹だつたろう。

それでも私のためになるだろうと、嫌々渋々と口にした弟分に、重いため息を吐き出した。

「梅花がお前を下がらせた理由が少しだけ理解できる。今のお前は普段のお前より隙がある。言葉尻一つとっても、俺ですら付け入れる」

「・・・・・」

「だからこそ、『彼ら』を傍に置く意味がある。俺はお前が大切だ。お前に危険が及ぶのは恐ろしいし、傷が付けば耐えられない。だから、頼む。俺のために、『彼ら』を傍においてくれ、姉さん」

「・・・はあ。貴方にまで指摘されるなんて、本当に氣を入れなあなければいけないわね」

「・・・」

「心配する必要はないわ。この世界で私に傷を負わせれる人間など、ほとんどいない」

「姉さん」

「でも、貴方が心配だというのなら、そりゃ、保険をかけるのも納得するわ」

伸びてきた手が私の掌を掴む。昔は小悪魔の姿の私とほとんど変わらぬ大きさだった掌は、いつの間にか包み込めるほど大きくなつて

いた。

それがとても不思議で、喜ばしい。嘗ての彼を覚えているから、成長した姿が嬉しかった。

可愛い弟分の言葉なら、私も聞いてやれる。彼が安心するのなら、自分に妥協できる程度に、私は黒方を大切にしていた。

私の決断を聞いたなら、この場に居ない幼馴染は笑顔で圧力をかけるだろう。

白檀様は仕方がないなと笑い、菊花はひつそりと眉を顰めるだけで終わる。

この場に居ない心配性の知り合い達も、きっと各自の反応を見せるに違いない。十人十色のそれは思い浮かべるだけで少し面倒だったが、許容するしかないだろう。

「・・・とりあえず、正式に自己紹介を求めるわ。あと発言に一々私の許可を求めるのは止めなさい。上下を見せる必要がない場所でまで畏まる必要はないわ」

「伽羅様、それは」

「それは我らをお傍に置いてくださると、解釈しても宜しいのですか・・・？」

「説明しなければ判らないの？空氣くらい読みなさい」

「・・・つ、必ず貴女様の盾となります」

「貴女様が誇れる存在となると誓います。ですから」

『どうか、我らを捨てないで下さい』

異口同音に希う彼らに、私は嗤つた。

捨てる気があるなら初めから拾つたりしないと、気づかない彼らが酷く滑稽で少しだけ哀れだつた。

焼きたてホクホクの『クッキー』を両手で持ちながら、私は機嫌よく廊下を歩く。

先ほど黒方と共に焼いたのだが、味見をさせた香は涙ながらに美味しいと言つてくれたので、きっと中々の出来だらう。

焼きたてのそれは、四つに別けた。

一つは菊花に。一つは梅香に。一つは黒方たちに。

そして残つた最後の一つは綺麗にラッピングして白檀様に。菊花と梅香の分は転送したので彼らの分が先に付いているが、歩いていつても昼食後のデザートには十分間に合つし何より白檀様のお顔が見たかった。

先ほど何だかんだで手に入れてしまった新たな部下一人の報告をしなくてはならなかつたし、一日に最低三回は白檀様の顔を見ないと調子が出ないのだ。

新しい部下を思い出すと、自然と眉間に皺がよる。

黒方の想いに応えるために双子を受け入れたが、それは果たして吉と出るか凶と出るのか。正直先が全く見えない。

『改めて名乗るけれど、私の名前は伽羅。こちらの黒髪の男が黒方で、可愛らしい女の子が香よ。貴方達の名は？ああ、家名は必要ないわ。もう意味がないから』

視線を向ければ同時に膝を付いた双子は、私の手を握ると甲を額に当てる。

『私はハーケと申します』

『私はアークと申します』

『誠心誠意一心なくお仕えいたします』

『どうぞ我らを、使い切つてください。我らは貴女様のもの。所有していただけることこそ幸せ』

恭しく告げると熱の籠つた瞳を向けてきた。色は彼ら本来のもので、上気した頬は単純に興奮故らしい。

覚めた眼差しで眺めていると、そのまま手の甲へ唇を落とそうとして戻ってきた香により強かに壁まで蹴り飛ばされた。毛を逆立てた子猫のように威嚇する香の頭を撫で、彼女の背中を避けて顔を出す。

『・・・使い切られたいなら強くなりなさい。今ままじゃ盾にしてもすぐに壊れるわ』

『・・・はつ』

『そうね、一度いいから香に師事するとわね。頼めるかしら、香?』

『勿論です!この脆弱な輩を叩き潰せば宜しいのですね?』

『違うわ。叩いていいけれど、伸ばして欲しいの。打たれ強くしてくれれば十分よ』

『どの程度でしょうか?』

『貴女が、私の傍に置いても恥ずかしくないと思える程度までよ』

香はそれはそれは嬉しそうに笑った。

見えない瞳は閉じたままだが、それでも表情から喜びが伝わってくる。

体に刻まれた呪が赤く点滅し、危険色に染まった。

『お前ら、死ぬより辛い目に合つた。今ならまだ逃げ出せるが、どうする?』

『心配御無用』

『一度は死んだ身。耐え抜いて見せましょ』

口の端を持ち上げて笑った双子に後悔は全く見られなかつた。彼らが香を見てどう感じたか知らないが、きっと想像以上に扱かるに違ひない。

何しろ彼女の師匠は戦闘において抜群のセンスを誇る男だ。そして彼の私に対する過保護な感情も香はそつくり受け継いでいる。合格ラインまで叩き上げられるのは、ちょっとやそとでは無理だろ。

黒方の唇が愉しげに持ち上がる。彼らの運命を見越した上での表情は、白檀様に少しだけ似ていて、ちょっとだけ可憐らしかつた。

先ほどまでの遣り取りを思い出していると、いつの間にか白檀様の部屋の前についた。

朝入った寝室ではなく、少し離れた場所に設置している執務室。応接間を隣接しているこの場所で白檀様は昼食を取られるので、きっと今の時間帯ならこの場所に居ると検討をつけたが当たりらしい。室内から仄かに漏れる力を間違えるなど有り得ず、軽快なノックを四回する。

「伽羅でござります。入室の許可を頂けますでしょうか」

『・・・・うむ。入つて來い』

「ありがとうございます」

見ていないだろ？が扉の前でスカートを持ち上げ一礼すると、背筋を伸ばしてドアノブを掴む。

ゆっくりと空けると、部屋の置くから漂う白檀様の気配が強まつた。

焼きたてのクッキーを抱えたまま笑顔で室内に入り、そしてそのまま固まつた。

「よく来たな養い子。お前も同席するといい」

磨きぬかれた机の上に、昼食を乗せたまま笑顔で促した白檀様は、椅子に座つたまま普段どおりに私を手招く。いつもならそれに一、二もなく飛びつくが、それが出来ない理由があつた。

ぎこちない仕草で白檀様から視線を逸らすと、一いちらを射抜くように眺める男に目を向ける。

蒼い目と蒼い髪。世界で唯一の色彩を持つ、ただ一人の存在。

「・・・勇、者」

掠れる声は、私が発したものだろうか。

器用に片方の眉を持ち上げて一つ瞬きをしたレイノルドは、当たり前の顔をして、白檀様と同席していた。

ぞわり、と体中を走る怖氣に似た何かに、全身に鳥肌が立つ。無防備でいた時に飛び込んできた姿に、暴発しそうになる力を必死に抑えた。

それでも押さえ切れない力が先ほど解いたままの髪を広げ、そんな醜態を咎めるように白檀様がこちらに視線を向けた。体の奥深く、臓腑ではなくもつと別の そう、言つなれば魂から拒絶を必死に制御しようと浅い呼吸を繰り返す。暴走しそうになっていた力が体の内に収束し、髪が背に流れのを感じてから閉じていた瞼を開け表情を取り繕つた。

警戒を怠らず、白檀様の名を呼ばずに居て良かつた。勇者に白檀様の名を呼ばれるなど、苛立ちを通り越し、世界の均衡も無視して殺してしまつだらうか。

「失礼いたしましたわ、勇者様。魔王様とお食事をされていらしたのですね」

「・・・ああ」

クッキーを片手に持ち替え、スカートの端を摘むと略式の礼をする。すっと瞳を細めた勇者 レイノルドは、表情がないだけで無骨に見える端整な顔をこちらに向けた。

まるで珍しい生物を観察するように注視した後、ゆっくりと唇を持ち上げる。

「あんた、笑えるんだな」

「え？」

「笑ってる方がいい。年相応で可愛いく見える」

しみじみとした言葉に、眉を跳ね上げる。

一体彼は何を言っているのだろうか。

昨日梅香との会話で出たが、私は彼らより遙かに長い時を生きている。

千年近くを生きてきた私からすれば、田の前の男は子供以下だ。

元々こちらの世界と私の住む世界では一年の換算が違う。

一年を365日とするこちらと違い、私の住んでいる世界は一年が1099日となる。

さらに時間の感覚も違い、こちらの世界の方が早く流れている。

私達がこちらの世界に来るのは大体百年に一度。単純に計算したらこちらの世界に現れるのは約三百年に一度の頻度になるが、時間の流れが違うためこちらの世界で私達が現れるのは約四百年に一度に変換される。

忘れた頃にやつてくるこの仕事で毎回勘違いされるが、私は私の世界で921歳なのだ。つまりこちらの日数のみで考えれば2500歳を超えている。

したがつて目の前の男に子供判定される言われもなく、年相応と嘯かれる理由もない。

しかしながら白檀様の前で怒声を上げるなどはしたない真似をすることも出来ず、仕方なしに貼り付けていた笑みを益々深めた。

「あり、勇者様。私は笑顔で応対していましたでしょ？？」

「そうか？」

「ええ」

反論は許さない、と目に力を籠めれば、納得していないと表情に出しながらもレイノルドは黙つた。

これが以前の勇者であれば、ここからさらに反応が発展していたので、今回の勇者はとても相手が楽だ。

食事中だというのに無作法にも短い髪をがしがしと搔き廻つたレイノルドは、不満そうに唇を尖らせて白檀様を見る。

子供っぽい仕草を愉快そうに眺めた白檀様は、寛容にもマナー違反を咎めることがなく笑い、私を手招いた。

「悪いな、レイノルド。俺の養い子は俺が好きで仕方がないんだ。あの笑顔は俺専用の特別製だから俺が居ないと披露されない。この子の世界は極度に狭い 許せよ」
「・・・何であなたが許しを請つんだ」「これが俺のものだからだ」

招き寄せた私を片手で抱き上げ膝の上に乗せた白檀様は、解いたままの私の髪を摘むと指先に絡まる。

金色の髪が私のよりも浅黒い肌を持つ白檀様の指に絡まり、するりと落ちていく。

髪を梳ぐのを好まれる白檀様が仰るには、私の髪質はむしろ過ぎて留めておくのが難しいらしい。

ちなみに髪の手入れは基本的に私ではなく、過保護なまでに私に構う執事がしていた。

本来白檀様が好まれるのであれば自分で手入れしたいのだが、まだ

子供の頃に髪を乾かそうとして燃やしてしまって以来、執事に涙ながらに訴えられ彼に一任していた。

現在彼は留守番をしているため香が代わりを務めているが、たまに白檀様自らがして下さる口もある。

髪に触れる手は優しくて、それが嬉しくて幸せだ。

伝わる体温に顔を綻ばせ見上げれば、くつくつと喉を震わせた白檀様は、髪が解けた指をそのまま頬へと滑らせた。

「借りてきた猫のように大人しいんだな」

「くくっ・・・猫、猫か。言い得て妙だな。これは俺が拾い俺が育てた、俺だけの猫だ。俺だけを敬い、俺だけを瞳に映し、俺だけを愛する」

「・・・・・」

「これは愛らしく美しい。俺の世界では他に類を見ぬ色彩を持つ異端であり、忌避されながらも欲される。誰の心も好きに奪え、これが望めば相手は悦び、求めなくとも全てを捧げる。だが、これは与えられるものに対し、酷く執着が酷薄だ。何故か判るか」

「・・・知るか」

「ははっ、嘘だな、レイノルド。お前は知っているはずだ。この世界に住む他の誰よりもな」

肩を震わせて笑う白檀様を睨むレイノルドの視線が鋭くなつた。

思わず力を溜めようとして上げかけた手を握られる。

見上げれば穏やかな眼差しで見下ろしている白檀様が居て、私はそのまま力を解いた。

指先で喉を撫でられ、心地よさに目を細める。

胸の奥が暖かくなり、白檀様だけが与えれる『愛しい』という感情で胸が詰まつた。

「伽羅は俺のものだ、レイノルド」

「・・・違つ」

「いいや、違わない。髪の毛一本、血の一滴すら含め、頭の天辺から爪先まで、何から何まで俺のものだよ」

まるで宣言するように囁きに似た声で告げると、私の頬に唇を落とされた。

柔らかな感触に頬を染めると、そのまま腕の中に抱き込まれ胸に顔が当たる。

心臓が鼓動を早め、幸せで死んでしまいそうだ。

私は、白檀様のもの。

他の誰に認められずとも、白檀様が認めて下さるのなら、私はそれだけで生きていける。

それが私の存在意義で、白檀様のためになら向けられる想いも利用する。

全てはエゴだと知っている。

でも、望まれてなくとも、私は捧げることしか出来ない。

ゴミ同然の私の命を拾つて下さった優しい主に、ただ幸せを感じて頂くために。

唇を噛み締め視線をレイノルドへと戻す。

彼の存在は私にとって恐怖以外の何物でもない。

彼により受けた傷は忘れないし、良い教訓になつた。

「なあ、レイノルド。聞こえるか」

「・・・何を」

「俺の養女は今も昔も何も変わらず、このままだ。俺だけを愛し、俺以外の何かを迷わず切り捨てる。俺の育てた俺の愛しい俺のためにだけ存在する、可愛く純粋な子供のままでいる」

言い聞かせるよつ、ゆつくりと言葉を発した白檀様を、レイノルドは陥を含んだ眼差しで睨み続けた。

表情を隠さず、感情を隠さず、苛立ちを露にした愚かな勇者。

この顔であからさまに機嫌を損ねたのを見たのは、何百年ぶりだろう。

世界でただ一人蒼い髪と蒼い瞳を持つ勇者。

魔王の対抗手段として生まれる世界の異端は、私と似た存在であり正反対に属する男。

彼は世界から望まれて、私は世界から嫌われた。

生まれながらに誰もに祝福された彼とは違い、同じ異端でも私には白檀様しか居なかつた。

それは私には幸福だつた。

白檀様の存在こそが全てで、彼だけを見ていればいいのだから。

「・・・違つ

「何がだ」

「伽羅は、あんたのために存在するんじゃない。伽羅には伽羅の意思があり、あんたは解放しなくてはならない」

「本人が望んでいないのに?」

「望みも持たせぬほど縛り付けておいて何を言つ。他を見ないよう眼を塞いでいるくせに何を嘯ぐ。都合よく育つよう耳を塞いだくせに何を願う。伽羅の世界を狭め、あんた以外を排除した。そしてそ

「後、どうする気だ？」

「随分と俺の養い子に肩入れするな。お前がこの娘の何を知る？どうしてそこまで断言できる？お前はこの娘を、何も知らないのに」

「そうだ。俺は伽羅を知らない。でも、俺は『知っている』」

挑戦的に口の端を持ち上げたレイノルドは、白檀様の瞳を真っ直ぐに射抜いた。

何故、いつもこうなのか。

私は白檀様の傍に在れて、彼の役に立てればそれだけで幸せだ。他の何も求めていない。ただ、白檀様が笑つてくれば、それだけでこの身も命も魂ですら捧げれる。

それなのに、その幸せを、目の前の男は崩そうと躍起になる。私はこのまま時が続けばそれでいい。それだけで、いいのに。

「お前が俺の養い子を知っている？」

「ああ」

「どういう意味だ？」

「そのままだ。俺の家は代々勇者が選出される家系だ。だが古くから続くのは血だけではない。俺たちには知識も継がれる」

「知識？」

「そう、知識だ。蒼い髪の子供が生まれて最初に教えられるのは古代語だ。剣術でも魔術でも、社交でも歴史でもなく、最初に覚えるのは文字だ。何故か判るか？」

「文字を覚えるならば、文字を読むため、もしくは書くために他ならぬだらう」

「そうだ。俺の家には代々勇者のみに拝読を許される書物が存在する。初代から脈々と受け継がれるそれは、歴代勇者の手記だ。彼ら

は魔王とはどんな人となりか、その力は何か、側近は何人か、その時交わされた会話は何か、一週間の出来事のみを細かく綴つたそれを後世へ残している

「それが知識か」

「ああ。勇者の力の一つに封印と解除がある。手記はそれぞれ勇者のみが解除でき、新たに作成した手記に俺もいづれ封を施す。そうして知識は受け継がれてきた」

レイノルドの言葉に私は目を丸くした。

本来ならそんな面倒必要がないはずなのに、彼は保険をかけていたのか。

どこまで細かく記されていたか知らないが、知識と呼ぶ程度に彼に情報は与えられたのだろう。

よくよく面倒しか生まない男だ、勇者という存在は。

白檀様の反応を伺えば、少しだけ驚いたようだがすぐに平静に戻つた。

面白そうに唇が弧を描き、片眉を上げてレイノルドを見る。

「その手記に、俺と俺の養い子が書かれていたか」

「ああ。だから俺は『伽羅』を知つていい」

断言したレイノルドに、初めは堪えていたようだが、ついに体を震わせて白檀様は笑い出した。

不機嫌そうに眉を顰めた勇者を無視して心行くまで笑い続ける。暫くして、息も絶え絶えになりながらそれでも何とか呼吸を整えると、私を片腕に乗せて立ち上がった。

「残念だな、レイノルド。手記に書かれた『知識』では、到底俺と養い子の関係は理解出来まいよ」

「何を」

「俺から『伽羅』を救えとでも書かれていたか？それとも『伽羅』に自我を持たせるとでも書かれていたか？」

「・・・・・」

「愚かだな、人間よ。お前はいつだって見えていない。勇者の役目を逸脱し、お前じて何を望んでいるのだ？」

「俺は・・・俺は、ただ」

「お前の考えはどうでもいい。だが、そうだな。俺の退屈しきぎはなる」

「・・・・・じついう意味だ」

警戒心に毛を逆立てる獣のよつて、低い声を出したレイノルドは椅子から立ち上がり身構えた。

盾になるために離れようとし、白檀様に遮られる。

大丈夫だと唇の動きだけで伝えた白檀様は、私をそのまま床に下ろした。

力を使い黒いリボンを作り上げると、私の髪をひとつもじおりに右上で纏め肩の前に垂らす。

「伽羅」

「はっ」

「俺の命令を覚えているか？」

笑いを含んだ声に、息を呑む。

そして素早く配下の礼を取ると、白檀様の前に跪いた。

「 勇者の、面倒をみる、と」

「 そうだ。勘違いしているようだが、お前は一行の面倒を見るのではなく、ただ一人の相手をしていればいい」

「 ・・・申し訳ございません」

「 今日一日の失態には目を瞑るつ。お前の役目は仕切りなおしで明日からでいい」

「 はっ」

顔を下げるまことに返せば、人差し指で顎を持ち上げられた。

逆らわず顔を上げれば、愉しそうな白檀様の顔があり、私もふつと微笑み返す。

満足気に頷き、一步下がった白檀様は、迎え入れるよう両腕を開いた。

「 今日は俺と共に下がるぞ。おいで、俺の可愛い養い子」

「 ・・・はい、魔王様」

誘われるままに腕の中に納まれば、優しい口付けが額に落とされた。柔らかな感触に心が浮き立ち幸せが膨れ上がる。

例え今の遣り取りの全てが、勇者に見せ付けるための茶番だったとしても、それでも私は幸福だった。

「さて、では下がる前に勇者殿に挨拶をしろ。俺の客人だ。粗相がないようにな」

「はい、魔王様」

頷き踵を基点にくるりと回る。

スカートの裾が広がり、花が閉じるようふわりと収まった。足を僅かに引いてスカートの裾を両手で持つ。中腰になり深々と頭を下げた。

本来の世界で王侯貴族のみに捧げる完璧な礼。

一番美しく見える姿勢は、完璧を愛する執事に仕込まれている。

「お食事中に邪魔をして申し訳ございませんでした、勇者様。明日からは私が専属で付かせていただきます。誠心誠意お仕え致しますので、どうぞよしなにお願い申し上げます」

「じてじてに飾つた言葉ではなく、判り易く碎いて言葉を伝えた。白檀様に向けるものとは違うが、先ほどより心を込めて微笑めば、瞳を丸くして私を凝視したレイノルドは酷く渋い顔で頷いた。本来なら許可なく顔を上げて発言するのは許されないが、本当の王侯貴族ではないので白檀様も指摘されなかつた。それにきっと、レイノルド自身もそこまで畏ると困るだろ。」

眉根を寄せたままのレイノルドをそのままに白檀様が私を抱きしめる。

大きな体に埋もれるよつとして凭れ掛かると、応えるよつて腕の力が強くなつた。

「俺の伽羅をお前に貸してやる。その間好きに接するがいい」

「う

「愉しませてくれ、勇者殿。ああ、そうだ。お前の仲間がお前を探している。今は梅香が屋敷を案内しているし、合流してやるとい。今日の相手はここまでで結構だ。夕飯は仲間と囲え」

言いたいことだけ言い切ると、ぱちり、と指先を鳴らす。

物言いたげに口を開いたレイノルドは、瞬きすらせず私達を見送った。

昼食をとり終えたばかりの白檀様は、私を連れて寝室へ転移するとベッドの上に腰掛けた。

朝の惨状は綺麗に片付けられており、胸が悪くなるような血の匂いも消えている。

視線と力で取りこぼしはないか確認し、しつかりと綺麗になつているのを確かめると私は体の力を抜いた。

白檀様は膝の上に私を抱き上げたままこりりとシーツの上に転がり、そのおかげでひやりとしたすべらかな感触が頬に伝わる。

朝同様光を遮断した部屋は真っ暗で、それでも闇に強い瞳は明確に彼の顔を映し出した。

「 そんな顔、なさらないで下さー 」

先ほどまで所有を宣言しふてぶてしい笑みを浮かべ傲岸不遜に仁王立ちしていた彼は、情けなく眉を下げ迷子の子供のように不安げな眼差しを向けていた。

遠慮のない力で抱き込まれ小悪魔でいる体は悲鳴を上げているのに、比例して心は浮き立つていく。

抱くというよりしがみ付くにと表現した方がしつくりくる抱擁に頬を緩めながら、普段から紐で一つに結ばれている髪を解いた。

背中の中頃まで伸びたそれは、さらりと音を立ててシーツの上に広がる。

指先を通して梳ると、ふつと息を吐いた彼は、私の肩に顔を埋めた。

「白檀様」

「　　お前は」

「はい」

「お前は、俺のものだ」

「はい」

「体なら誰に明け渡してもいい。たが心は、魂は俺のものだ」

「はい」

「他の誰かに奪われるのは許さない。お前の存在は、俺のものだ」

私に言い聞かせるようでいて、自分に言い聞かせていく言葉。

それが判るから逆らわずに肯定していく。

元々私の存在は白檀様が仰られたとおりに何から何まで彼のものだ。

反論などあろう筈ないし、何より所有を宣言されるのは嬉しい。

だが白檀様を追い詰めたいわけではないので、彼をここまで不安定に追い込んだ勇者に苛立ちが募る。

昔からそうだ。

白檀様のように戸位を持つ貴族は大抵の場合一つの世界を委ねられる。

天使も同じように義務を負つていてるのだが、彼らと交互で世界の平定を見守る立場にあるのに、何故か人間は魔族を嫌う傾向にあつた。この世界もそうだが、別の公爵が治める世界もそつらしく、教えてもらうと『人間』は大抵は魔族を忌避するらしい。

天使も悪魔もしていることは変わらないのに、交代で現れる天使には肅々とした歓迎を捧げると言うのだから腹が立つ。勇者はこの地を納める天使も肅清する力を持つ。

それなのに、どうして白檀様のみがここまで苦しめられなければいけないのか理解できない。

この世界は出来てからまだほとんど時が経っていない。

白檀様が1000歳の頃から治め始めたらしいが、人の中から勇者が立つたのは私が100歳を僅かに超えた頃だ。

それ故に私も白檀様に無理に願い出てこちらの世界で初の勇者と言葉を交わしたのだが、思えばその頃からどうにも意見が通じなかつた。

だからこそ、面倒は起こつてしまつた。

思い出すだけで腹立たしい過去を胸の奥に沈めながら、自分を抱く人に腕を回す。

ぴくり、と僅かに体を震わせた白檀様は、それでも抵抗せずに私に体を寄りかからせた。

「ご安心ください、白檀様。私が白檀様を裏切るはずありません」
「・・・伽羅」

「不安に思わないで下さい。私は貴方様のものです。欠片も疑わないで下さい。私は貴方様の魂に沿います。揺らがないで居て下さい。私は忠誠を誓つております。私が、ただ一人愛するお方」

前髪を上げ唇を落とす。

ちゅつとわざと軽く音を立てて繰り返せば、ささくれ立つた気配が段々と落ち着いてきた。

揺らぐ心を収める白檀様に、私はそつと微笑みかける。

苦痛に耐えるように顰められていた眉が皺を失くし、ぎこちないながらも笑みを返してくれた白檀様に、私の笑みは深まつた。

「「」のままお休みになりますか？」

「まだ、昼だ」

「あー。白檀様は何時間でも寝ることが出来ると口頭から豪語されているではありますんか。子守唄も謳つて差し上げますよ」

「・・・共に寝るのか？」

「はい。白檀様のご許可が頂ければ。私は安眠効果抜群の抱き枕ですよ？」

「冗談めかして告げると、くつくつと喉を震わせて笑った白檀様は、ほうつと息を吐き出すと体の力を抜いた。

広い背中を掌でぽんぽんと軽く叩けば、小さく欠伸をして首に頭を摺り寄せる。

きっと体は横たえていたものの、昨日の夜の襲撃から眠っていないのだろう。

その原因を思い僅かに眉を顰めるも、腕の中で安らぐ人に気付かる前にすぐに笑みにすり替えた。

誰かに腹を立てるより、今は腕の中の安寧こそが優先事項だ。

「洋服を着替えられないのですか？」

「・・・面倒だ」

「ですが、寝苦しいでしょ？ 鏡になってしまいます」

「気にしない。それに、お前が子供の頃は良くこうして眠つたものだ」

「・・・後で菊花にどうされても庇いませんよ？」

「構わない。それよりも、今は眠りたい」

言葉を交わしているのに、段々とゆつたりとした口調になりますはじめ

た。

伝わる鼓動も音を遅め、体が睡眠に移行しているのに気が付くと背に回していた手を頭へ移動する。また髪を撫で始めると一瞬だけ薄目を開いて笑つた彼は、すつと眠りに落ちていった。

健やかな寝息が聞こえると同時に、力を解放して結界を張り直す。白檀様が普段張っているものに自分の力を加えて、それを襲撃者への合図へ代える。

白檀様だけの力であれば襲い来る敵も、私がこの場に居れば少しは収まるだろう。

もしかするともつと悪いものが現れるかもしれないが、今の時期はきっとそれもないはずだ。

「・・・ああ、そう言えば『人間』を手に入れたのを報告するのを忘れていたわ」

報告しようと考えていた内容を思い出し、じとじと眉を寄せる。

暫し思案したが、どう考えても白檀様の眠りを妨げてまで行う報告ではなかつたので、また目が覚めてから改めてにじょうと決めた。

今はただ。

不安定に揺れるこの方を、安らかで健やかに眠りに誘うことだけを優先したかった。

「・・・～～」

小声で耳障りにならない程度に歌を歌う。

それは昔、白檀様が私に聞かせてくれた子守唄で、彼が眠る時に一番心を解く魔法の歌だった。

中々望んでいただけない故に久方ぶりの共寝に心を弾ませつつ、白檀様が目覚めるまで力を解放し続ける。

この優しい体温こそが、私が望む世界の全て。

閑話【ハーグ・アーク】（前書き）

残酷描写がありますのでR15です。
流血沙汰が苦手な方はご注意ください。

閑話【ハーグ・アーク】

消えかけた意識の中過ぎつたのは陽を具現化したような美しい金色。片方を潰された、残つた眼球一つでは焦点を定める事すら難しく、こんな時でも美しいと思えるそれが何かは判らなかつた。

体中が悲鳴を上げ、今も生命の証である血液が大量に放出され地面に吸い込まれていつてゐる。

剣を振るつていた右腕は一メートルほど先に飛んでいつたはずだが、それがまだそこに存在するのかも判らない。

先ほどまで何故こうなつたかを説明していた王女は、もつこの場に居ないのだろうか。

双子にぶつけられる惡意の塊は聞いているだけで吐き氣を催し、あれ程慈しみ可愛がつていた妹分は、いつか子のことなら結婚しても良いとした女性とは思えなかつた。

朝露に濡れた花が陽を浴びて綻ぶような、鮮やかで柔らかな笑顔が好きだつた。

鈴を転がしたような声で『お兄様』と呼ばれるのが好きだつた。砂漠の砂が水を吸うように知識を吸収する彼女に、物を教えるのが好きだつた。

年が十も離れた彼女が赤子の時に笑い掛けてくれた日以来、可憐な手が汚れぬように、全ての何もかもから守つてやろうと決めていた。恋はしていなかつたけれど、確かに愛していたのだ。

それは離れた場所に居る己の片割れも同じはずで、何もかも捧げて慈しんだ相手に何故ここまでされなければいけないのか、さっぱり理解できなかつた。

ぶつけられた憎悪は厚く重いものだつた。

嫌悪に溢れた眼差しは、今まで良くて堪えたと感心するほど強かつた。

吐き出される言葉一つ一つに悪意が滲み、人の心はこれほどまでに呆氣なく踏み躡られるものなのだと、麻痺した心で歪みきった心を感じ取つた。

可愛がつてゐる弟も、この王女と同じ気持ちだつたのだろうか。自分たちへのコンプレックスと憎悪に塗れ、それでも綺麗な笑顔を貼り付けていたのだろうか。

泣きたいのか怒りたいのか叫びたいのか逃げ出したいのかさっぱり判らなかつた。

ただ判る事は、自分たちが裏切られた現実だけ。

冷静になり考へる時間があれば彼らに対し同等の嫌悪を向けるだろう。

しかし生き延びる可能性は万に一つもなく、今も己の体にかぶりついている魔物が人体を租借する音が、体を通して振動で伝わつた。痛みはすでにはない。ただ失血ゆえの寒さと、信じたくない残酷な現実に、それでも狂えず正気を保つ精神が悲鳴を上げていた。

だから始めは綺麗な金色は錯覚だと思った。

死に掛けの自分が見た幻だと。

けれど幻は消える事無く存在し、風に流れて揺れていった。

「 貴方たち、捨てられたの？」

その『音』は、今まで生きてきた中で一番美しい音だつた。言葉を発していると認識できず、朦朧とした意識で瞬きを繰り返す。

するとその音はもつ一つ同じ発音を繰り返し、脳が意味を認識した。しかしどうにかして返事をしようとしても死に掛けた体で自由になる場所はなく、声を出せても声帯はひゅーひゅーと息を漏らすだけ。

それでも強制観念に似た何かが、それに返事をしなければいけないと心を急かした。

「生きたい？」

音は続ける。樂の音より美しいそれに聞き惚れながら、瞳を動かし音の発信源へと視線を向ける。

そこには金色にたゆたう何かがあり、それが『音』を発していると気が付いた。

「死にたくない？」

もう一度、同じ意味でりながら似ていて違う表現で問い合わせられる。

それに答える術はなく、それでも僅かに動く部位で意志の疎通を図つた。

瞬間、自分を捕らえていた『魔物』が消え去った。

それでも体は地面に叩きつけられる事無く地面から一定の距離を保有し、その感覚に身を委ねる。

抵抗しようにも力は残っておらず、今更逆らう気力もなかつた。

「死にたくないのね、貴方たち」

「・・・・・」

「一つの選択肢を取れば、もう一方の選択肢は消えるわ。それでも貴方たちは望んだ」

「あ・・・・」

「貴方たちを生かしてあげる。けれど覚えておきなさい。純粹な人としての貴方たちは、もう存在しなくなるわ」

静かな宣言の後、唇に何かが押し当てられる。

無理やりに喉奥まで突っ込まれたそれは、何かを擦り付けるとそのまま去つた。

何をされたか判らずに居ると、一拍置いて体中を激痛が走る。

「あああああアあああああ！」

母音のみで発される悲鳴は、自分の口から出たものだろうか。それとも同じように声を張り上げる片割れのものだろうか。死に掛けた瞬間よりも激しい痛み。

涙が溢れて止まらない、そして眼球が再生されているのに気がついた。

叫び声がそこいら中に響いて、初めて潰された喉が再生されているのに気がついた。

五月蠅過ぎる自分と片割れの悲鳴に、破裂された鼓膜が再生されているのに気がついた。

痛みを堪えるために地面を爪で引っかけて、？げた腕が繫がり千切れた指先が存在するのに気がついた。

今すぐに死を望みたいほどの激痛は容赦なく精神に爪を立てる。けれど狂気に走りたいと望む思いとは裏腹に、何かが強固に意識を繫ぎとめた。

「私の血を一滴与えたの。これで貴方たちはもう人ではない。立場的には私の眷属。けれど怪我が治れば好きな場所に消えればいいわ」

金色の何かが美しい音を響かせる。

音に反応し心臓が脈打ち、胸の奥から歓喜が競り上がった。

この方の傍に存在できる自分が、傍に許される己の身が嬉しくて仕方ないと、幸福が血流に紛れ全身に広がる。

何故そう思つのか判らない。何故そう感じるかも判らない。それでも傍にいることが、自分にとつて自然で当たり前だと塗り替えられた何かが叫ぶ。

零れる涙も溢れる唾液も止まらない鼻水も隠せない。

全身の穴という穴から体液を零す自分はさぞかし情けなくみつともないものだろう。

生まれてこの方そんな醜聞を晒した経験はなく、高すぎる矜持に、ほんの一日、否、彼女に裏切られる前ならば自ら死を選び取つたはずだらう。

しかしそんな姿を晒したとしても、田の前の方に拒否されるはずがないと心が訴える。

彼女が自分を嫌悪するはずないと、息をすると同じくらい自然に信じられた。

「私が貴方たちを拾つてあげる」

静かな宣言に瞬きすれば、漸く目の前の金色が形を整える。
陽を紡いだと思った美しい金色は、波打つ見事な髪の毛だった。

消えかける意識に最後まで刻まれたのは、この世に存在するのが信じられないほどの美を所有する生き物だった。

扉の外に生まれた気配に、私は閉じていた瞼を開けた。

瞼を開けても相変わらず広がる闇色に目を細め、自分を抱いて眠る人に視線を向ける。微かに唇を開いて寝息を立てる白檀様に微笑むと、力を使い体を入れ替える。

私の代わりに腕の中に出現したのは、本邸で留守番をしている男が手作りした『伽羅人形ver.等身大ぬいぐるみ』だ。

白い肌や金色の髪の精度は大したものだ。触り心地など自分のものとほとんど変わらないし、吸い付くような滑らかさがある。髪は何も手入れせずともきらきら輝く。瞳こそ私のものより僅かに青が強いが、それでも十分だろう。体温がないが、変わりに子守唄機能搭載だ。

デフォルメされたぬいぐるみを奪われた男の発狂ぶりが脳裏を過ぎるが、柔らかいそれをぎゅうぎゅうに抱きしめて寝返りを打つ白檀様の無防備な様子を目にするとどうでも良くなつた。

「・・・白檀様」

「ん・・・」

「勇者に動きがございました。私は命令を遂行するために先に失礼します。結界は継続し、見張りは菊花に引き継ぎます。何かありますらすぐに駆けつけますので、どうぞゆるりとお休みくださいま

せ

ん

返事をしているのか、それとも呻いているだけなのか。

不明瞭な声を漏らす白檀様の額に口付けを落とすと、そのまま身を起こす。

有事の際を考え臉を閉じていただけの私とは違い、本当に眠つてゐる白檀様は、浮き上がろうとする意識に抵抗するよう唸る。白檀様は私を外套に包むと眠つてしまつたが、二人でいたならともかく、一人寝だと風邪を引いてしまうかも知れない。

暫し思案して、力を編みこんで掛け布を作り体を包む。ふわふわとした毛をしたものを作つたのだが、気に入つたらしく眉間の皺が解けた。

子供のような無邪氣な様子に小さく笑い、菊花に伝心を繋げると後を頼むと告げておく。忠誠心の厚い彼ならば、白檀様に粗相はないだろう。

その後梅香に伝心を繋ぐと、勇者一行の面倒を引き続き頼むと告げる。元々そのつもりだったのか、彼の返事はあつさりとしたもので、けれど心の内までは読ませない。

何を考えているか判らない幼馴染の行動に違和感を覚えるが、どうせ私では止められない。どちらにせよ、白檀様に対して忠誠を誓つ彼なら、白檀様に危害を与えるような策は考えない。ならば、考えるだけ無駄だ。

扉に手をかけて風呂に入つてないのを思い出した。視線を下げれば少し皺が付いたドレスは着の身着のままだ。暫し思案すると、衣服だけ形を変える。

時計を見ればまだ早朝。闇に包まれた領域では判りにくいが、人間の国でもまだ朝日は昇つてないだろう。

扉を開けると、そこには一匹の獣が居た。

見た目は人間界の狼に近いが、全身を彩る毛は鮮やかな緋色。そして瞳は草原に生える若草色。立ち上がれば成体である私も軽く超える巨体でちょっと座り込んだ獣は、静かに瞬きを繰り返した。

ルー・ガルー。

彼はそう呼ばれる魔物で、私の眷属の一人だった。

「アース
「がう」

名を呼べば、ふさり、と尻尾を一度だけ振る。本来のルー・ガルーであれば、人型になり私達と言葉を交わせるが、私の眷属はその力を持たない。

しかしそれは別に気にならなかつた。言葉が使えずとも伝心があれば感情が伝わるし、何を知らせたいかは判る。

甘えるように足に擦り寄る獸の頭を撫でると、そのまま思考を読み取つた。

部屋の番人として置いておいた忠実な僕は、同時に勇者の監視も任せていた。

動いた気配を敏感に察し、結界を張つて外と内を遮断していた私は異変を知らせたアースを警めるよう手を差し出せば、喉を鳴らしながら手の甲を舐める。

ぞらりとする長い下が指をしゃぶり、牙を立てぬ柔らかさで噛み付く。指の股を舐め満足したのか、もう一度手の甲を舐めた。

べとべとになつた手を見て思案すると、そのまま彼の首筋を撫でることで解決する。

「追えるかしら
「・・・・・・

問い合わせれば、心地良さをうつて田を細めながらじへつと頷いた。

アースの背に乗り外を駆ける。うすらと残る痕跡を辿れば、どうやら勇者は森の中へと向かつたらしい。

白檀様の屋敷は、広大な森に覆われている。自然に手を入れていないので、碌な歩道もない。

ここ一十年は太陽も顔を出していないので、進化が狂い不気味な成長を遂げた植物が蔓延っている。

白檀様の力の影響で枯れることはないが、それ以上の手入れはされていらない。

人間達の間では、『迷いの森』とそのまま呼ばれているらしいが、別に幻影の魔力をかけているのではない。

単純に入り込んだ人間は、森に住む魔物に喰われているだけだが、それを知らせる存在が居ないだけだ。

どうせ臆病な人間が呪われていると噂のこの地に足を踏み入れることなどほとんどなく、それを知る私達も態々教えてやる義理はないので人間に伝えない。

方位磁石など方向を知るアイテムを持つていれば道には迷わないだろうが、白檀様の守護が掛かっていた馬車の中ならともかく、人の身でこの森をうろつくのは少しばかり危うかつた。

しかめつ面をしたまま移動する内に、目的地の見当は付いていた。始めは訓練のために早起きして出かけたのかと思つたが、どうやらそれは違つようだ。

「どうしてこんなに面倒ばかり起こすのかしら」

「・・・うるるウ」

「判つてこるわ。別に何かする気はないもの」

私を乗せるアースも、その方向に何があるか察したらしい。ため息混じりに漏らした私を宥めるように唸ると、さりにスピードを上げる。

流れる風を冷たく感じるほどにスピードは出ているが、遮蔽物は全て器用に避けていく。

しなやかな体を躍動させる獣の首に回した腕に力を籠めると、到着を知らせるようにアースは一声鳴いた。

先ほどまで見ていた陰鬱な気分になる植物の森を抜けると、空けた原っぱになつていてる。

屋敷からそれほど離れていないが、意識しないと着かない程度の場所にあるそこは、基本的に伽羅以外は足を踏み入れない土地だった。

そこに生えるのは木ではなく花だ。小さな花弁を幾つもあしらつた可憐な花。

花びらはアースの毛と酷似した緋色で、茎は瑞々しい緑。大きさは、大体伽羅の掌を僅かに超えるくらいの小さいものだ。だが緋色の絨毯を広げたように大地を埋め尽くし、この不毛な地に不似合いなほど美しい光景は中々圧巻だった。

「いらっしゃる見えでしたのですね、勇者様」

アースから降りると、赤一色の花畠の真ん中でぼつりと立っていたレイノルドへと近づいた。

呆れことに剣こそ携えていたものの、防具一つ纏わぬ彼は、薄い普段着のようだった。

その様子に眉根を寄せ、力を籠みこみ外套を作つてやる。藍色の外套の突然の出現に目を瞬いた勇者は、私と認めると淡い苦笑を浮かべた。

「やはり、来たか」

待つていたと言外に告げる男に、ひょいと眉を上げる。

昨日までぶっきらぼうな態度と、仏頂面しか見ていなかつた気がするが、今日のレイノルドは機嫌でもいいのか随分と表情が柔らかい。覚えている面影に一瞬だけ重なつたが、まさかと首を振る。沸いた疑念を押し殺すと、顔に笑みを貼り付けた。

「」ひらで何をされていたのです？」

「・・・それは、もういい

「何がでしよう？」

「嘘臭い笑顔と、とつてつけたような丁寧語だ。昨日も言つたろ？俺は、あんたたちを知つてるつて。手記に書かれたあんたは、『勇者』相手にそんな態度取つたことないだろ？」

笑いを噛み殺したように告げるレイノルドに、私は表情を消した。

一瞬、その『手記』とやらにどのように私が書かれているか聞いてみたくなつたが、後悔するのは面倒なのでやめておく。

どうせ苛立つたところで怒りをぶつける正当な相手もいないのだ。何を言つていいか理解できないとばかりに小首を傾げてみれば、くつくつと喉を震わせたレイノルドは私へと距離を詰めた。

隣に座つていたアースが私の正面へ立ちはだかるように移動すると

威嚇音を発する。

驚いたように目を丸めた勇者に溜飲を下げる、首を撫でて宥めた。アースが落ち着いたのを確認すると、改めて勇者は言葉を発した。

「歴代勇者の『手記』には、初代のものから含めて必ず登場する人物が三人居る。『魔王』、『梅香』、そして『伽羅』、あんただ。登場人物の性格や行動が『手記』には記されているんだが、中でも女性で唯一の側近であるあんたに関する項目は多い。物珍しさもあつたんだろうが、悪魔の中でも異端と言われるあんたに勇者は興味を持つっていた。だから、あんたに対して俺の情報量は他よりも多いんだ」

「・・・それで？」

「だから、俺の前で猫を被るな。昨日、あんたの笑顔を見るまでは騙されたけど、本物を見れば贋物は褪せる。それなら、作り物ではない方が俺はいい」

くしゃり、と年相応の青年の笑みを浮かべた勇者に、私は大きく息を吐き出す。

腐つても勇者は勇者らしい。

「私は魔王様に勇者様のお世話を仰せつかつております」

「その俺が良いと言つていい。気持ちが悪い態度は止せ」

「・・・私は本来人付き合いは得意としておりませぬ。不愉快に思われるかもしませんよ」

「今が不愉快だ。俺は本当のあんたと話がしたい。本物のあんたを見せろよ」

まるで口説き文句のようだ。

頸に手を置くと、じとじと眉を寄せる。

不快だと態度で表してやつたのに、してやつたりとばかりに勇者の笑みは深まつた。

「しかしながら、私は」

「いいから。俺が頼んだと言えば、周囲も納得するし、あんたの体面も傷つかない」

「私は別に自分の体面は気にしておりません。それに付随する

」

「魔王の体面が気になるつて？・・・本当に書かれたまんま魔王至上主義なんだな。だが、俺がいいと言つているんだ。俺が魔王にも話を通す。これ以上続けるなら、融通が利かないと魔王に文句をつけるぞ」

わざとらしく声を低くして腰に手を当てた勇者は、二三下の悪役のように腰に手を当てて意地の悪い笑みを見せた。

深く、深く息を吐き出す。

額に手を当てて首を振る私を、慰めるようにアースが舐めた。

「俺の名はレイノルド・フレドリック・ラッチ。レイノルドではなく、フレドリックと呼べ」

何故か命令形で胸を張る勇者に、もう一度深々とため息をつく。
遠回しな嫌味のつもりだが、全く気付かない勇者に、私は僅かに頭

痛を覚えた。

私のため息を敗北と受け止めたのか、レイノルド
リックは嬉しさを隠さないで目を細めていた。

否、フレド

「勇者はどこまで行つても勇者と言つわけね」

嫌味を籠めて鼻を鳴らしながら睨めば、負の感情を前面に出していくにも関わらず、それを向けられた勇者は笑みを深めた。

打つても響かない態度に、じとり、と眉根を寄せる。

取り繕うなどいうなら、それを糧に白檀様に文句を言つのなら、態度くらいは改めよう。

髪に手を入れてかき上げる。ふさりとした金色の髪が一瞬だけ視界を遮り、そのままの流れで髪は右上で纏めた。

早業に目を丸くする勇者 フレドリックを眺めると、うんざりと息を吐く。

「凄いな、それ。どうやつたんだ」

「力の応用よ。どうせ人間には出来ないわ。追求するだけ無駄」

「・・・初日の初めの会話より素つ氣無いな。そっちが素か?」

「そうね。 戻して欲しければ戻すわ」

「いいや。そっちの方があんたに似合つ。失礼で無遠慮で高慢つきだけどな」

「・・・」

どちらが無遠慮だと突つ込みたいが、言葉は喉奥で咬み殺す。

見た目と違い、この勇者は遠慮がない。もしかしたら想像するより若いのかもしれない。

ここ何代と続いた勇者がもう少し落ち着きがあつたので、どう対応

していいか迷う。

考え込んでいる私に接近しようとしたフレドリックが、アースに威嚇されきゅっと眉根を寄せた。

何故か知らないが、どうやら私に近寄りたいらしい。

「おー。こいつどうにかならないのか」

「この子は私の眷属だから、私に害意がある相手を近づけたくないのよ。 これでもマシな態度だわ」

「ふうん、随分と愛想がないんだな。見た目は格好いいのに」

「手は出さない方がいいわ。私が許可しない限り……」

「うをツ！？」

「喰いつかれるわよ」

「もつと早く忠告しろよ」

無造作に伸ばしていた腕を咬まれそうになり慌てて引っ込んだ彼は、柳眉を吊り上げて怒鳴ってきた。

あと少しで利き腕が取れるところだつたのに、と考えながら、ひよいと肩を竦める。

口に出したとおり、アースにしては随分と甘い態度だ。

この獣は私に過度の独占欲を抱いており、私以外の命令は聞かない。本当なら触れようとしだだけで、喉に喰らいついていてもおかしくないほどの凶暴性を持つている。

壁のよう立ちはだかる姿に、ひょいと眉を上げる。
そして背中を撫でると一言命令を下した。

「少し大人しくしてなさい。勇者様は私に御用があるらしいわ」

「フレドリック」

「それで、私に何がしたいの勇者様」

「フレドリック。 次は返事をしないぞ」

別に返事をしてもらえないとも一向に構わないが、話が進まないのを頷いておく。

満足そうに笑う姿はやはり子供っぽく、表情が崩れるだけでこれほど年齢に対する考察が変わるのかと一種感心してしまった。

私の言葉に従つたアースは、フレドリックが近寄つても今度は唸り声も上げないし牙も剥かない。

若草色の瞳で私を見詰めると、静かに頭を垂れた。

無言の請求に応えるべく、手を伸ばして首をさする。彼が座つても、小悪魔である私からしたら頭を撫でるより首の方が撫で易い。ぐるぐると喉を鳴らして目を細めたアースは、一応それで満足したらしい。

緋色の獣の喜びを渋面で眺めていたフレドリックは、今度こそ手が届く範囲まで私に近づくと何かを差し出した。

「・・・何

「花。 歴代勇者はこの花畠に足を運んだと書いてあった。可愛い花だからあんたに花冠を作つたんだ。子供の頃も碌に経験がないから不恰好だが、気持ちだけは籠つている」

言葉通りに、確かにそれは不恰好だった。

元々この緋色の花が冠を作るのに適していないものもあるだろうが、

それしてもぴょんぴょんとはみ出でいる花は、可愛らしいが何処か憐れだ。

そのまま咲いている方が明らかに美しいだろうに、無意味に人の手が入ったばかりに本来の美が損なわれてしまった。

あまりの不恰好さに呆れ、彼の行動の意味を察するのが遅れた。

不恰好に作られた花冠を見た瞬間にアースが息を詰めぶわりと毛を逆立たせる。

まずい、と思つた瞬間にはもう体は動いていた。

「・・・止めなさい、アース」

「ツ・・・るウ！？」

右肩から胸の辺りまで走る激痛。

がっちりと埋まつた牙は、どうやら背中まで突き抜けているらしい。傷の深さを判断すると、私の体に前足をかけて毛を逆立たせたままのアースの背を撫ぜる。

落ち着けと繰り返せば、徐々に呼吸を和らげた。

ゆつくりと牙を引き抜いたアースは、謝罪するように傷口を舐める。だが彼に癒しの力はなく、舐めるだけで傷口は塞がらない。

「大丈夫か！？」

「大丈夫よ。・・・その花を私に寄越しなさい」

「ツ、そんなこと言つてる場合か！先に手当てを」

「寄越しなさいと言つてはいるの。その花は、貴方が摘んでいいものじゃないわ」

繰り返し、傷がない方の手を持ち上げると花冠を奪つた。

勇者は フレドリックは、あまりに何も知らな過ぎる。

書面から読み取れるのは文章のみだ。そこに書かれた『想い』は、それだけで足りないのに。

見た目以上に中身が成長していないうらしい勇者に、一つため息を吐く。

彼は歴代の『勇者』に何か憧れでも抱いているのだろうか。書面をなぞり行動することで、自分にそれを浸透させようとしているように見える。

眉根を寄せ私より余程痛そうな顔をするフレドリックを一瞥すると、耳を伏せ尻尾を丸めたアースに視線をやる。

全身で後悔していると訴える獣をもう一度撫でると、花冠を無造作に解いた。

舞い上がる。

それら全てを風に溶かして、力に交えて纏つて見せた。

「ほら、見なさい。貴方程度に傷つけられる存在じゃないのよ」

この緋色の花は体温が近づくと香りが強くなる。

それをふんだんに織り交ぜて作り出した緋色のドレスは、本来なら私の趣味ではない。

私が好きなのはあくまで『闇色』。白檀様が身に纏う、美しい黒。だがこの場合は仕方ないだろう。

肩から流れる血と傷を消し、鉄錆び臭い臭いも消し去る。

萎れかけた花を私が使つたことによりアースは満足し、傷がなくなつたことで安堵するだろう。

「ツ、大丈夫なのか！？」

「当然よ。眷属の力などでどうこうなるようなら、側近は名乗れないわ。 それよりも、貴方はアースに謝りなさい」

「何？」

「アースが牙を剥いたのは、主として私が謝罪するわ。でも、貴方はアースへその浅慮な行動を謝罪なさい」

「・・・何故だ。俺は何も」

「籠められた想いを踏み躡るのが勇者の仕事なの？自我を通すのが勇者の使命なの？」

「！？」

「！」の場所の意味は『手記』に書かれていなかつたようね。それなら貴方は足を踏み入れるべきじゃなかつた

「・・・どうじう」とだ

「IJJはアースの聖域よ」

苦々しい顔でこちらを睨むフレデリックに淡々と告げる。

悪いのはアースではない。意味を知らずに踏み荒らしたフレデリックだ。

そして、その想いを理解しながら見過しした私にも罪はある。

「遙かな昔、この地で命を落とした愚かな男が一人居たわ。彼は自分の命を核として、この地に長き呪いを掛けた。陽の射さないこんな辺境で、鮮やかに花が咲いているのはおかしいと思わなかつたの？」

「だが『手記』には何も ッ」

「書く必要がない事柄よ。これは勇者の仕事に関連しないわ。けれど、意味を知らないなら、貴方は此処に来てはいけなかつた。・・・始めはたつた一輪だつた。死に絶えた骸を苗床に、緋色の花は数を増やした。ここはね、昔はこんな空けた場所じやなかつたのよ」

昔はもつと、森と同じ陰気な植物が広がる場所だつた。

この地で生き残る花など食虫植物や肉食植物だ。花や香を使い獲物をおびき寄せるようなものばかりが集まる中、ここだけが異色だ。年を追うごとに広がる花畠に、何も感じないわけじゃない。

伏せて忠誠を請うように動かないアースをもう一度撫でる。

私が安易な気持ちで居たから招いた結果だ。気にする必要は欠片もない。

だが気にせずに居られぬのだろう。それが眷属というものだ。

「筋道を辿つても、貴方は『勇者』と同じにはなりえない。上っ面だけの行動をする氣であるなら、私もそれに合わせるわ。それが嫌なら、まず知つたかぶりを止めなさい。レイノルドではなく、フレドリックと呼べと、私に告げた理由を考えなさい」

「俺は」

「『彼』を理解したいなら、最初にすべきは先入観を捨てる事よ」

フレドリックの存在は、私に違和感しか覚えさせない。

確かに勇者の証を持つていてその魂にも覚えがあるのに、フレドリックには何かが足りない。

欠缺たパーソンがあるのか、それともどこかに押し込めているのか。平時であれば揺らがないのに、切欠があるとすぐに不安定になる。今までの勇者では一度も見たことがない現象だ。

考え、ゆるく首を振る。

どちらにせよ、これ以上は私の管轄ではない。

勇者の中身を知る必要も、理解する必要もないのだから。

私はただ、白檀様に害が及ばぬように護るだけ。

「帰るわ」

「え？」

「貴方も朝食はまだでしょ？思つたより時間をとつてしまつたわ。私の力で移動する。アースはどうしたい？」

「ぐるるルゥ」

「判つた。じゃあ、何かあれば呼ぶわ。それまで好きになさい。勇者に牙を剥いた罰と、私の命に背いた罰は後ほど『えるわ』

残りたいと望んだアースに頷くと、フレドリックに視線をやる。するとまるで迷子のように頼りない眼差しでこちらを見ていた彼は、どうすればいいか判らないとばかりに被りを振った。

すっと眉を上げると目を細める。

何を逡巡しているか知らないが、私には関係ない。

慰めて欲しいのなら私じゃなく、お優しい仲間に頼めばいい。

じつと眺めていると、何を考えたのかフレドリックは私へと手を伸ばしてきた。
帰る意思が通じたのを察すると、その手が届く前に私は移転の力を使つた。

消える瞬間狼に似た悲痛な鳴き声が耳に響いた気がした。

「『眷属の力などで『ひり』うなるようなら、側近は名乗れないわ』でしたか？よく言えたものだと感心しますね」

勇者を仲間達の部屋まで運び、梅香に朝食の確認をしてから自室に戻るといきなり怒りをぶつけられた。

怒りを孕んだ声に視線を向ければ、部屋の扉に背を凭れ掛け眼鏡の奥からこちらを睨む銀色の瞳に射抜かれる。

普段からクール気取りの菊花らしからぬ感情の発露に、面倒だと眉を寄せれば、こちらの気持ちを見透かしたように器用に眉を持ち上げた彼は、すかずかと大股で距離を詰めてきた。

どうやら私の行動を監視していたらしく、状況は筒抜けらしい。

「入室の許可を与えた記憶はないわ」

「頂いた記憶もありません。ですが、今の貴女には私が必要だ。違いますか？本当に貴女の愚かさ具合には呆れてものも言えません」

「なら黙」

「黙れと言つたら許しません」

「別に許しは請うていないわ」

「白檀様に報告しますよ」

「・・・・・」

その一言で反論は喉奥で消える。

白檀様は私が怪我をしたと知つたらきっと顔を曇らせる。

黙り込んだ私に向けこれ見よがしにため息を吐くと、菊花はつぶさ

りとした表情で距離を詰めた。

そして表情とは裏腹の優しさで私を腕に抱くと、秀麗な顔を盛大に歪める。

「その忌々しいドレスを捨て、怪我を出しなさい。見た目しか誤魔化せない幻術でどこまで我慢する気だったか知りませんが、見栄を張るのもいい加減になさい。その体で残りの日数持つと思ったのですか？」

「いいえ。けれど私には菊花が居るわ。あなたが居れば、多少の無理も利く。違う？」

「確かに、私が居ればどんな傷でも跡形なく治して見せましょ。ですが体感した痛みや記憶は消せません。骨が露出するほどダメージを受け、平然としている神経が理解できませんね」

銀髪を揺らして首を振った菊花だが、彼本人も同じだけのダメージを受けても平然としているだろう。

しかしながら私達に痛覚がないわけではない。むしろ有事の際には微かな皮膚感覚がシグナルになるので鋭い方だろう。

今も激痛が体を苛んでいる。だがこの程度の傷なら死ぬほどでもないし、菊花が居れば十分に治る範囲だ。だからこそ重きを置かず無視している。

自分が受けた傷なら彼とて同じ反応をするだろうに、菊花は怒り心頭に発している。

面倒だ、と首を振れば、眉間の皺を深めた菊花は実力行使に打つて出た。

「……乱暴な殿方は嫌われるわよ」

「じゃじゃ馬はこれくらいの扱いが丁度いいんですよ

態々怪我をしている方の腕を思い切り引いた菊花は、痛みに顔を歪ませた私に向け晒つた。

傷口に爪を立てるなど天使の所業とは思えない。睨みつければ目を細め、そのまま私のドレスへと手を掛けた。作ったドレスは紐を首に括るタイプのシンプルなものだったので、肩も露出している。別に解く必要はないと思うのだが、別段抵抗せずに行行為を受け入れた。

解けて落ちていくドレスを胸元を隠すようにして手で止める。緋色のドレスの下から現れたのは白い肌。鎖骨が見えるほど肌蹴ているが、傷などどこにも見受けられずドレスを作る時に混ぜた花の香りで血の臭いもない。

それでも迷いなく傷に触れていた菊花は、僅かに力を使い私の幻術を解除した。

「・・・あの獣が。殺してやりたい」

「やめなさい。あれは私のものよ」

「ですが貴女に牙を剥いた。この美しい柔肌に傷を作るなど赦し難い蛮行です」

「傷口に爪を立てるのは蛮行じゃないの?」

「これは可愛い嫉妬です。他の男の付けた痕など許し難いものじよづ

「貴方本当に天使?」

「残念ですね。遙か昔にその種族から堕ちてます。今はただの恋する愚かな男ですよ」

飄々と涼しい顔をして告げた菊花は、私の傷から手を放すと検分するように覗き込む。

改めて私も見たが、思つていたよりはマシな傷口だった。

牙が埋もれたために白い骨が露出していたが、肩の肉が抉れた訳でもないので大穴が幾つか空いている状態だ。止血だけは済ましていたが、血だけ拭つてあるので肌に開いた穴は殊更強調されるようだつた。

「・・・やはりあの獣殺しませんか？」

「殺さないわ。そんなにこの傷口が目障りなら、さつさと痕跡なく消して」

「言われなくともさつさせて頂きます」

目を細めて傷口を眺めていた菊花は、そつと顔を寄せると薄い唇を持ち上げた。

赤い舌が爬虫類のように蠢くと、そのまま傷口へ伸ばされる。

別に口を媒体にして力を使うわけでもなからつに。近づく舌に抵抗せず身動き一つしないで居ると、肩に口付けるために屈んだ菊花は、上目遣いに私を見上げた。

銀色の瞳が僅かに潤み、肌が熱くなっている。白い肌が赤く染まり、私を抱きしめる腕が微かに震えた。

「・・・・・・ツ」

ぴちょり、と生々しい音が静かな部屋に響く。

犬が水を舐めるよう私の肌に付いた血を舐め取る菊花は、恍惚とし

た表情で舌を動かした。

舌を尖らせ傷口の内部までしゃぶるよつこじて舐める彼は、何が嬉しいのか満足気に顔を綻ばせている。

確かに、吸血嗜好はなかつたはずだが、新たな嗜好に目覚めてしまったのだろうか。それならば出来れば私とは縁遠い部分で開花してもらいたかったものだ。

菊花の嗜好はどうあれ、舐められた部分から着実に傷は消えていく。天使族特有の癒しの力だが、何度も目にして感心する。悪魔には癒しの力を持つものはほとんど居ないので、彼の能力は重宝した。

「いつまで舐めているつもり」

「もう少し・・・駄目ですか？」

「駄目よ。食事ならしたばかりでしょう。離れなさい」

「・・・」

いつの間にか傷口から首へと移動していた頭をがしりと片手で掴むと、菊花は不満げに柳眉を顰めてこちらを見詰めた。

無言で睨むとため息を吐き、傷のあつた部分に音を立てて口付ける。吸い付かれて赤い花が咲き、それを満足気に眺め漸く顔を放した。

「回復を早める呪を掛けました。消さないで下さいね。傷は消しましたが失った血は戻りませんから」

ついた痕を指先で撫でて消し去ろうとした、それより先に釘を刺

された。

今着ている緋色のドレスの形ではこの場所は見えるか見えないかギリギリのラインだ。別に見えて構わないが、それに付随する面倒が嫌だ。

「あと一応血は洗い流しておきなさい。人間にその血は酷です」

私を抱く腕に力が籠められた。

菊花が全て舐め取つてしまつたように見えるが、念には念を入れて血を流す方がいいかもしれない。

頷くと、私をベッドの上に下ろし、痛みを堪えるように顔を歪めた。

「貴方ほど悪魔らしくない悪魔、見たことありませんよ。その身に牙を受け入れなくとも、貴女であれば獸を切り裂く程度朝飯前でしょうに」

「そうね」

「なら次は自衛してください」

「そうね」

「厄介なものです。見た目だけではなく、中身まで異端とは」

「そうね」

「・・・・・白檀様が目を覚ましそうですね」

「早く行きなさい。白檀様の寝室へ入る際は必ずノック四回の後、返事を頂いてからよ。今日は眠りが深いようだつたから、まだ寝たいと仰つたら聞き遂げなさい。あと朝食にはパンとサラダの他にフルーツのジュースと、黒方手作りの野菜マフィンもお出しして。私の力で結界が張つてあるから、貴方以外は入れないわ。使用人を使う際には気をつけなさい。お風呂は少し温めで張つておいて頂戴。

ああ、白檀様のお傍にあるぬいぐるみには触れないよつてね。私と白檀様以外が触れば呪われるわ

「・・・・・はい」

もの言いたげに唇を震わせ、結局一言だけ返した菊花は、一礼すると部屋から気配を消した。

恨めしそうに銀色の瞳を向けていたが、慣れているので無視するに限る。

瞳孔は開いてなかつたので放つても大丈夫だろ。

『伽羅。勇者君たちの食事はもう始まつてゐる。風呂に入るなり手早く済ますんだね』

脳裏に響いた幼馴染の声に、うんざつと息を吐き出す。

どうやら彼にも情報は筒抜けらしく、私のプライバシーの確保は難易度が高いらしい。

ゆるく首を振ると、リボンを解いて風呂場に向かつ。とりあえず、覗きを防止するために、風呂場に結界でも張ることにした。

梅香視点での話です。

残酷表現が強いのでお気をつけ下さい。

常と変わらぬ笑顔で勇者達の相手をしながら庭園を案内していた梅香は、すこぶる不機嫌だった。

何故不機嫌かといえば、はつきり言って『人間』が嫌いだからだ。本来なら好悪の感情を抱かぬはずの種族に好悪の基準を与えた存在は、何食わぬ顔で梅香の横に並んでいる。

それがまた気に入らず、同時に酷く愉快だった。

ちらり、と隣に並ぶ勇者を観察すれば、今までの歴代の勇者達の面影を色濃く残している。

だが観察する限り今代の勇者は決定的に欠けている部分がある。欠けたものを理解できずに、どう探せばいいか判つていい。その無様な様子が酷く愉快で、唯一梅香の心を慰めた。

昨日一日伽羅に代わって相手を務めたおかげで、勇者一行の人間関係は大体つかめた。

勇者の隣で嬉しそうに微笑む少女はほんのりと頬を淡く染め、その様を面白くなさそうに見詰める自称タラシの格闘家と、さらにその様子を眺める傍観者の魔法使い。

判り易い一方通行の図解だ。

勇者は少女に対しては庇護するような立場にあるが、そこに恋愛感情は混じっていないように見える。

付け入る隙は溢れていて、梅香はくつりと喉を震わした。

「・・・どうかしたのか？」

「いいや? 気にしないでくれ」

伽羅に對して打ち解けたように見えた勇者は、梅香に對しては相変わらずぶっきらぼうだ。

朝とは違ひしかめつ面のままの青年は、警戒心を解く氣はないらしい。もっとも友達になりたいわけでもないので、それもまた結構なのが。

蒼い目と蒼い髪。

世界でただ一人の異端であり、排斥されるべき魔王を打ち倒す力を持つ存在。

『人間』は愚かだ。

善のみで世界の均衡は成り立たないのに、悪を排斥したいと願う。梅香にしてみれば自分たちの種族は別に悪でもなんでもないし、天使の方が博愛と称して空恐ろしい行動をしていると思う。だが天使が執行するというだけで彼らの行為は天の裁きと成り代わり、自分たちが動けば悪の侵略へと挿げ替えられる。価値観の違いと一言で纏められる話だが、その価値観の違いを彼らがどこまで理解できるかは興味があった。

「ああ、先客がいたようだ
「え？」

予め伝心で頼まっていたことなど微塵も見せず、飄々とした顔で勇者達の視線を誘導するために手を向ける。

すると目的どおりに動いた彼らの視線は、ある一点で止まった。

そこには闇を溶かしたような漆黒のドレスを纏う伽羅がいて、その隣には紺色の毛並みの巨大な獣が一匹座っていた。

獣の存在を知っている勇者はもとより、強大な魔物の存在に一行の面々も息を呑む。

小さく華奢な伽羅が並ぶからこそ余計に存在が強調され、獣の異質さがよく目立つ。

恐怖に固まる『人間』の何と脆弱なことだろう。

自身の弱さを理解せず、この獣の何百倍も力を持つ梅香には対等とばかりな態度を取るくせに、判り易い異質には身動き取れない。

ならば今から見せる行為で彼らはどう動くのだろうか。

「おはようございます、皆様方」

ドレスの端を指先で持ち上げ、人形のように精巧な動きで礼を取る。見た目も相俟つて儂げな美しさを出す伽羅は、それでも儂さとは無縁の存在だ。

唇が弧を描き、笑顔と取れる表情を作れば、『人間』たちはそれだけで緊張を解いた。

だが折角解けた緊張も、次の伽羅の行動で打ち消された。

礼を解いた彼女は、自らの指先を振るとその手に剣を出現させた。梅香にはよく見覚えのあるそれは、伽羅が戦いの際好んで使つている切れ味を優先させた武器だ。

業ではなく技を必要とする剣の抜き身の刃は銀色に鈍く光り、冴え冴えとした美しさがある。

武では梅香に劣る伽羅だが、実戦経験は豊富だし決して弱いわけではない。

むしろ梅香ですら梃子摺る強さを持ち、内包する力を使えばどちらが勝つか判らないほど戦闘力を有していた。

「・・・どうしたんだ、伽羅」

「先ほど私の会話を覚えてますか？」

「先ほど？お前、キヤラちゃんと何かしたのか？」

「聞いてないよ、レイノルド」

「・・・どうこうこと？」

口唇を開いた伽羅は、外野を完璧に無視すると勇者のみを視界に入れて問いかける。

訝しげな表情をした勇者は、仲間の言葉に没面しつつそれでも伽羅に首を振った。

嘆息すると剣を構えて獣に向き直った伽羅は、一瞬だけ梅香に視線を送る。

それに頷くと、もう視線は真っ直ぐに前を向いた。

無意識の内に梅香の唇が弧を描く。

今から起きた出来事がとても楽しみで、その結果が楽しみだつた。

「よく見ているんだな、勇者君。伽羅の今からの行動は君のためのものなのだから」

「何を・・・？」

「あの子はね、本当に馬鹿で愚かなんだ。僕と同じ悪魔の癖に、悪魔らしさがほとんどない。唯一といつていいのは魔王様への執着と忠誠くらいで、自分には欠片も頼着しない」

「貴様・・・伽羅の仲間じゃないのか？良くなじままであじやまに言えるな」

「僕は伽羅の仲間だよ。だからここに居るんじゃないか
「意味が判らないな。貴様は伽羅が嫌いなのか？」

苛立ちを籠めた眼差しで睨んで来た勇者に、につこりと微笑む。
やはり『人間』とは会話は成り立ちそうにない。

だがとても安心した。

勇者は、どこまで行つても勇者でしかない。

梅香の嫌悪を煽り、人間への情を薄めてくれる存在だ。

「キャラちゃん！…？」

少女の悲鳴に近い声が上がった。
見れば伽羅が剣を構えるところで、獸は抵抗もなく従順に首を下げた。

「この地において勇者の存在は絶対不可侵領域よ。それを理解し、
尚且つ牙を剥いた獸。眷属と言えども赦せる所業ではないわ」

「何をする気なの！？やめてキャラちゃん！」

「勇者様に牙を剥いた罰と、私の命に背いた罰を」

見せ掛けだけではなく殺傷能力も十分に宿した剣は、躊躇なく獸を貫いた。

獸は右足に突き立てられた剣に堪えきれずに悲鳴を上げる。
軟弱な存在に嘲笑が浮かび、少女の悲痛な叫びが響いた。

崩れ落ちる獸に対しさらに伽羅は剣を振り上げ、そのまま腹を突き

刺した。

一撃目も全く躊躇の欠片もない。

清々しいまでの早業に、落ちてた機嫌が上向きになる。

伽羅の技術は鬼神と呼ばれた男直伝だ。

迷いも躊躇いも欠片もない剣は、獸を瀕死に追いやった。

最早獸は叫ぶ力すら失くし、その体を横たえて痙攣し血を吐いている。

伽羅の一撃は内臓を傷つけたらしい。

そのまま置けば血が喉に詰まり窒息死か、それとも出血多量で失血死か。

どちらにせよ生き延びる可能性の方が低いに違いない。

瞳を潤ませ伽羅を見上げる獸は、ウルるるうと弱々しい声を上げる。その姿を一瞥すると、興味を失つたとばかりにあつたりと獸に背を向けた。

「勇者様」

「・・・・・」

「先ほどの無礼、どうぞこの程度でお許し頂けないでしょうか？」

「ツ・・・・あんた、おかしいだろ！さつきはこの獸に謝れって言つたくせに、どうしてこいつを殺そうとするんだよ！？」

「勇者様に牙を剥いたからにござります。それは決して魔王様の本意にございません。お許しいただけないのであれば、獸は処分いたしましょ。勿論、あれの主である私もそれなりの責め苦を負います」

「何でだよ！－！あんた、さつきあれだけあの獸を庇つたらう！－？俺を傷つけようとした獸を殺すんじゃなく、自分の体を盾にして守つたんだるう！－？どうしてそんなに簡単に殺すなんて言えるんだよ！－？」

！」

「貴方様に無礼を働いたからです。勇者に向けて牙を剥いた瞬間から、この獣の末路は決まっています」

「・・・」

顔を歪ませた勇者は、信じられないほどばかりに後ずさつた。

信じていた何かを裏切られたとでも言いたげな表情に梅香の笑みは深くなる。

混乱した様子の勇者へ歩を進めると、ゆっくりと唇を開いた。

「どうする？ 勇者君。君が望むなら立会人を頼まれた僕が伽羅も処分しよう。そうしてこの城から追放し、君の目の届かない場所へ置こう。彼女の眷属が君に対してとつた非礼は、主である彼女の責だ。我らの総意ではないとはいえ、君に対して獣が牙を剥いたのは事実。君の選択に委ねよう」

「・・・あんたは、伽羅は、それでいいのか？」

「勿論。そのために立会人として梅香を呼びました。これは魔王様の意思ではありません。それを証明するためなら、処分も喜んで受けましょう」

跪き頭を垂れた伽羅に向かい距離を縮める。

自分の手に慣れた武器である大刀を手にすると、いつでも攻撃できるように無造作に構えた。

笑顔で振り返れば勇者の顔は益々強張る。

「言つただろう、勇者君。この子は愚かで馬鹿なんだ。愚直なまで

に努力家で、真っ直ぐにしか進めない。唯一無二の相手のためなら、自分を愛する存在も躊躇なく切り捨てる。それが『伽羅』だ

「・・・狂つてる」

「ははは、それは光栄。僕たちは君たちと種族が違うから価値観も違う。君は伽羅をどうしたい？流石に殺しはしないが、君の望みであればそれなりに考慮する」

「下種が」

「どうやら嫌われたみたいだな」

笑いながら大刀を振り上げれば、伽羅を斬り裂く前に静止の声が聞こえた。

十分手加減をしていたが、それでも勇者が止めなければ振り下ろすつもりだったそれに躊躇はない。

こちらを見上げる伽羅の瞳と一瞬だけ視線が絡み、ワインクすると武器を消した。

「伽羅に対して処分は必要ないということか？」

「ああ。・・・その獣も助けてやつてくれ」

「助ける、ね。困ったな、僕は癒しの力は持たないんだ」

「助ける必要はないわ。この程度でアースは死なない。余計なことはしないで」

「何故！？」

「簡単だよ、勇者君。この獣を伽羅が助けよつとするなら、僕が殺してしまっからさ」

「ツーーー？」

耳元で囁けば、びくりと体を震わせた勇者は目を見開いてこちらを

見た。

その表情にはありありとした恐怖が浮かんでおり、異質なものを見る目だった。

彼にしてみれば先ほどまで伽羅の横に居たはずの自分が、急に横に現れたように感じたのだろう。

別に力も何も使わず、単純に移動しただけだが、スピードに目がついてこれなかつたらしい。

そこから計れる実力に、嘲りを鮮やかな笑みに隠す。

「言つただろ？僕は伽羅の仲間だ。そして、彼女の幼馴染もある。長く付き合つと、情も沸くものだ」

「・・・・・・」

「僕はね、愚かで馬鹿でどうしようもなく悪魔らしくない彼女を、こつ見えてそれなりに大事に思つてゐるんだ。この僕が、『愛してゐる』と口に出来るほど、十二分に特別に想つてゐる」

「『愛してゐる』と、口にするくせに、躊躇いなく斬れるのか」

「当然だ。僕の主は彼女じやないし、何より伽羅自身がそれを望むからね。ああ、でも獸を殺したいのは僕個人の望みだ。獸の分際で伽羅を傷つけるなんて、死んで当然だと思わないか？」

「狂つてる」

「『人間』とは感情の表し方が違うだけだよ。伽羅は決して優しくない。自分を愛する存在ですら、当たり前に殺してみせる。けれどあの獸に剣を向けたのは、伽羅なりの想いの返し方だ。誰だつて自分を嫌つてゐる相手より、愛した相手に殺されたいものだ。そして伽羅が処分した手前、僕もこれ以上手を出せない。獸の生命力が強ければ、彼はまだ伽羅のもので居られる。　　忌々しいが、伽羅の言つたとおり獸は此処で死なないだろ？」

黙り込んだ勇者は、泣きそうに顔を歪めて獣を眺めた。
どくどくと溢れる血を大地に吸わせながらも、獣の瞳が伽羅から逸
らされる事はなかった。

残酷表現があります。ご注意ください。

閑話【むかしむかしの魔法使い・後編】

端的に言つて、その当時の私は力に驕つていたのだろう。その気になつて墮とせない存在はなく、どうすれば効率よく落ちるか、より力を磨くためにどうすればいいか、もしくはこれ以上高めなくとも誰にでも通用するのか、誰に試して良いか、誰に試していけないか、その判断を誤つた。

結論から言つと、アドニスは私の前に墮落した。

小悪魔では魂を掴みにくかろうと懃々成体に戻つたのだが、その必要もなかつたと感じるほどに呆氣なく。

魔王の城に滞在する間アドニスは私の傍を離れようとせず、人間の国に帰る当日は狂つたように仲間を含め力を放つた。人にしておくには惜しいほどの力だと後に白檀様に言わせるほどの暴れっぷりだつた。

自分を人間の国に連れ帰ろうとする勇者たち相手に暴れて暴れれたところで、気が緩んだ瞬間を白檀様により氣絶させられた。氣を失つた瞬間に白檀様の力で私の記憶を捻じ伏せられ、その間に梅香により勇者たちは人間の国に強制転移させられた。

それは、白檀様が魔王と呼ばれて以来の、最大の不祥事だった。

「・・・私が、聖女？」

「どうやら、そつらしい。ほら、これ。勇者君の土産だが、どう見ても伽羅、君だろう？」

「・・・・・・・・」

反省と力の制御のためにそれから百年を費やし、気がつけばまた世界へ渡る周期になった

強固に反論を訴える梅香を白檀様が捻じ伏せ勇者を迎えて、愉快そうに顔を歪めた梅香からその情報をもたらされた。

苦虫を百匹噛み潰してもこんな嫌な気持ちにならないと思ひながら、土産とされた絵画を見る。

金色の波打つ髪に、碧の瞳。肌は抜けるように白く、ゆるく弧を描いた唇は赤く艶かしい。

身に纏う衣服はシンプルな黒のワンピース。髪にも同色のヴェールが被され、胸元には色取り取りの花を抱き僅かに顎が引かれていた。はにかみ目元を染めて笑うその顔は、確かに見覚えがある。

見覚えはあるが、そんな構図に覚えはない。

「何、これ？」

「だから『黒の聖女様』だ。前回君が堕とした魔法使いは深層心理に君を記憶していたみたいだな」

「・・・何ですって？私より遙かに強力な白檀様の力で捩じ伏せたのよ？ありえないわ」

「そう、本来ならありえない。だが実際に人間の世界で広まるこれを止めすれば、信じないわけにいかないだろう？何とも凄まじい執念だな。彼の魂にはもう君の色が刷り込まれていたんだろう。君の記憶は消しても、刻まれた想いは消えなかつた。彼はその後、君とよく似た色合いの嫁を貰つて、画家になつたそうだ。そして描いた絵を教会などに無償で寄付し、気が付けば君は『聖女』様。どんな気持ちだい？」

「最悪よ」

「いいしつペ返しだな、伽羅。あの人は元々君に想いを寄せていた。表立っては抵抗していたが、心の内では伸ばされる腕を欲していた。魔族と拒絕しながらも、渴いた心は望んでいた。伽羅の力が効き過ぎたのもその所為だ。気付いているか？彼はな、抗うのではなく、その力を望んで魂奥まで引き込んだんだ」

吐き捨てるように告げれば、梅香は益々笑みを深めて告げた。私が未だに前回の失敗を引き摺っているのを理解しての行動に、歯噛みするものの反論は出来ない。

違えようもない私の失敗は、梅香にとっても愉快なものではなかった。

彼にも迷惑を掛けているので、気分の逆なでをする気にもならない。笑顔の裏で勇者を忌み嫌う梅香が、懃々情報を得ててくれたのだ。捻くれ曲がっているが、これも一応気遣いの一端なのだろう。

しかしながらこれ以上彼の嫌味を交えた報告を聞くのは嫌で、踵を返そうとしたが肩を掴んで引き止められた。

「何？」

「面白いものを見つけた。君もおいで」

「…………」

ここに嫌だと言つのはとても簡単だが、そうすればいつまでも付きまとわれるだらう。

時間を無駄にするよりも一度で終わらせた方がましかと息を吐いて付き従う。

羽を出した梅香に驚きながら、促されるままに羽を出すと、彼は窓

から外に出た。

普段の梅香なら律儀に玄関を利用するのに、珍しいこともあるものだ。

目的地はどうやら城の敷地の外らしく、どこを指しているのか判らないままに後をつける。

梅香の飛ぶ方向に何かあった記憶はないが、彼が案内するのだから何かがあるのだろう。

空を飛ぶのは陸を歩くより遙かに楽な交通手段だ。

暫く空を飛んでいると、森の一部に空けた場所を見つけた。以前来たときにはなかつた空間に眉根を寄せると、私の疑問に気付いたように空を飛んだまま梅香が振り向いた。

「ううだよ」

「何、ここは」

「僕が見つけた面白い場所。気付かないか?」この気配。意識を研ぎ澄ますと気付く微かな気配

「・・・・・」

「覚えているだろう、伽羅。君が忘れるはずがない。君の最大の醜態で、汚点である存在を」

息を呑み、視線を下へ向ける。

意識を研ぎ澄ませれば、確かに覚えのある気配があった。

まさか、と瞳を丸くする私に笑顔を向ける梅香は、見て「」覽とある箇所を指差す。

そこには成体になつた私が両手を広げた程度の範囲で、赤い何かが広がっていた。

「花？まさか、この地に？」

「そう、そのまさかだ。陽も射さないこの場所で、何かを核にして花が咲いてる。まあ、見ておいで。そこに君の行動の結果がある」

促されるままに地面に向かうと、梅香の気配が瞬時に消えた。顔を上げればそこに彼の姿はもつなく、懶々私を一人にしたのだと気付く。

その行動に違和感を覚えながら花に近づくと、そこで見たものに田を丸くした。

「・・・これは」

確かに覚えている気配。

空からでは僅かにしか感じ取れなかつたが、手が届く距離になれば流石に気付く。

当時の強大なものとは比べ物にならない、残滓と表現した方がいいだろう力の名残。

これは、この力の持ち主は。

「アドニス。アドニス・ファン・デル・サール」

見る影もないほどに腐り果てていたが、間違えるはずもない。美しい容姿も頑強な体躯も燃えるような髪も澄んだ瞳もそこにはない

が、力の名残ではつきり判つた。

百年前の面影すらない形で、彼はそこに存在していた。

それもそうだらう。

私達の世界で百年前でも時間の経過が違うこぢらでは大体四百年は昔だ。

それなのにまだ残骸が残つてゐる方が余程可笑しいのだが、この力の名残を感じると遺体が腐るまで時間が掛かつたのだと氣付いた。

「・・・何故、貴方はここに居るの？」

物言わぬ骸に問いかける。

先ほど梅香に聞いたばかりだ。

彼は國に帰つた後画家として暮らしたと。國で嫁を貰い、過ごしたと。

それなら何故、この地に彼の遺体がある。どうして彼の力の名残が此処にある。

訳がわからず緩く首を振ると、どこからか獸の鳴き声が聞こえた。

瞬時に武器である剣を出すと、片手に持ち周りを見渡す。すると森の中から現れた巨体が距離を空けて留まつた。

その獸はこの場に咲く花と同じ緋色の毛並みをしていた。瞳の色は鮮やかな若草色で、立ち上がれば成体の私よりも大きいだろう。

狼に似た姿をしているが、この地にそんな獸は居ない。魔物の一種だが、何度か来たこの世界で、目の前の魔物のは見たことがなかつた。

見たことはないが、私は彼が『何者』か良く知っている。
そして、この魔物がなんと呼ばれるかも。

「ルー・ガルー。・・・」の地に呪いを掛け、尚且つ獣に身をやつしたのね

「つるるうルう」

甘く喉を震わせた『アドニス』に、私はすっと目を細める。
梅香が見せたかったものが何か私は漸く気付いた。

「人語も操れなくなつたの？」

「ぐるう、ううおーん！」

遠吠えをし、ふさりと尻尾を振つた『アドニス』は、私を見つめ嬉しげに目を細める。

これが私が魂を掴んだ魔法使いの末路だつた。

忠誠を誓つように頭を下げる獣は、知性を感じさせん瞳で私を見る。
彼は私を忘れたはずだつた。

だが実際は忘れていなかつた。

どうやつていつこの地に来たのか知らないが、己の体を媒体に呪いを発動し、この地に赤い花を咲かせた。

この花がこれだけ群生するのに、少なくとも数百年単位で時間が掛かつたのだ。

己の骸の傍で、彼は、『アドニス』と嘗て呼ばれていた男は、一人

で私を待つていた。

あれほど厭んでいた魔物に身をやつしてまで、彼は永き時間を過ごしていたのだ。

『人間』が魔に染まる方法はそれほど多くない。

彼は己の魂を喰らわせた獸の体を乗つ取つたのだろう。

それだけ強く意識を持ちながら、それでも『人間』の虚弱な魂ゆえに中途半端な魔物になつた。

この様子だと人型にもなれないに違ひない。

そうでなければ、私を目にした瞬間に、人の姿になつているだろうから。

「貴方、馬鹿ね」

「うおオーン！」

呆れを含んだ声なのに、嬉しくてたまらないとばかりに獸は幾度も尻尾を振つた。

会えて嬉しいと、幸せだと、言葉に出来ないからこそ体を使って訴える。

魔物であるくせに力の使い方すら理解してないので、意思の疎通すら出来ないらしい。

一つ、ため息を吐き出す。

これが私の行動の結果。

「私は生涯貴方を愛さないわ。この先白檀様の邪魔になるようななら容赦なく殺すし、時には利用すると思うわ。楽な死の方も出来ない

でしようし、楽な生き方も出来ないわ。全てを捨てなければいけないし、簡単に死ねなくなるわ

「ぐるうう」

「それでも構わないといつなら、それでもまだ望むなら 貴方、私と共に来る？」

問い合わせれば、『アドニス』は嬉しげに遠吠えした。

暗い闇に包まれた森のどこまでもその声は浪々と響いていく。

後に力の使い方を教え、彼がどうやってこの地に足を踏み入れたか、人間としてどんな生活を送っていたか、どうやって花を咲かせたか、どうやって魔物を喰らつたかを知る事になるが、それはとても些細なことだ。

居場所も力も姿も捨てたその獣は、新たな名を得て今でも私の傍にいる。

庭が一望できるバルコニーの手摺りに座り、階下で蹲る物体に目を留める。

緋色の毛皮を更に別の赤で彩った獸の周りには私が作った結界が張つてあつた。

あの獸は半端ものが一応魔に属する生き物だ。

人間に与える影響を考えれば念を入れておくに損はない。

一人で風に吹かれながら、少しだけ得た平穏に息を吐く。

勇者の面倒を見るように白檀様から仰せつかつてゐるが、勇者本人から『こちらから声をかけるまでは一人にして欲しい』と望まれた。彼の目の前でアースを断罪して見せたのが余程堪えたらしい。

梅香が傍で囁いていたから何か意地の悪いことでも言われたのかもしない。

一見穏やかな好青年に見えるが、彼の性格は穏やかとは無縁の場所にある。

人間との価値観の相異を理解しながら踏み躡る幼馴染の性格はとても天晴れなのだ。

今までの勇者なら真っ向から対立できていたが、精神年齢が低い子供のような彼では些か荷が重かろう。

だからと言つて全く助け舟を出す『氣はないので泣きつかれても一笑に付して終わりだが。

風に乗つて鉄鎧び臭い香りがこの場まで臭う。

どうやら庭先で立ち上がるうとアースが足搔いているらしく、体が動くたびに新たな血が溢れて地面を汚しているようだつた。

臭いまで遮断していなかつたが、これも閉じ込めるべきかもしれな

い。

力を使おうと指先を持ち上げると、不意に背後から声が掛かつた。

「つ、何する気だーー？」

咎めるような強さを持つた問いかけに、首だけ動かし後ろを振り向く。

先ほどから人の背後をうろちょろしていたが漸く声を掛ける気になつたらしい。

緩やかな結界で彼以外の人間は拒絶していたので、行儀悪い格好を客人に見られる心配もない。

本来なら勇者である彼に一番見られるとまずいのだが、本人が素のままで居ると言つたのだから構わないだろう。

やや青褪めた顔でにじり寄る勇者 フレドリックの姿に目を細めれば、くつと息を呑みその場で足を止めた。

別に威嚇したわけでもないが、アースに対する容赦ない対応を思い出したのだろう。

拳は白くなるまで握られ、体は僅かに震えている。

無理してまで声を掛けなくともいいのに、と思いながら私は新たに外部との遮断をするための結界をバルコニーに張りなおす。

朝の様子だと今回も菊花と梅香の監視の目がついているに違いない。毎回小言を言われるのは御免だし、フレドリックとの遣り取りを見られたいとも思えなかつた。

手摺りに座つたまま動かない私に意を決したのか、今度は大股で近づいてくる。

バルコニーの手摺りから脚を投げ出したまま動かすにいると、手が

『僕をやうな距離で漸く足を止めた。

「あれ以上やる気か?」

「・・・貴方がお望みならば」

「望んではいない!だから、頼むからもう止めてくれ

別にアースに対して攻撃態勢でいた訳じゃないのだが、何を勘違いしたのか唇を振るえてフレデリックは訴えた。

自分に牙を剥こうとした獣でも、殺されるのは忍びないらしい。

ならば始めから余計なことをしなければいいのと思つが、それも無理な話かと否定する。

知識だけ無駄に偏つて持つている彼は、見た目よりも好奇心旺盛のようだから。

「あいつ、あのままじゃ死ぬんじゃないのか?梅香は、俺のためにあんたがやつたって言つてた。俺があんたの手を血に染めたのか?」

「・・・」

一つため息を吐き、視線をフレデリックから逸らす。

何を面倒な展開に持つていつているのだろうか。

勇者嫌いの幼馴染の凶行にうんざりしながら、落ち込むように顔を俯かせるフレデリックに視線をやる。

何故ここまで勘違いできるのか。

どうして私が本心から彼のために動くと思つのか。

確かに私はフレデリックに牙を剥いた罪も含めてアースに剣を向け

た。

しかしその心に勇者への気遣いは欠片も持ち合わせていない。
私はあくまで『白檀様の意思ではないのを証明するため』に動いたに過ぎない。

この地で勇者に手を上げるのは、基本的には禁止されている。
赦されるのは自衛のみ。やられてから初めてやり返す権利を得る。
そうでなければあまりに実力差が激しすぎ、彼が勇者としての権利を執行する前に世界は終わるだろう。

アース如きの半端ものですら人間を殺すには十分の戦力だ。
もしアースが牙を剥いたあの場で、自分の体が先に割り込めないと判断してたら、私はその場でアースを肅清していた。
そしてその上で自分の処分を迫つたに違いない。

アースがしでかした行為は勇者が無傷だからこそあの程度で済んだが、それでも白檀様の無実の証明は必須だつた。
この世界を平定する役目を持つもう一つの種族、『天使族』に知らしめるために。

現在のこの世界は魔が支配する世界だ。
しかし私達が消えればこの地は天使へと権利が委譲する。
香には教えなかつたが、正確に言えばこの世界に『王』はもう一人存在するのだ。
そしてこの世界の理は、彼女に説明したよりももう少しだけ入り組んでいる。

魔王である白檀様に対し『勇者』が存在するように、対になる存在の彼にも『愛し子』と呼ばれ神殿で住まう執行者がいる。
役割は勇者と変わらないのに対応が変わるのは、人間が魔族に対してもどな感情を抱いているか判り易く表していた。

もつとも、『勇者』と『愛し子』が同じ役割を担う存在と知るもの
はほとんど居ない。

この地に派遣される魔族と天使族くらいのものだろう。

どうせ同時に存在することもないのだから、知る必要もない事実だ。

ここで重要なのは、この両者が不可侵であるという部分。

もし魔族、もしくは天使族の一員が『勇者』、または『愛し子』に
安易な理由で手を上げれば、その瞬間に敵対する種族の手出しが許
される。

そうするとことはかなり厄介になり、場合によつてはこの地を平定
する『天使族』の貴族の相手をせねばならない。

それこそが私が一番恐れる事態だ。

だがそんなこちらの事情を目の前の男が知るはずもなく、ただ自分
のために私が手を汚したのかと問うてくる。

必死な眼差しをこちらに向けて、眞実なのか問つてくる。

全くもつて面倒な展開だ。

もう一度深く息を吐き出し、億劫な気持ちを堪えながら彼の問いか
ら僅かに外れた答えを告げた。

「言つたはずよ。アースはある程度では死ないわ」

「・・・だが、体は痙攣し血は止まらない。シェリルが治癒で回復
させようとしたが、近寄るなどばかりに威嚇された。手負いの状態
であつてもあいつは俺たちより強い。どうすればいいか判らない内
に結界が成形され、近寄ることすら出来なくなつた。その癖見せし
めどばかりにもがく様を晒し、憐れでならない」

「あれは自業自得よ。アースもこの地で勇者に牙を向ける重さを理
解しているわ。だから万が一の場合も悔いが残らぬように花畠に一
人で残つたのよ。あの地は想いの因に溢れているもの『よが

「想いの因よすが？」

「……どうせよ、貴方には関係ないことだわ」

一言で切り捨てるが、傷ついたように顔を歪めたフレドリックは、
私から一步距離を置いた。

怯えが体から伝わってくる。

恐怖を隠せもしないくせに、それでも彼はまだ離れない。

「……どうして

「何？」

「どうして、あいつが死ないと断言できるんだ？」

ぽつり、と呟かれた言葉に、私はアースを瞳に映す。
何度もがいた末にどうにか顔を上げた獣は、相変わらず私だけを
一心に見詰めていた。

何故あの体で動き回るのかと思ったが、どうやら私の気配に気付いていたらしい。

結界に遮られながらも私の位置を探れたというなら、少しは力が強くなつたのだろうか。

若草色の瞳を見詰めてやれば、ゆっくりとまた尻尾を振つた。

一回、二回、と無駄に体力を使ってまで、私の意志を引き寄せようと必死に尻尾を揺らしている。

彼の瞳には隣の勇者など映つていない。

先ほどの怒りの片鱗も見えず、最早彼に興味すら抱いていないのだ
ら。

いつもどおりに、私だけを見詰めて、少しでも長く傍に置いてと、言葉ではなく態度で示す。

瞬きせずにその光景を眺めながら、緋色の花を空から取り出した。

一輪だけの小さな花。

それは野に咲く雑草で、華やかさの欠片もない。

突然現れた花に目を見開いたフレドリックは、けれど今度はそれに触れようとしなかった。

「断言くらい出来るわ」

「何故だ」

「断言できるくらいに、彼の執着の強さを理解しているのよ」

弄んでいた花をドレスの胸元に差し込む。

一輪だけなのに存在を主張するように香る花は、そんなに嫌いではなかった。

胸元につけた花を指先で弄つていると、不意にフレドリックが顔を上げた。

先ほどから黙つてアースを観察していたのだが、また何か突拍子でもないことを思いついたのだろうか。

人間の考えは本当に判らない。

博愛を謳う天使のようなものもいれば、ただ一人を恋い慕う悪魔のようなものもいる。かと思えば愛していない相手とでも結婚し、さらに子供までなすものもいるし不思議で面妖でならない。

人間といえば屋敷にハーケとアークを置きっぱなしにしているが、黒方と香は大丈夫だろうか。

一行の世話を香に頼もうとしていたのに、結局あの二人の面倒を任せてしまつたために梅香に借りが出来てしまつた。
むしろこの世界に来るたびに借りが増えている気がしてとても気が重い。

向こうの世界に戻つた時にまた色々と借りを返せと迫られるかと思うと、今からうんざりしてしまつ。

顔を俯け重々しいため息を吐くと、意を決したようにフレドリックが口を開いた。

「おい

「・・・何？」

「あのさ、もし、俺が望んだら、お前はあいつを助けるか？」

「・・・まだ言つてたの？」

「だつてさ、目の前でもがいてたら誰だつて気になるだろ。それに

お前だつて今、辛そうな顔してため息吐いてたし・・・やっぱ、自分の眷属が死に掛けてたら、きついよな

「・・・・・・・・」

別にアースが死に掛けているから重々しいため息を吐いたわけじゃない。

それに先ほどから何度も言つてゐるが、彼は絶対に死はない。

あの程度で死ぬような執着であれば、もつと早く昇天しているだろう。

信用も信頼もしていなが、眷属にした程度はその執念を認めている。

だから傍に置いているのだ。

だがそんな私達の関係など知る由もないフレドリックは、何かを納得したよつに頷くとこちらを笑顔で振り返つた。

立ち直りの速さは歴代勇者に引けを取らないかも知れない。全く面倒な部分だけ受け継いでいるものだともう一度ため息を吐き出すと、大丈夫だ、と頷いた。

「梅香は、伽羅があいつを助けようとしたら殺すといった。けど、逆に言えばあんた以外なら手を出しても放つておくつてことだよな？」

「それで？」

「俺、知つてるんだ。あんたはこの城の中に不可侵領域を有してゐつて」

「・・・それは」

「『手記』に書いてあつた。あなたの部屋から通じる異空間。常夜の魔の世界にあつて、唯一太陽が射す穏やかで優しい場所」

彼が何を言いたいか判ると、私は思い切り眉根を寄せた。

だがこんなにもあからさまに迷惑だと訴えているのに、彼は全く気が付かない。

図太い。フレドリックはもしかすると梅香並に図太いかもしない。

「歴代の勇者は」じわつて『手記』に記している 通称、『伽羅の屋敷』「

捨い物が抜けてる。だが訂正する気力もない。大部分は間違つていいので、別に構わない。

しかし何故勇者は態々『手記』に私の『捨い物屋敷』を記録しているのか。

考え、その原因にすぐに思い至る。

思えばあの空間は勇者にとって知らぬ力で作られた珍しいものだと言つていた。

興味深く、そこに住む生き物にも関心があると。

毎度対面する」とに足を運んでいたが、確かにあれは魔王である白檀様の城にある別空間。

ならあの花畠と違い、『手記』に残されていても不思議じやないかもしぬれない。

「側近も魔王ですから手を入れない、そこはあなたの絶対領域だ」「そこに連れて行つたとしても、私はアースの助命には関与しないわよ」

「・・・それでも、少なくともあんな姿をこじで晒させぬよ」マシ

だろう？あんた以外の誰かが手を施すかもしれない」

それはない。

あそこに居るのは私が許可を『えた数人と、あとは文字通りの『捨て物』だけ。

私があそこの主な以上、私に逆らってまで意思を押し通す輩は居ない。

そう説明しようとし、きらきらしい目で見ているフレドリックに面倒になつた。

あれこれ言つより、行動した方が早い。

香に伝心を繋げ状況を伝えると、真つ直ぐに勇者を見据えた。

「判つたわ。でもそれ以上口出しさは無用よ。貴方の一言で彼の生殺与奪が決まると覚えておいて」

「・・・」

「それとあの場に貴方は連れて行かないわ。貴方も言つとおりにあそこは私の領域。貴方が足を踏み入れる場所ではないわ」

「だが他の勇者達は」

「関係ないわ。それを飲まないなら、アースはあのままで」

何処に居たつて回復力は関係ないだろうが、あそこから離れれば彼の気が治まるなら易いものだ。

確かに人間の目から見れば血塗れの獣は耐え難いかも知れない。

あれこれ言われる原因を退かせば少しは大人しくなってくれるだろう。

何処に居ても傷つき苦しんでいるならば、私の姿があるこの場所の方が、アースは幸せであつたろうに。

田に見えなくなつたとしても何も状況は変わらない。それを、フレドリックは理解しない。

渋々ながらに頷いたのを確認すると、指先を振り力を使つ。倒れまま田を丸くしたアースが、信じられないとばかりに私を見上げた。

「暫く向こうに行つていなさい。香たちには伝えておいたわ」

血を吐きながら震えるアースは、鳴き声か呻き声か声か判断しかねる声を漏らした。

瞬きする間に姿は消え、ついでに庭先の血も処分する。

隣で吐息を漏らしたフレドリックは、安堵したよつて頬を緩めていた。

II四三【へ】（前書き）

35回目更新です。読んでくださる皆様、本当にありがとうございます！

アースを送った後、私はそのまま勇者と昼食へと向かった。血塗れのアースを見て顔を青褪めさせていた割りに彼の立ち直りは早かつた。

性格的なものかそれとも経験値によるものか。判断し難いがとりあえず置いておく。

長い廊下を歩きながら、取り留めなく話し続けるフレドリックの言葉を右から左に流しつつ窓から外の景色を眺めた。

小悪魔の身長で辛うじて外が窺える高さの窓から見える景色は相変わらず薄暗い。

所々で雷が煌いているのが見えるので、白檀様は起床されたのだろう。

そう言えば今日は挨拶のキスをまだしていない。

先ほどは眠そうだったから遠慮してしまったが、次に顔を合わせた時にはさせていただこう。

咄嗟にぬいぐるみを転移させたが、腕の中の存在が入れ替わっていたら不機嫌に違いない。

拗ねたように眉を寄せせるお方をどう宥めようか。考えるだけで心が躍る。

「なあ、伽羅

「何?」

「アースはさ、死ないんだよな?」

「ええ、死ないわ」

いい加減しつこい問い合わせに、僅かに苛立つ。

何度も何度も繰り返したはずだ、あの獣は死なないと。

私への執着心こそが生への執着心。生半可なものでは彼の心を折ることは出来ない。

白檀様のことを考えていたのに水を差され窓の外から視線を戻すと、人間にしては美形と称されるだろう顔を情けなく歪めたフレドリックがこちらを見ていた。

懇々目の前からアースを消し、心に翳を落とす存在を見えなくしてあげたのに、まだ何か気になるのだろうか。

ひつそりと眉根を寄せると、慌てたように口を開いた。

「いや、疑つてゐるわけじゃないんだ」

「なら、何? まだ何か気になるの? そんなに気になるなら殺してしましようか?」

「だからそれは止めろって言つてゐるだろーーそうじやなくあいつが死なないのは判つたけど、あいつが五体満足で癒えなかつたら、やっぱり殺すか捨てるかするのか?」

一瞬、問われた意味が判らなかつた。

表情を消し瞬きを繰り返す。

今、彼は何を言つたのだろうか。

アースが五体満足で癒えなかつた場合、私が彼を殺すと言つたのか。捨てるか、そう言つたのか。

「貴方、何を言つてゐるの?」

「あなたの行動見てたらさ、不安になつたんだ。あなたの命であります命の価値つて凄く軽いだろ?」

「それで？」

「五体満足の状態でもあそこまで軽んじているんだ。なら一部が欠損したら」

「したら何？私が、私のものを捨てる？そう問うていいの？」
「・・・あ。前足が無くなれば機動力は落ちる。弱くなるだらつ？見た目だつて、・・・」

確認するためには聞けば、彼は渋々頷いた。

不貞腐れた子供のような表情だが、白檀様の拗ねた顔に比べると格段と可愛らしさが落ちる。

やはり所詮は勇者だ。子供であつてもこひらの神経を逆撫でにする能力は大したものだ。

しかし怒りは沸かない。この程度の輩に怒りを沸かせるのも面倒だ。

フレドリックの目を見て、ゆっくりと口角を持ち上げる。嘲りを瞳に含ませ、それでも笑顔と呼ばれる表情を作る。

立場も価値観も違つ。そして理解も求めていない。

「たかだか足が一本？げたところで、アースを手放したりしないわ。あれは私の眷属よ。私のために生き、そして死に絶える生き物。足が無くなろうと、首が無くなろうと、何を失つたとしても、生きている限り傍に置くわ。アースは何を失つても私の傍を離れない。目が見えなくなつても、耳が聞こえなくなつても、鼻が使えなくなつても、動く手足が無くなつても、あれは私を探し求め続けるわ。それが眷属というものよ」

「・・・あんた」

「それに、足一本無くなろうが、腹に穴が開いたままだろうがアースは弱いはずが無いわ。事実あの状態でも貴方達は近寄ることすら

出来なかつたでしょ？たかが足一本、たかが腹に風穴が開いた。それだけで強弱が決まるものではないわ。腕が無くとも足が無くとも、強者は強者よ。同様に五体満足であつたとしても弱い者は弱い。

強さの基準はね、体の欠損とは関係ないわ」

そんな程度を教えねば理解出来ないのだろうか。

私は先ほど自分から進んでアースを手に掛けた。

後悔していないし当然だと思っている。

迷いも躊躇も欠片も無かつた。これで死ぬならそれまでだとも思つてている。

だが、だからと言つて、アースへの侮辱を受ける気はない。

あれはただの獣ではなく、私の眷属なのだから。

「見た目が何？部位が欠けたら何があるの？例え欠けて現在の強さが維持出来なくとも、別の手段を探して這い上がるわ。魂も心も強さも忠誠も変わらないのに、私が彼を捨てる理由は何？」

「それは、」

「貴方が言うように私にとつてアースの命の価値は軽いわ。それに関して否定する気も反論する気もない。けれど何も意味のないところで命を奪おうと思つてないわ」

元は人間だつたあの獣、私の理解の範疇外に存在するアースを、それでも根っから否定する気はない。

人であつた人生も、結婚した伴侶も、生まれた子供も、華やかな生活も、何もかも捨てて来た獣。

人間の国で魔術が魔法と呼ばれていた頃に、人間の割には天才的な才能があつた魔法も、優れた力を持つ格闘術も本来は彼の好むとこ

ろではなかつた。

端整な顔立ちながらも常に仏頂面だった彼は見た目より芸術肌で、絵画を描き、楽器を奏で、歌を歌うのが好きだつた。

不条理に私に墮とされた後、私に向かつて日夜楽器を奏でていた。緩やかに微笑み、今が一番幸せと笑つていた、どうしようもなく愚かな男。

今彼は筆を取る手が無い。楽器を奏でる腕もない。甘く響いた声もない。

好んでいた何もかもを捨てて、愛していたか知らない家族を捨てて、永遠を誓つた妻を捨てて、彼はこの地に存在する。

「これが最後よ、勇者様。理解しろとは言わないわ。でも、いい加減納得なさい。アースは絶対死がないわ。そして、何処が欠けてもアースがアースである限り、あれは私の眷属よ」

結婚し永遠を誓つた相手を捨てる精神は理解できない。

それでもその執念は私にも理解できる強さで、だからこそそれだけは否定する気はない。

あの獣は私にとって特別な相手ではないが、私への想いこそが彼の誇りだと知つている。

それを誰にも否定させる気はない。

咬んで含むよつたと言えれば、戸惑いも露にフレドリックは頷いた。きつと彼にしてみれば矛盾だらけの言葉の中で混乱の渦にあるのだろう。

だが私は言った。『理解はしなくていい』と。

「昼食は皆様どう一緒になさいますか、勇者様？」

「……フレドリックと呼べと言つてこる」

いい加減無益な会話を終わりにしたく、態々丁寧に問い合わせれば、あつたりと勇者は乗ってきた。
むすり、と唇を尖らせた訴えは、やはり白檀様の百万分の一も可愛らしさが無かつた。

「昼食は仲間とくる

不機嫌そうな顔で言ったフレドリックに頷くと、何故か彼は眉間の皺を増やした。

今度は何だと観察すれば、そっぽを向いて短く刈られた髪に手を差し込んでがりがりと搔きだす。

さらに無言で観察を続けると、ため息を漏らした彼はまたこちらに視線を戻した。

「 異論は、ないのか？」

「 ないわ。基本的に貴方のやりたいことは妨げる気はないもの」

「 その割りには伽羅の屋敷には踏み込むなと言わたが？」

「 当たり前よ。あそこは私の領域。貴方が足を踏み入れる必要はないでしょ。それより、昼食には私も同伴した方がいいのかしら？」

「 当然だ。・・・何だ？自分だけ別の場所で昼を取るつもりだったのか？」

「 そうね」

「 何でだ？」

初めの頃より大分崩れた調子で声を掛ける勇者の本心が何処にあるか、見定めようとこちらを見詰める蒼い瞳をじつと見返す。僅かに目元を染めた彼の発言にはどうやら言葉以上の意味がないらしく、彼の仲間に少しだけ同情した。

彼は忘れていたようだが、私は先ほど勇者一行の前でアースを処断したのだ。

切れ味がいい剣を体に突き刺し、浴びるほどの大血を流させた。

地面で悶える獣の姿は彼らの目に焼きついているだろうし、何よりその行動をとつた私への恐怖も見て取れた。

誰もが自分ほど切り替えが早くないと気づかなければ見えた以上に性格が大雑把だからだろう。

眉間に皺を寄せて渋い顔をしていた初日の雰囲気では、一々細かいことに気がつきそうに見えたが、この半日ばかりでそんな印象は崩れ去っている。

彼がいくつか知らないが、外見だけが成長した子供、というのが私の結論だ。

子供は自分を中心に物事を考える。

良くも悪くも興味があること以外に関心が薄く、彼の好奇心は今は専ら私に傾いているようだつた。

だから仲間とは言え、彼らの些細な表情や粟立つた恐怖にも気づかなかつた。

否、気付いていても自分の欲求を優先させるために無視をした、が正しいかもしない。

「・・・一応言つておくけれど、私が同席するのに貴方の仲間はいい顔はしないわ」

「どうして？」

「私が自分たちと違つ生き物だと意識したからよ」

少しほその首の上に乗せているものを働くせてみてはどうかと思いながらも、瞳を細めて教えてやる。

人間は　　否、人間だけに言えるものでもないが、自分と違うものに拒否感を覚えるものだ。

それは常識が合わなかつたり、好惡が違つたり、見た目が異質だからと色々と理由があるだろうが、今回の場合は、『一見すると幼い子供が、自分たちよりも数十倍は強い獸を迷いなく串刺しにした』部分にあるだろう。

私たちの見た目は基本的にそれほど人間と変わりない。比べれば彼らよりもやや耳が尖り、羽があるところくらいしか外見的な違いはないだろう。

しかし耳は髪で隠せるし、羽は必要時以外は基本的に仕舞つてはいる。そうすると私の姿など人間からすれば『単なる子供』にしか見えず、自分たちよりも弱い存在だと先入観で決め付けやすい。

だが実際は違う。

彼らが視覚的情報でどんな判断を下したか大体判るが、実際には彼らより遙かに年を経ているし、自分よりも強いと認識したであろうアースよりも私の方が遙かに強い。

見た目で侮つた彼らは、自分たちとは明らかに『異質』であると理解し、そうして恐怖しているのだ。

「それは初めから知つてゐる。あんたは『悪魔』で『魔王の側近』だ」「知識と理解は別物よ」

首を振り否定すれば、ぐうつと喉を鳴らして黙り込んだ。

さすがに幾度も似たようなことを言わなければ少しほとんど理解するらしい。

勇者の仲間である彼らは気づいてしまつた。

人間である己とそれほど差異が認められない、その上子供に見える

相手が、自分たちを殺す力を十分に持つてているのだと。

アースの処断をした私の行動を見て、私が躊躇いなく剣を振るえる存在だと、自分たちを殺せると気づいてしまった。

聊か認識が遅すぎるのではないかと思うが、彼らの出身国は二〇〇数百年と戦乱から遠ざかっている。

平和ボケしていくても仕方ないのかもしない。

私たちからしてみれば重要なのは『勇者』だけだ。

一行の面々は居ても居なくてもいい、言わばどうでもいい存在。

何故毎回ついてくるのかと言えば、代々の勇者を輩出する國の王が

回りの國への牽制を兼ねて諸國から仲間を募るらしい。

私たちからすれば人間の価値などないに等しいのに、彼らの権勢に遠まわしに助力していると考えると嫌な気分になるが、白檀様が受け入れるので一応のもてなしはする。

だが彼らの意識が変わったのなら、これから対応は多少は変化するだろう。

何しろ彼らは認識の中にある『魔物』のよりも、更に上位にいる『悪魔』に囮まれて生活せねばならないのだ。

残りの日数ではいつ殺されるかと恐怖と戦う羽目になる。

ここ一月ばかりは勇者は一人部屋で過ごしていたが、そうなるとフレドリックのベッドも彼らの部屋へ運んでおいた方がいいかもしれない。

何しろ彼らの中で『魔王』に対抗する力を持つのは勇者だけで、彼らも嫌と言うほどそれを理解しているだろうから、きっと極力勇者と離れたがらないだろう。

そこをどうするかは梅香の腕の見せ所だ。

彼のことだからそつなくフレドリックと一緒に距離を取らせる術を用意するだろう。

「ともかく、貴方は仲間のところに行くといいわ」

「・・・伽羅も行くぞ」

「私の言葉を聞いていた?」

「聞いたが納得できない。それに、あなたは俺の世話係を言い渡されてただろ? 俺から離れるのは変だ」

「変・・・」

「そうだ。だから、あんたも一緒に僕をとる。行くぞ」

「・・・」

あくまで我を通すつもりらしいフレドリックを目を眇めて眺める。確かに白檀様から申し付けられた内容なので異論はない。異論はないが、面倒だ。

恐怖に強張る顔で窺われつつ食事を取るのは不快だし、その様子を楽しそうに観察する梅香の前に行くのも気が進まない。

言いたいことを言つて満足したのか、背中を向けて歩き出したフレドリックに呆れてしまう。

私が背後から襲い掛かるとか微塵も考えていないのか、それとも警戒心の欠片も持たぬ生物としての本能が欠落しているのか。これを信頼の証としているつもりなら、先ほどまでの会話の答えとしているなら馬鹿以外の何者でもないだろ?。

『失礼だな、伽羅。僕がいつ君を面白半分で観察したと言つんだ?』

『説明しなくとも判つてるとこだ。いつから聞いてたの?』

『君が昼食をどうするか尋ねるとこだ。誰かさんが態々結界を強化してくれたおかげで、アースを移動させたことは判つても理由で判らない』

『さう。それは上々ね。怪我が癒えるまであれはここには戻さないわ。使いたかつた?』

『いいや。僕は別に君の獸に頼らなくてはいけないほど落ちぶれないからね。ああ、だが少し君の協力は欲しい』

うござりしている時に、やがてひざをのよつた床心にて、それでも『是』と返事をする。

幼馴染としては色々思つ部分があるが、魔王側近としての梅香は信頼が置ける相手だ。

生まれながらに白檀様に仕えることが約束されていた彼は、私を利用してでも白檀様に尽くす。

その彼の判断に異論があつはずがない。

『では、勇者君と一緒に昨日と同じ部屋へ来てくれ。先ほどの言伝、香へきちゃんと伝えるように』

『判つたわ』

指示通りに香に伝心を繋ぎ、梅香からの言伝をそのまま伝える。僅かに憤る彼女を宥めるといつの中にか勇者が一いつを振り返りじつと見詰めていた。

「何?」

「・・・その、遅いからだな、手を」

「馬鹿?」

続く言葉を想像し即座に切り捨てる。

初日には年を考えると仲間に苦言していたはずの今代の勇者が幼女趣味とは知らなかつた。

それとも一応私のことを知つてゐるなら、幼女趣味とは言い難いのだろうか。

どちらにせよ私は不必要な場面で人間に触れる趣味はないので、冷め切つた眼差しで睥睨して話しあは終わつた。

昼食を取るために合流した部屋の居心地は、予想通りに悪いものだつた。

食事を口に入れるたびに視線が集まり、顔を上げればあからさまに逸らされる。

彼らに手出しをする気は今のところ全くないのだが、一いつもあからさまだと流石に鬱陶しい。

梅香の話題には相槌を打つ勇者一行と、それとは逆に私に話しかけ続ける勇者。

席順の所為かもしだれないが、きつぱりと分かれた境界線は判り易すぎるだけに下手に手を打てない。

私から声を掛けても萎縮するだけだらうし、逆に梅香がフレドリックに声を掛けても同じだらう。

隣でペラペラ喋る勇者に適当に相槌を打つていると、漸く香からの伝心が入つた。

『お姉さま、こちらの準備は整いました』

『そう、ありがとうございます』

『そんなお礼なんて恐縮です！むしろ遅くなつたのを謝らなければならぬくらいなのに』

『いいえ、十分よ。梅香、聞いてるわよね』

『勿論。少し時間が掛かつたが、十分許容の範囲内だよ香。ありがとうございます』

『梅香様からの礼など望んできません。あたしはお姉さまのためにのみ動いてます』

『本当に僕は嫌われてるな。僕は君が嫌いではないのに片想いが』

『気持ち悪いです。氣色悪いです。冗談でも止めてください、虫睡が走ります』

『ある意味君には感心する。この僕に向かってそこまで堂々と言いい返せるのだから』

『あたしが恐れるのはお姉さまに拒絶されることだけです。それ以外の何を恐れると言うのですか』

『そうだな。極めて悪魔らしい思考だ』

『当然です。私も悪魔の端くれですからね』

香の答えに笑つた梅香に、人間達の視線が集中した。
彼らには私達の会話は聞こえないし気取られもしないので、唐突な行為に驚いたのかもしれない。

自分に視線が向いたのを丁度良いと梅香は利用した。
彼らの意識が十分に自分に向いているのを自覚しつつ、食事が始まつて以来初めて私に話しかける。

「そう言えば、伽羅。君が拾つてきた人間の様子はどうだ？」

「そうね、大分調子を取り戻したわ」

「・・・拾つた人間？」

食いついたのは予想通り、好奇心旺盛な勇者だつた。

ちらり、と視線を向ければ、彼以外の人間もこちらを見ている。

先ほどまでは私と目が合つても逸らしていたのに、僅かに怯むが話は聞いているようだつた。

梅香も同じように判断したらしく、殊更愛想良くフレドリックに笑顔を向ける。

「そう。伽羅は拾い癖があつてね。先日も、怪我をした人間を拾つて介抱していたんだ。あれは、どれくらい前だつた？」

「一月ほど前ね。散歩中に魔物に襲われているのを見つけたから助けたの。今では起き上がって歩くことも出来るわ」

色々割愛しているが嘘ではない。

一応拾つた時は人間だつたし、魔物にも襲われていた。怪我をするどころか本来なら死んでいて当然の彼らだつたが、今はぴんぴんしている。

ぴんぴんしそぎて香に扱かれまくるほどに元気になつていた。昨日と話す内容は同じだが、言葉尻を少し変えるだけで受け取る側の印象は随分と変化する。

事実、私と梅香の会話に、人間達の警戒が緩んだ。

先ほど私が剣を振り上げていたのを見ていたが、彼らの同族を助けたと聞いて油断が生まれ始めたのだ。

「キヤラちゃんが人間を助けたの？」

「結果的にはそうなりますわ。・・・もし宜しければお会いになられますか？」

「そうだな。差支えがなければ紹介してもらえるかい？俺たちも知つてる人かも知れないし」

「・・・」

驚きながらも僅かな笑みを向けてきたシェリルと、彼女ほど警戒は

解いていないらしいアイル。そして無言を通すウェイに向かって小さく微笑むと、指を振り力を使つた。

次の瞬間、目の前に現れた人間に勇者一行の瞳が丸くなる。それはそうだろう。

昨日の会話を覚えている私達は、勇者一行の警戒心を緩めるために彼らを利用すると決めていた。

ハーグとアーク。双子の元・人間を。

香に扱かれた傷を隠すのにきつちりと首まで隠す黒の上下を纏つた彼らは、優雅に一礼して見せた。

瞳の色は黒に近い藍色。冷静でいるのを確認し、私はそつと視線を外す。

椅子から降りると彼らまで近づき、私は勇者一行に笑顔を見せた。

「彼らの名前はハーグとアーク。皆様ご存知の方かしら？」

微笑みながら小首を傾げる。

息を飲み込んだ勇者一行は、驚きに見開かれた眼まなこで彼らを一瞥し、そして私へと視線を戻した。

驚きゆえに瞳から払拭された警戒心に、彼らの死角で梅香が一つ頷いた。

「ハーグ様、アーク様！」

一番最初に行動したのはアイルだ。

昨日も思つたが、彼はもしかしたらこの二人と知り合いなのかもしない。

呆然とする仲間を余所に、アイルは彼らの前に駆け寄りすぐさま跪き礼を取つた。

「存命だと信じておりました・・・！」

その瞳に涙すら浮かべ深々と頭を垂れる様は、その仕草に慣れたものの行動だった。

もしかしたら、思つより身分が高いのかも知れない。

しかし頭を下げるアイルを見るハークとアークの瞳は至つて冷たい。昨日の私への言葉を覚えているからに他ならないが、勇者一行は忘れているのでその態度は不自然だ。

無言で睨むと何気ない仕草で彼らは態度を改めた。

「心配を掛けたか」

「すまないな、アイル。だが俺もハークも伽羅様のおかげで五体満足で生きている」

「怪我をしたところを、こちらの伽羅様に助けていただいてな」

「ああ。随分と良くしていただいた。衣食住どれも無償で提供してもらい、怪我をしている間は看病もてづから致してくださつた。おかげで体も回復し、ここまで動けるようになつた」

淡々とした口調で話す双子は、表情の変化に乏しい。

私の前ではもう少し変化があつた気がするが、アイルの態度を見る
とこちらが素なのだろう。

一人称も『俺』になつてゐるし、それに違和感も感じない。

ハークとアークの言葉に、人間達の私を見る目が完全に変わつた。
先ほどまでの懐疑的な眼差しから、尊敬の眼差しへと。

私からすれば捨てられたものを拾つただけなのだが、彼らにとつて
その行動は私が予想する以上に意味があるものなのだろう。
容赦なく殺されかけたアースを見ていたくせに、随分と簡単に感謝
の念を向けられ、むしろ拍子抜けしてしまつ。

双子が悪魔である私を様付けて呼んでいるのも気にならないらしい。

しかしそれだけで今後の行動が取り易くなるなら、利用しない手はない。

双子に視線をやれば、心得たように会話を続けた。

「弟達もさぞかし心配しているだろ?」

「はい・・・・ツ、特に王女の錯乱振りは酷く、弟君がお慰めして漸
く正氣を保つていられる有様です。早急に國へお戻りください」

「いや、それには及ばぬ。もしかして、まだ話を聞いていないのか
?」

「・・・何を、で?」ぞこましょつか?」

「数日後この城に各國の王族が集められることをだ

「え?」

「そうか。まだ聞いていなかつたか。それなら丁度いいから話を聞
いたらどうだ? 梅香様、彼らにも説明をお願いします」

「そうだな。彼らにも話をしようと思っていたんだ。君たちも同席
するといい。昼食は摂つたのか?」

「はい。伽羅様の屋敷で頂きました」
「ならない。伽羅、椅子の用意を」
「判つたわ」

指を振り力を紡ぐと二つ椅子を作り上げる。

空いている私の隣にそれを並べると、彼らは上品な仕草で一礼し椅子に腰掛けた。

『上出来よ』

彼らに向け伝心で告げると、喜びに震えた感情が伝わってきた。
まだ力は使いこなせていないが、感情を伝えるだけでも上達は早い。
一方通行であるが使えないのと使えるのとでは大分違う。
この短期間に伝心の初歩を元・人間である彼らに叩き込んだ香には、
後ほど何か礼をしなくてはいけないだろう。

腰掛けた彼らの前にお茶を用意すると、タイミングを見計らい梅香が口を開いた。

II四三【一〇】（繪書九）

今日は長々と説明が続いています。
いつも以上に会話が少ないですが、どうお付き合くださいませ。

ハークとアークの二人が居るだけで昼食の席は随分と和やかに済んだ。

おかげで梅香の機嫌もいい。

彼からしたら凡そ予定通りの行動なのだろう。

勇者を人間代表と呼ぶなら、王族は国代表と呼べる。

勇者を觀察し人間を判断し、王族を觀察し国を判断する。

勿論それ以外の部分からもこの二十年で色々と白檀様は觀察されているのだが、人間と話すのも国の代表者と話すのも滞在時には一度だけだ。

先ほど、勇者一行に説明した各国の王族が集まる食事会は、国の代表を見て白檀様が各国に与える力の配分を決める場だった。

この世界は『悪魔』と『天使』が交互に力を送り平定する世界だ。『人間』を愛でる天使は自分が『守護』する世界を見守りつと、私達魔族が居ない間の『世界』に居座る。

そうして自分たちが持つ『光の力』を存分に与え、この世界を保つていた。

しかし光があれば対になる闇も必要になる。

配分が上手く均整が取れない限り世界は歪みやがて崩れる。

その歪みを直すために一時的に自分たちの世界に戻った天使に代わり、現れるのが『魔王』と呼ばれる魔族だ。

『天使』と違い、『悪魔』は人間と寄り添う気はない。

たつた一度の会合で全てを決めるなど『天使族』なら言ひづらうが、今現在はこの地は魔族が支配する世界。そして現在の世界の『王』は白檀様一人なので文句も言えない。

魔王が扱うのは『闇の力』。

私たちより長期に渡り滞在する天使とは違い、白檀様は短期集中で力を与える。

鮮烈な光で影を消すのではなく、安息の闇で包み込むのが役目だが、私はその力をどのように使うかもわからない。

そもそも世界の維持をどのようにするか、魔王の位を持つ悪魔以外は理解しようがないと以前白檀様が仰っていた。

世界の平定に使う闇の力も悪魔が本来持っている力とは少し異質なものらしい。

そして世界を平定するこの仕組みを作ったのは、私達『悪魔』と敵対する『天使』が共通で『神』と崇める存在だが、長命な私たちからしても遙か昔からの慣わしなのでその理由は判らない。

『神』の存在が疑われるのは『悪魔』と『天使』に与えられる力を証拠としているからで、その力も魔王の称号を頂くときを得るものだ。

そして本来ならここまで深い知識を得る立場じゃない私がそれを知っているのは、私が魔王側近の立場を得ている悪魔だからで、その程度の価値しかない私には『神』の存在は生涯縁がないだろう。

しかし詳しい原理が判らなくとも、私がすべきことは理解している。魔王の側近である私は、白檀様が世界に対してもう動くかを判断する手助けをすればいい。

国の均衡や勇者の存在がどれだけ重要なものか知れないが、白檀様がそれを必要としているのだけを判つて居ればいいのだ。

白檀様が後々が面倒だから勇者とその一行を手に掛けるな、と命じられればそれに従う。

勇者以外に価値がなくとも、基本は許可が下りない限りは命は奪わない。

それもこれも今のところはと注釈がつくが。

ちなみに軽く説明を終えた頃には、勇者一行はすっかりと警戒を解いた様子でマークとアークと会話していたし、私へも笑顔を向けてきた。

こんなことのために双子を拾つたのではないが、白檀様の役に立つなら彼らに協力してもらうのもいい。

マークとアークの生存に浮き立つ彼らに、折角だから話をってきてはどうかと梅香が差し水を向ければ、彼らは一・二もなく頷いた。席を外すと告げた梅香の言葉に喜んだ彼らは、そのまま食事を摂つた部屋に残つている。

ちなみに席は外しても梅香の監視は外れない。
一応マークとアークに後で状況を説明するように伝えてあるが、彼らを信用していない梅香の行動は当然とも言える。

勿論私も意識の欠片は彼らの元に残したままで、双子を中心に盛り上がる人間達の様子は絶えず脳裏に流れていった。

しかしながら私の仕事はそれとは別にあるので、平行して勇者を伴い白檀様の執務室へ向かっている。

勇者との対談も白檀様の務めの一つなので、その案内の最中だった。

「なあ、伽羅

「何？」

「これから昨日みたいに俺は魔王と話をするのか？」

「ええ、そうよ」

「あなたも同席しろ」

「・・・私も？」

唐突な言葉について顔を上げてしまう。蒼い瞳でこちらを見ていたフレドリックは、一くじと頷くと話を続けた。

「そう。一人きりだと氣詰まりだろ？あんたが居れば少しは話しがしやすくなる」

彼は一体私を何だと思っているのだろうか。

私は彼とは違う存在だ。『人間』ではなく『悪魔』だ。

それなのに、その私の前で何を馬鹿なことを言っているのだろう。こういう部分は昔の『勇者』と変わらない気がして、肩を竦めてため息を落とす。

「魔王様に伺わないと私では判断できないわ」

「なら考えてくれるか？」

「私の意志は関係ないわ。魔王様の意思に従つだけだもの」

「・・・・・」

実際白檀様が同席しろというなら異論はない。

フレドリック以外にも、過去に私の同席を求めた『勇者』は存在したし、経験がないわけじゃない。

白檀様は『勇者』との会話も自分の力を振るつための基準に取り入っている。

私からすれば『勇者』との会話のどの部分に重要な要素が入っているか全く判らないが、それでもそういうもののらしい。

「なら、魔王が『是』と答えれば伽羅には異論がないことじだな」

「その通りよ」

私の返答に頷いたフレドリックは、やや早足になる。
どうやら白檀様を説得する氣らしい。

そんなに気合を入れなくとも、白檀様の性格からして『否』と答えるのはまずないだろう。

私を交えると『勇者』の雰囲気が変わることで、私を交えての対談と、私を交えない対談をするのは恒例になつていて

しかしそれにしても勇者とはつづく変わつてゐる。

私達の存在の意味を知らぬ『人間』からすれば、勇者の使命は闇の恐怖を広める魔王を含めた私達をなるべく早く異世界へと戻すことははずだ。

別に恐怖を広めに来たわけではないが、彼らは固く信じてゐし、人間は闇雲に魔族を恐れる。

それなのにその交渉をしてゐる様子はなく、むしろ好奇心のままに動いている。

どうせフレドリックが急かしても、白檀様の決めた期間はきつちりとこちらの世界に在住するのだから彼らの意思など関係ないが、それでも普通は早く帰つて欲しいと望むものじゃないのだろうか。

魔王が異世界にいる期間は、基本的に勇者が現れてから決められる。現れると言つのは生まれるという意味ではなく、勇者が勇者の役目

を人間の国で正式に背負つてから、という意味だ。

この世界に滞在する一十年近くは勇者が生まれて育つのを待つていいに過ぎない。

今までの勇者の滞在期間は大体三日から、長くても五日が普通だつた。

それが今回は異例の一週間。

勇者が国を出立する前に滞在期間を相手に通達するのが通例だが、今までの勇者とは違つても、過去の『手記』を確認するならそれが今までで最大のものとフレドリックは判つていいはずだ。

それでも望まれない魔族が長期滞在しているのに、彼の顔に不安は見受けられない。

「変わつてゐるわ

咳けば、早足になつたため、僅かに先を歩いていた彼は懶々振り返つて首を傾げた。

フレドリックが『勇者』である限り好意は抱きようがないが、不思議な生き物だとは思う。

その瞳に浮かぶ疑問を無視すると、白檀様へと伝心を繋げた。

香は今日も忙しく仕事をしていた。

この屋敷は『伽羅の拾い物屋敷』と呼ばれるだけあり、伽羅が拾つてきた生き物が何匹も居る。

薄汚い狐だつたり、手が？げた下級の魔物だつたり、あるいは翼の折れた鳥だつたり、矢が刺さつた犬だつたり、その種類も大きさも体調も様々だ。

共通するのは『捨てられた』という事実のみ。

彼らが捨てられた相手は実に様々だし、伽羅が捨う基準も香は知らない。

そうして拾われた彼らは基本的に伽羅が面倒を見て、彼女が居ない間だけ香が面倒を任せられた。

伽羅がいない間彼らの様子を見て管理するのも香の役目で、放つて置けば捨てられた生き物を延々と拾い続ける主に苦言を呈するのも香の役目だ。

怪我を負う生き物の傷の様子を一通り見て、今度は部屋の掃除をする。

不思議なことにこの屋敷の中に共存する『拾い物』は、互いを仲間とでも思つてゐるのか争いや諍いを起こさない。

怪我をしてゐる生物としての本能を疑つところだが、十分な餌をやつてゐるため食事を理由に相手を殺す必要がないのかも知れない。動けるものは皆一階の開け放してあるドアから外に出るため、室内の汚れもそこまで酷くない。

香は簞片手に、愛する伽羅に留守の間の屋敷の管理を任せている部屋の隅々まで綺麗に磨く。

そしてどれだけ仕事が忙しくとも、一日に一度は必ず訪れてくれる主が安らげるよう彼女の好みの花を生けるのだ。

香がこちらの『世界』に足を踏み入れたのは今回が初めてだ。話には聞いていたが、やはり本来住んでいる世界とはところどころ違っている。

中でも驚いたのは『人間』の存在だ。

先月伽羅が拾つてきた人間は、正確には人間と言えなかつたが、それでも酷く脆く脆弱だつた。

伽羅に与えられた血は一滴だと言つていたのに、血に馴染むのに三週間も掛かつた上、その間伽羅直々に看病されていた。

本来ならそんな僥倖を得る立場の相手は限られているのに、それだけで香の『人間』への評価は下がる。

伽羅が仕事の間は香も彼らの面倒を見たが、苛立ちは常に共にあつた。

香を一番苛立たせたのは、彼らが伽羅に向けた視線だ。

憧れ、尊敬、敬慕、思慕、そんなのは慣れているから我慢できる。そんなものは向こうの世界でも伽羅には溺れんばかりに浴びせられるものであり、傳ぐためなら何を投げ打つても良いと言う輩で溢れていたから。

美しく気高い主は香の誇りであり、永遠の憧れだ。

他人への関心がない故の冷淡な態度とは違い、香には柔らかな笑みも向けてくれる。

堪らない優越感と共に与えられる至福。

相手が伽羅の視線に映つていないのを理解しているからこそ、彼らが伽羅にすぐなくされる瞬間を見るのがとても好きだ。

そうではなく、彼らの視線に僅かに含まれた『憐憫』の色。それが香の気に酷く障つた。

伽羅から予め『人間』は自分たちと違う生き物だと教えられている。あちらの世界で師匠にもそう言われていたし、知っているつもりでいた。

それなのにこちらが当たり前のつもりで行動しても、彼らは時として憐れみに満ちた眼差しを向けてきた。それが苛立たしく、憎々しい。

「・・・香
「黒方様」

声を掛けたのは伽羅の弟分である黒方だった。

白檀とよく似た漆黒の髪を持つ男は、瞳すら伺えない分厚いレンズの底から視線を向ける。

不思議な意匠の服の上に医者でもないのに白衣を着た彼の手には、湯気を立てた何かが乗る皿があった。

「伽羅はまだ来ないのか?」

「ええ。お姉さまはあちらで勇者達と眉を撰る事になつたそうです
「そうか。・・・折角、伽羅の好きな『マフィン』を焼いたのにな

物静かな様子で、それでも眉を下げて悲しみを表した黒方に、香も釣られて眉を寄せた。

朝から厨房に籠つて何をしていたかと思えば、彼の世界のお菓子を

作っていたらしい。

焼きたてのそれを皿に乗せたまま俯く彼の気持ちがよく判る。香も昼の時間を伽羅と一緒に摂れるものと思っていた。

伽羅の好物であるスープも昨日の晩から仕込んでいたのに、勇者の言葉で伽羅はあちらで昼食を摂る事になってしまいとても残念だったのだ。

先ほど伝心を繋げられた時にさりげなくじうするか聞けば、夜に一度こちらに来てくれると言つていたのでその時にお腹が空いてらしたら出そうと思つてている。

師匠直伝のこのスープは、伽羅がとても好んだものだから。

「そう言えば、あの一人はどうした？さつきまで庭で片手間に扱いてなかつたか？」

「・・・あちらに送りました。梅香様からお姉さまに要請があつたらしく、訓練は中止です」

「訓練、か。随分と激しいものだつたな」

「どこがですか。加減しすぎて訓練にもなつていいくらいですよ。内蔵も潰してないですし、体も欠損していません。ちょっと強めればすぐに意識を失うし、お姉さまの盾に相応しくなるのはいつのことが判らないですね」

「盾になる素養はないか？」

「・・・どうでしょ。人間を鍛えるのは初めてですから。ですが、普通とは違うお姉さまの血を飲んでいます。素養は出来ているはずです」

そう。元がどれだけ情弱でも伽羅の血を飲んでいるから素養がないとは言わせない。

香が人間を見たのは彼らが初めてで、相手をして更にその弱さに驚

いたが、何をされても文句一つ言わずに喰らい付いて来る根性だけは認められるだろう。

だが香に言わせればそれ位は当たり前だ。

何故なら彼らは伽羅の眷属なのだ。

根性の一つも示せないで、彼女への忠誠心は嘘わせない。

「憐れだな。折角選択肢を示してやつたのに、脆弱な身でありながら進んで墮ちて来るとは」

「僥倖ですよ。捨てられた身でありながら、お姉さまに拾っていただいたのですから

嘲りと自嘲を含んだ笑みを見せた黒方に、つんと顎を逸らして宣言する。

「お姉さまの行動に意味はありませんが、彼らはお姉さまに死します」

「言い切れるのか」

「当然です。私達はそういう生き物なんですよ

黒方は自分と違う。正確に言えば自分や伽羅、そして新たに眷属に加わったあの二人とも違う。

同じ立場でありながら、その在り方が根本から違う彼は、きっと生涯理解できない。

それでもその心は想像できる。

複雑な想いを抱きながらも、結局彼も伽羅が心配なのだ。

黙り込んだ黒方を眺め、近くの窓を覗くと視線を庭先に落とす。そこには血を撒き散らしながら回復しようと力を溜める獣が居て、その獣の『元』を知っているだけに香は少し不思議だつた。

『彼らは『人間』。私たちとは種族が違うわ。想いの表し方も、感情の起伏も、恐怖する対象も愛情の示し方も』

不意に脳裏に伽羅の言葉が蘇る。

口で教えられても、実際に耳にしても、まだまだ香には人間は理解できそうになかった。

「お姉さまが

「え？」

「夜にはお姉さまは一度『いらっしゃり』来ると仰っていました。食べてもらいたければ、それは夜まで置いとくと宜しいかと」

「・・・そうだな」

教えてやると、嬉しそうに黒方は口元を綻ばせた。

そこから感じる愛情は香とともによく似ているのに、やはつど二が違つもので、やつぱり香は不思議だった。

「伽羅をこの場に同席させてくれ

「ああ、別に構わぬぞ」

勢い込んで白檀様に訴えたフレドリックは、あまりにあつさりと許可を与えた彼に目を丸めた。

先に私から伝心で報告していたのだが、それを彼は知らない。そして別に報告せずにその場で勇者が提案していくも今と同じ気軽さで許可を出していただろうことを知っているので、私も別に驚かない。

肩透かしを食らつて目を瞬かせるフレドリックに席を指差すと、私はこちに来いと手招く。

招かれるままに近寄れば、ひょいと片手で抱き上げられた。膝の上に乗せられると、そのまま腰に腕が巻きつき抱え込まれる。わずかばかり力が籠められた抱き方に顔を上げれば、少しだけ責めるような視線が注がれて思わず破顔してしまつ。どうやら朝先にベッドから抜け出たので不機嫌らしい。

「・・・何で伽羅がその位置なんだ?」

「この子が俺のものだからに決まっているだろ?」

「止める。勇者を前にしてする態度ではない」

「ほう? ならどのような態度が魔王らしいのか教えてもらおうか?」

「少なくとも、幼女を膝の上に抱きだらしなく表情を崩すのではないな」

フレドリックの言い分に瞳を細める。

白檀様を前にしてあまりな言い分に苛立つが、白檀様自らに宥められ心を落ち着かせる。

そのまま緩やかに髪を指先で弄ぶと、余裕たっぷりな態度で瞳つ。

「そうか。だがこれが俺だ。些細なことを気にするな勇者殿。度量がしれるぞ」

「ツ」

「それ以上は止めなさい、フレドリック。魔王様に無礼を働くなら、私はこの場から消えるわ」

「伽羅」

「勘違いしないで。私は貴方が望んだからこの場に居るけれど、そもそもそれ自体が勇者の面倒を見るように仰った魔王様のお言葉に従つた結果よ。私の前でこれ以上魔王様を侮辱するのであれば、私が貴方の相手をするわ。・・・度量が知れてよ、勇者様」

「・・・・・」

私の言葉で黙り込んだ勇者に鼻を鳴らす。

悔しげに唇を咬みこちらを睨んでいるが、別に怖くも何ともない。彼の視線を真っ向から受けていると、それを遮るように後ろから伸びてきた掌に視界を塞がれた。

小悪魔姿の時であれば片手で顔を覆うのは容易だ。

そうして私の視界を塞ぎながら顔を近づけた白檀様は、耳元でそつと囁きを零す。

「俺の可愛い養い子。どうして朝は俺をきちんと起こさなかつた

「ぐつすりとお休みになられていらしたので。僭越かとは存じましたが、昨日はあまり眠つていらつしゃらないでしよう? 眠れるときに体を休めるのが一番かと」

「・・・それで俺の腕から抜け出し別の男と逢引か?」

「まさか。私が逢引などありえません」

「ふん。どうだかな。挨拶もせずに消えたくせに」

「眠りを妨げぬよう、一度だけ額にさせていただきました」

「目が覚めていなければ挨拶とは言えぬだろ?」

視界を覆う掌を両手を使いそつとぞけ、拗ねた口調の彼を見上げる。柳眉を寄せて不機嫌そうな様子で私を見る白檀様に、不謹慎だが笑つてしまつた。

「では、この場で挨拶をさせて頂いても宜しいですか?」

「・・・ふん。構わん」

つん、と僅かに視線を逸らし許可を『えて下さつたので、遠慮なくと体を伸ばす。

膝の上に座つている状態から彼の肩に手を置き、伸び上がるようにして頬に口付けた。

「一度だけか?」

促され、さらに反対の頬、額、唇すれすれの場所に口付ける。すると漸く機嫌を直してくれたのか、私の髪を耳にかけると白檀様

も頬に口付けを『えて下さつた。

嬉しくて笑みを零すと、瞳を細めてその様子を眺めた白檀様は頭をゆるりと撫ぜる。

そのまま前髪をどけ、額にも口付けると満足気に笑つた。

「・・・何やつてるんだ、あんたたち」

白檀様との今日一一度目の触れ合いに喜びを噛み締めていふと、冷め切つた声に水を差される。
この場に居るもう一人の存在を邪魔に思いながら笑顔を消して振り返つた。

「挨拶よ」
「何が」
「見ていて判らなかつたの？」
「ああ、判らないな」
「なら説明しても判らないでしょ。黙つていなさい」
「こらこら。そんなことを言つては俺の仕事が捗らん」
「申し訳ございません」
「レイノルド。お前も焼き餅ばかり妬いていないで少しほは余話をす
る努力をしろ。お前に『えられた使命は何だ」
「・・・・・」

再び黙り込んだフレドリックは、悔しげな眼差しで白檀様を睨み付
けた。

その態度に苛立ちつつも、行動には移らない。

幾度も止められているのに先走つては白檀様の意思に背いてしまう。人間如きに白檀様を貶されるなど容赦できる内容ではないが、私を抱く腕が体を緩く拘束している。

そして何より勇者を相手にして白檀様が愉しげに笑つてるので動けない。

「さあ、勇者殿。俺にお前たちの世界の話を聞かせてくれ。それこそが勇者の務めで、お前がここに存在する意義。伽羅に興味を持つのは構わぬが、最低限の仕事はせねばな。伽羅も一々突っかかるな。話が進まぬ」

「・・・はい」

「判ればレイノルドに謝罪を。お前の態度も悪い」

「はい、魔王様。出過ぎた真似を致して申し訳ございません、勇者様。ご無礼をお赦し下さい」

白檀様に促されるままにフレドリックに向かつて頭を下げる。

そんな私に、今日の中で一番苦々しい視線を向けたフレドリックは、それでも吐き捨てるように『赦す』とただ一言返事をした。

その瞳に宿る色は、過去に見た『勇者』のそれと酷似したものだった。

私は根本的に言つと『人間』どうじう以前に『勇者』が嫌いだ。感情の好悪をあからさまに態度に表していないだけで、手出しが赦されているなら自分の存在と引き換えにしていくらいに勇者を憎んでいる。

今までの勇者はそれを理解した上で私に接してきたが、今回のフレドリックは違うらしい。

どうも、初代勇者と初めて会つた頃のような態度に酷似している。白檀様もそう思つたのか、緩く口角を上げて見せ付けるよつ私の頬に唇を寄せる。

すると田つきを鋭くさせた勇者は、さわりと憤怒を混めてこひりを見つめてきた。

「ふむ。やはり、勇者は勇者だな」

確認するよう観察していた白檀様は、フレドリックには聞こえない大きさで囁いた。

その言葉に、彼に知れないよう私も僅かに顎を引き同意する。

白檀様の観察対象として存在する勇者は私にとつても因縁の相手だ。

フレドリックが勇者として欠けているから今は上辺だけでも普通に会話できるが、これが先代までの勇者ならこつは行かなかつた。白檀様に対しても不敬の数々どこるか、あからさまに嘲笑を含んだ態度をとることも多かつた。

まあ、それも全て過去になつてるので、今更どひつひつ言つても仕

方がないが。

「そう言えば、勇者殿。梅香から明後日の話を聞いたか？」

「ああ。各国の王族を集めてのパーティだろ？ 魔族が人間を心からもてなすと思えないがな」

「そうだな。別にもてなすのが仕事ではない。だが無駄にことを荒立てる気もない。俺はいたつて平和主義だからな」

「魔族が平和主義だと？ この荒れた地を前によく言えるな」

「くくく・・・レイノルド、俺相手にそこまであからせまな口を利くのはお前くらいだぞ？」

「だからなんだ？ 魔王だからと平伏す相手ばかりではない」

「そうだな。だから、面白い」

「別に面白がられたくない。そのパーティには他に誰が参加するんだ？」

「他、と言つと？」

「伽羅や、梅香、他の配下も出るのか？」

「ああ。伽羅のエスコートでもしたいのか？」

「俺は、別につ」

「だが残念だな。この子は俺の側近故エスコートは不要だ。お前の仲間の少女でもエスコートするとい。似合つドレスを用意させよう」

「どうして俺がシェリルをエスコートしなくちゃならないんだ？」

「男としての甲斐性だろ？」

何故か理由が全く判らない、と苛立ちを含んだまま首を振るフレドリックに白檀様は笑つた。

どうやら白檀様も彼らの関係に気付いてるらしく、その表情は心底愉快だと言わんばかりだ。

悪魔は他人の感情の機微に聰い。

それはどうすれば彼らが自分の手の内に落ちてくるかを常に考える本能から来ているもので、だからこそ少ししか顔を合わせていないと彼らの感情の矢印も見破つたのだろう。

正直に言えばそこに巻き込まれるのは御免だが、そもそも言つていられないらしい。

つぐづぐ面倒だとうざつしていると大きな掌が頭を撫で、一瞬で心は解れた。

「まあ、強制するようなものでもないな。この城からは俺の側近と、後は料理の上げ下げを行う侍女たち、後は伽羅が拾つた人間くらいか。下手に配置すると怯える者も居るのでな。我らは少数での参加だ」

「つ！」

白檀様の言葉に弾かれたように顔を上げる。

拾つた人間を眷族にしたのを伝え忘れていたのを思い出し、今更ながら慌てて報告すると知つていてあつさりと返された。

知られているのも知つていたが、それ以前に自分から報告すべきであつたのに、自分の行動の遅さが悔やまれてならない。

私が眷属を増やそうと口を出すようなお方ではないが、だからこそ私は自分から伝えたかったのに。

『申し訳ございません。』『報告遅れましたことお許しください』

『何、構わぬ。お前を護る盾は多ければ多いほど俺も安心だ。だが

お前が人間を眷属にするとは思つていなかつた。心境の変化か?』

『黒方が、私が心配だと。どうも未だに私達と人間の差を理解していないようです』

『黒方が。それなら納得だ。俺の可愛い養い子は弟分に甘いからな。あいつもお前の実力は十分知つているが、見た目が華奢だから心配でならぬのだろう。確かに、お前の戦い方は危うい部分があるからな』

『申し訳ございません』

『謝る必要はない。 役に立ちそつか?』

『多少は』

『なら、いい。そやつらがお前の役に立つよう、十分に叩き上げろ』

『はい』

遅いとは思つたが、今更でも報告すれば、少し笑い混じりの声で白檀様は許可を下さつた。

私は別に白檀様の眷属ではないので報告の義務はないが、それ以上の存在だ。

隠し事は基本的にしたくない。

私との会話を続けながらも、白檀様はフレドリックへ同時進行で説明を続けていた。

「対して人間は物々しいな。各国、と言つてもこの世界には10しかない國の王族と、それぞれが連れてくる護衛。國から選出される代表者は一人ないし二人だが、彼らに対し大体百人単位の護衛が付いて来る。流石に室内に伴うのは制限させるが、配置は別に好きにさせている。見られて困るものもないしな」

「好きにさせていいのか?俺たち人間が何をするかも判らぬのに?」

「ああ、構わぬな。どれだけの手練であろうとも、百人単位で掛かつてこよつとも、この子一人落とせぬだろ？」「みづよ

「言い切れるのか？」

「当然だ。俺たちは人の姿と酷似しているから勘違いされがちだが、そこらにうろつく魔物ですら俺たちには小指一つで十分だ。お前たちが大勢で迎え撃たねばならん魔物でも、俺たちにとつては雑魚でしかない」

「本当か？」

「ああ。勘違いしてくれるなよ、勇者殿。お前は確かに俺を殺す力を有する。しかしながらそれは伽羅たちには通用せん。あくまで、俺専用だ。俺一人殺したところで、他の面々相手に方に一つも勝ち目はない。その状況で挑むなど、それこそ世界を道連れにする想いがなければ無駄であろうよ」

昔を思い出すよう目を細めた白檀様は、今ではない過去を見ていた。私達にとつても僅かに古い記憶。確かにそんな愚かな男存在した。

世界も国も家族でもなく、自らの想いを胸に抱き、白檀様へと剣を向けた唯一の存在が。

無意識の内に手が伸びて左胸の上を指先で辿る。

普段は絶対に露出しないその場所に、永久に消えない傷痕がある。

魔王である白檀様に剣を向けた相手は初代勇者の『レイノルド・ラツチエ』の人だ。

白檀様を庇い、彼の剣を受けた瞬間、何とも言えない顔で微笑んだ。その男は、私が憎んだ『勇者』だった。

何だかんだで白檀様と勇者に混ざった会談は夕食の少し前まで続いた。

腹を鳴らしたフレドリックに白檀様が笑い、梅香に今後の予定を確かめたところ、『勇者のみこちらに寄越して欲しい』とのことだったのでそのまま告げると、不服そうな顔で彼は私を睨んだ。しかし『私が拾つた一人も交えての夕食を仲間が望んでいる』と告げれば、不承不承ながら了承はした。

迎えに来た梅香に伴われて勇者が姿を消すと、息を吐き出し体の力を抜く。

やはりどうしても無意識に入る体の力は刻み込まれた苦手意識の所為だらう。

力の抜けた私を片手で抱えなおした白檀様はそのまま椅子から立ち上がる。

いきなり高くなつた視界に瞬きを繰り返すと、悪戯が成功した子供のような顔で笑つた。

「夕食はあちらで摂るのだらう?」

あちら、とは勿論私が与えられている屋敷のことだらう。

先ほど梅香から伝心で言外に来るなと言われた時に、香との約束を確認されたからそのことを言つてはいるに違いない。

頷けば猫のように目を細めた白檀様は、私を片方の腕に座らせると顔の位置まで持ち上げた。

闇よりも尚濃い黒い瞳が私を覗き、ぞくり、と鼓動が脈打つ。

核は違うが悪魔にも心臓はある。

早くなる脈に頬が赤らみ、そわそわと落ち着かない気持ちになつた。そんな私を見透かすように笑みを深めると、空いた手で私の髪を梳く。

「俺もあちらで夕食を摂ろつ」

「白檀様も　ですか？」

「ああ。香のことだ。夕食の準備などすぐに整えるに違いない。そろそろお前の好物のスープを作る頃合だろつ」

「ああ、そうですね。そう言えば、口調が心持ち楽しそうでしたから、そうかもしれません。驚かせたい時はすぐに嬉しそうな声音になりますから」

「それに黒方の御菓子もあるだろつ。あれの作る料理は美味しいし、顔も見ておきたい。」ちらからしたら久しぶりだしな」

くしゃり、と身内にしか見せない笑顔を浮かべた白檀様に私も頷いた。

確かに時間の枠が違うとはいえ、こちらの世界で換算すれば黒方と顔を合わせたのは大体20年前だ。

あちらで言つても数年の期間で顔を合わせていないため、顔くらい見たいだろう。

何しろ黒方は白檀様が保護している立場にある。

『養い子』との言葉どおりに彼の子供は私だけだが、保護者として見れば黒方も同じような立場だ。

小さかつた黒方は身長が随分伸びたが、白檀様からしたらまだまだ子供だろつ。

彼を可愛がつてゐる白檀様を知つてゐるので、至急香に連絡を取る。

少しばかり焦っていたが『是』と返事が返ったので伝えると、ならばすぐに行こうと移動した。

「・・・！？白檀！」

唐突に畳の前に現れた私と白檀様に、畳の上で寝転がっていた黒方はがばりと上体を起こした。

湯のみと呼ばれるコップと、急須と呼ばれるポットを傍に置き、行儀悪くも寝転んだまま本を読んでいたらしい。

絵と文字が乱れる童話のような本と、文字ばかりの専門書。言語も何種類か分かれているそれを無造作に積んでいた黒方は、物によつては相当な希少価値があるそれらを片手で退けると私と白檀様の前に座布団と呼ぶクッションを置いた。

並べられたそれに足を乗せようとし、中途半端な位置で白檀様が止まる。

黒方が言っていた、『畳の上は靴で昇らない』を思い出したのだろう。

靴を履いて家の中を歩かないのは元の世界の東の国とよく似ているが、あそこの中はフローリングだった。

この畳に未だに慣れない白檀様の靴を力を使って消すと、礼の代わりに私の頭を撫でた彼はそのまま座布団へと足を置く。

「久しいな、黒方。元気だつたか？」

「ああ。・・・こんなに長くなるなんて、聞いてなかつた。前はもつと定期的に帰つて来たくせに」

「もう子供じやないと俺たちを送り出したのはお前だらう？」

「それでも、だ。一人とも全然帰つてこないから、こちらから来てしまった」

ふいつと顔を逸らした黒方は、どうやら拗ねているらしい。

私には態度を誤魔化したくせに白檀様の前では素直なものだ。

確かに、黒方が私達のところに来てからこれほど長期に渡り顔を合わせなかつたのは初めてなので、色々と不安が過ぎつたのだろう。彼一人でこちらの世界に来れるはずがないから、協力者がいるはずだ。

該当するのは白檀様に仕える執事と、私達と面識がある白檀様の兄貴分。

執事の方は手を貸すと思えないでの、きっと後者の彼が面白半分で力を貸したのだろう。

それであれば白檀様が黒方の存在を知っていた理由も納得できる。予め知つていれば不干涉のこの屋敷内部にいても黒方の存在を認知していたのは不思議じゃない。

身長ばかりが大きくなつた黒方は、分厚いレンズの下で瞳を輝かせているだろう。

彼は実の父親に対するように白檀様を慕つている。

そして白檀様も名前を呼び捨てにするほどには黒方を可愛がつていた。

久しぶりの顔合わせに私の心も少しづつ解れる。

ノック4つが室内に響き、返事をするとお茶の用意をした香も現れた。

ゆつたりとした空間に、胸の奥深くにある心の中心が揺れた気がした。

夜の帳に包まれた空間。私のために白檀様が用意してくれたこの箱庭は、すこぶるよく出来ている。

昼には太陽の光が射し、夜には月光に照らされる。

四季もあれば天氣の変動もある。

屋敷の屋根に腰掛け風に流れる雲を見詰める。

雲は空氣中に固まつて飛ぶ水滴、あるいは氷粒が固まり出来たものだと嘗ての家庭教師に教えてもらつた。

しかしそれは空にある雲だけで、もつと上には別の形の雲と呼ばれる存在もあるらしい。

私は見たことがないが、星で出来た雲もあると家庭教師は教えてくれた。

いつか私に見せたいと笑つた彼は、あちらの世界で元氣にしているのだろう。

「お姉さま」
「・・・香」

懐かしい相手を思い出していると、不意に後ろから声を掛けられる。

気配に気付いていたので驚きはない。

瞼を閉じたまま、それでも危うげない状態で屋根を歩いた彼女は、私の隣へと腰掛けた。

「下に行かなくて宜しいんですか？」

「ええ。黒方も白檀様と話したいでしょ？」

「でもお姉さまが遠慮される必要はありません」

「遠慮なんてしないわ。ただ、白檀様も黒方との時間が望んでいらっしゃった。私だけでよければあちらの屋敷で食事を召されたと思うもの。だから、少しだけ二人の時間を差し上げたいの」

「・・・お姉さまが宜しければ、あたしもいいですけど」

唇を尖らせた香は、拗ねたように俯く。

その心遣いは素直に嬉しく、柔らかな髪に手を通した。

今は小悪魔でいるため彼女の方が少し高い位置にある。

耳元を撫るように手を動かせば、猫のように掌に顔を押し付けてきた。

目を細め構つてみると、階下からぐるぐると喉を鳴らした声が聞こえる。

それに素早く反応したのは香で、嫌そうに眉間に皺を寄せて舌打しだた。

「あの獣、いつまで」ひらひらに置いておくのですか？」

「怪我が癒えるまでよ。勇者は彼が田に見えない場所にある方が安心できるみたいだから」

「・・・状況は何も変わらないのに？」

「田に映らないものはないのと同じ、ところ」というね

声に引かれ視線を下げると、そこにはこちらを見上げる獣がいる。朝より随分と楽になつたようで、庭に染み出る血は止まっていた。それでも貫かれた腹と足の傷はまだ癒えておらず、立ち上がるのには無理なようだった。

必死に首だけ上げ、その視線を私へと固定している。

「早く癒せばいいのに。予めお姉さまから血を摂取していたのでしょう?」

「そうね。別に予定していたわけじゃないけれど偶然に」

「ならば活性化しているはずなのに、何故あそこまで治りが遅いのですか?」

「彼は半端者だもの。元は人間。魔物に墮ちたものの、その能力は完璧ではない。歪みがどこにあるのだとと思うわ」

本来、眷属の傷を癒すには主の血肉や体液が一番適している。

眷属の血肉で主は回復しなくとも、主の血肉を分け与えれば、それが眷属にとって何よりの薬となり、体の活性化を促す。

しかしながらアースは無理やりの形で自身で魔物へと成り下がった挙句、その力も未だに安定していない。

私が滅多にそれらを与えないのも原因の一つだろうが、何より魂が歪んでいるのが最大の原因だろう。

魔物の体に人間の魂。本来ならありえない強制的な環境だ。

「あたし、あの獣嫌いです」

「どうして?」

「お姉さまに傷を与えたから。眷属でありながら身の程知らずに主に牙を剥く駄犬です」

「そうね。それでもあれは事故でしょう」

「事故? 主に怪我を負わせたのですか?」

「ええ。アースが怒るのを知っていて油断した私も悪いわ。あの場所は彼が私のために作った場所。眷属が主を慕うのは当然。それな

ら眷属の想いを理解するのは主の義務。怠つた私が罰を受けるのは当然でしょう」

「それでも・・・それでも、お姉さまに傷を負わせたなど赦せません」

瞼を閉じたまま必死に私を見つめる香は、一心に私に訴えた。

その気持ちは理解できる。

彼女も私の眷属の一人。

『眷属』は『主』を愛するものだ。

傷つけられるなど赦せるはずもない。

怒り狂いながらも手を出さないのは、偏に私が許可しないからだろう。

許可した瞬間にアースは香の力で欠片も残さず粉碎される。

魂すら握り潰し、世界に一片も存在の証を残さない状態まで躰り尽くす。

う。

「赦す必要はないわ」

「お姉さま」

「けれど処断はさせないわ。私の眷属への処断は私にのみ赦される権利よ」

喉を震わせ声を上げるアースを見下ろし諭すように呟く。

アースの傷は相当な深手だ。

私は手加減はしなかつた。

生き残る確信はあるが、もしかしたら体のどこかに欠陥が残るかもしない。

「お姉さま」

「何?」

「あれは、元は人間だったのですよね?」

「ええ、そうよ」

「・・・人間の気持ちは移ろい易いものだと私は聞きました。それなのに彼は魔物として生きています。存在する子孫へは欠片も興味を抱かず、お姉さまだけをその瞳に映し、死に掛けてもまだ意識を引こうと媚びています」

「そうね」

「私には人間が理解できません。代わりがあればそれで満足するのではないですか?想いはすり替わるのではないですか?忘れていくものではなかつたのですか?天使と悪魔の中間が人間の特色であるなら、何故彼は獣へと墮ちたのでしょうか?」

「・・・どうしてなのかしらね」

淡々と問うてきた香に、私は答えを持つていなかつた。

長く見てきたが人間は理解できない。

理解しようとしていないからかもしれないが、理解しようとしても理解できないのだろう。

相容れない存在、それは私達だ。

例えば今日の前でアースが死んだとしても私の感情はぶれない。しかし、彼とほとんど関わりのない勇者一行は酷く動搖するのだろう。

自身と関係がない存在が死ぬ。

それだけで怯むのが人間だ。

そして。

「時として天使よりも博愛主義で、時として悪魔同様一途になる。それが人間なのでしょうね」

我を通すために形振り構わず振舞われた結果が現状にあると、少な
くとも知っていた。

静かに輝く月は美しい。

『悪魔は、どんな生き物なのかな?』

不意に響いた声に身を震わせ辺りを見渡す。

驚いたように香が私を伺い、それが空耳だと知った。

忘れない面影がある。

魂を削られた痛みがある。

何を失くしても惜しくない恨みがある。

月明かりのように静かな微笑みを浮かべた『彼』を、私は絶対に赦
しはしない。

「・・・どうして私が貴方の食事の席に同席しなければならないの」「それは俺があんたに居て欲しいからだな」

「貴方にはお仲間が居るでしょう?彼らに同席してもらえばいいじゃない。特にあのお嬢さんなら快く付き合ってくれるはずよ」

「あいつらなら、ハーグ様とアーク様に案内されて屋敷のどつかに行つた。俺は一人だけ寝過ごしたんだ」

「寝過ごす?貴方、起こしてもらえなかつたの?」

「ああ。朝食もないしどうしたもんかと思つてたら、あんたがタイミングよく部屋をノックしたつてわけだ」

話しながら結構な勢いで食事を摂る勇者に呆れる。

私はちなみに白檀様たちどーー一緒に食事は終わっているので見ているだけなのだが、こちらが気持ち悪くなるくらいの食欲だつた。

そう言えば他の『勇者』の面々も食欲は旺盛だつたのを思い出す。涼やかな顔で何処に消えるのか問い合わせたいくらい食べていたので、これも血統なのかもしれない。

呆れを含んだ眼差しで見物していると、不意に視線が絡む。蒼い瞳は勇者しか持たないのだが、この世界以外の勇者も同じような色合いなのだろうか。

別の世界の『魔王』をしている知人に帰つたら聞いてみようと考えながら、薰り高いお茶を口に含む。

香が向こうから持ってきたブレンドだが、私好みの味をしているそれは今日も美味しい。

「あんたって、そうしてると本当に綺麗だな」

「・・・そう」

「動じないのか？」

「言われ慣れてるわ」

「はあ、凄いな。その年で言われ慣れているのか」

「私は見た目どおりの年齢じゃないわ」

「だが見た目は子供だ」

「・・・子供の姿を装っているだけよ」

そつ。

ずっと子供でいられるなら、これほど楽なことはなかつただひつ。白檀様が転化した私の姿に動搖することもなかつたし、私も分に合わぬ力を求めなかつた。

この姿が仮初でしかないのを誰より理解していながら、それでも執着する自分を愚かだと思つ。

他に手段はなかつた。後悔していないし何度も選択を迫られれば同じ道を選ぶ。

けれど幾度も愚かだと思つのだろう。

「梅香と伽羅は幼馴染だよな？ならどうして伽羅だけ子供のままなんだ？魔族は子供の姿と大人の姿を好きに変えられるのか？性別も好きに出来るのか？」

「そんなわけがないでしょ。転化すれば成体に変わるし、そこから子供に戻るなど聞いたこともないわ。性別も変えられないわ。見た目を誤魔化す程度なら出来ても、根本を捻じ曲げる事にないもの」

「ならどうして伽羅は子供の姿なんだ？」

いつの間にか食事の手を休めたフレドリックは、不思議そうに私を見詰めた。

好奇心の宿る瞳は鬱陶しいまでに輝いている。

彼は私が子供の姿のままでいる理由を聞きたいのだろうか。それともどのようにして子供の姿を維持しているかを知りたいのだろうか。

つい先ほど答えたに近い言葉を発したのだが、あれだけでは彼には通じないのだろう。

「 それが貴方の役割と何か関係あるのかしら?」

「 ないな。単なる好奇心だ。俺はあんたを知りたい。『伽羅』を知りたいんだ」

彼は見ているのは私なのだろうか。

それとも勇者の『手記』に登場した『伽羅』という魔王側近を知りたいのだろうか。

ため息を吐き出し、軽く頭を振る。

違う。彼が知りたがっているのは私ではない。

「 貴方が知りたいのは『勇者』のことでしょう」

「 伽羅」

「 私の口から『手記』に書かれた情報を擡え、『彼』に近づきたがっている。違うかしら?」

「 ……」

言えばフレドリックは口籠り俯いた。

惑うように視線を彷徨わせる態度に、それも正確ではないかと氣付く。

彼は『勇者』を理解したかった。

そのために私に近づき『彼』が過去を記した情報を元に行動を擬えた。

今までの勇者ではありえない行動だが、歪なフレドリックの行動としてなら理解できる。

欠けた何かを埋める為、無意識に何かを求めて動いている。

根本は憧れかと思ったがどうやら違うらしい。

彼の瞳に浮かぶのは焦燥。憧れなんて生易しいものではなく、飢え渴き何かを求め焦っている。

しかし何を求めているか判らないから惑い、そして私へたどり着く。勇者の手記に何と書かれていたか知らないし、知りたいとも思えないが、反応から察するに細かく色々と書いてあつたのかもしねりない。

「伽羅は」

「何?」

「伽羅は口説かれ慣れてるな。誉めても近寄っても全然動搖しない」

「当然ね。貴方程度の語彙ならば日常茶飯事にもならないわ」

「そうか」

唐突に話を摩り替えたフレドリックは、困ったように眉を下げて笑つた。

「だから伽羅は鈍いんだな。慣れ過ぎていて流すのが上手い
「・・・貴方は私と違う意味で鈍そうね。全く慣れていないのか、
周りを見てもいないわ」

「手厳しいな、伽羅は」

苦笑するとフレドリックは食事を再開させた。

「俺は食事が終わったら行きたい場所があるんだが
「私たちの個人的な領域以外なら考えるわ」
「・・・本当に、伽羅は手厳しいな」

聞こえよがしのため息を無視するのも、私は全く慣れていた。

フレドリックが連れて行つて欲しいと頼んできたのは、屋敷の中に
ある一室だった。

僅かに迷つたが断る理由もなく結局承諾し一人並んで廊下を歩く。
窓の外から覗く空は相変わらずの暗雲で、雷が轟いていないので白
檀様は仕事中だろう。

気配が幾つか庭にある。

覚えのあるものなので、どうやら勇者一行は懲りもせずにまた庭を
散策中らしい。

あの庭に見るほどのは特になかったと思うが、ハークとアーク
の気配しか感じられず梅香は居ないようなので、何か話でもしてい
るのかもしれない。

昨日と同じように監視しようか僅かに迷うが、どうせ大した情報も
得られぬかと止めた。

彼らの相手は梅香の役目。交代したならあまりでしゃばると梅香の
不興を買つだろ？

「伽羅？ 聞いているのか？」

「いいえ」

「・・・あつやうと言つんだな。少しは悪びれたらどうなんだ」

「悪びれる？ 悪いと思つてないのに？」

「きつい女」

「やう」

眉根を寄せて聞こえよがしにため息を吐いたフレドリックは、私に
向かい手を伸ばす。

髪に触れそつだつた手を避け距離を開けると、じとじと眉根を寄せた。

「何で避けるんだ？」

「触られたくないからよ」

「魔王には赦していたじゃないか。梅香や、もう一人にも」

「貴方は私の同胞か何かになつたつもり？魔王様と同列に扱えと？」

「いや、別にそつは言つてないが。・・・いいじゃないか、少し触れるくらいは」

「貴方は親しくもない相手に髪を触れさせるの？無言で伸びてきた手を拒絶しないと？だとしたら随分と寛容なのね」

「伽羅は狭量だな」

「そうね」

むつと唇を尖らせたフレデリックの子供っぽい発言を流すと、益々不機嫌そうに渋い顔になつた。

蒼い瞳に険が宿り苛立ちを混めてこちらを見ている。

しかし私の言葉に反論できる要素を見つければ、それ故に黙り込んでいるのだろう。

下らない、と右の高い位置で結い上げてこる髪に触れる。

今日は白檀様がてづから髪を結つて下さつた。

元々人間に触れられるなど我慢ならないが、それ以上の意味でこの髪型を崩されたくない。

僅かに残された髪が頬を擦る。

癖の強い私の髪は櫛通りはいいのだが自然とぐるぐると巻いてしまう。

金色の波みたないと誓めていたばかりのこの髪に、勇者が触

れるなど赦せない。

「綺麗だつて思つただけだ」

「・・・何が」

「髪。金の奔流。光を紡いだみみたいな色だ」

不貞腐れ、視線を逸らしたままフレドリックが告げる。

『伽羅は綺麗だね。髪は月光・・・よりも色が強いから、太陽の光を紡いだ色かな』

フレドリックの声に、忘れ難い声が重なる。

『瞳は縁がかつた青?うん・・・ずっと昔に見た、南の国の海の色だ』

臓腑の底から苛立ちを掻き立てる、忘れたくとも忘れぬ声。ぎりりと歯を咬むと、今は無い面影を見つけた気がして自然と力の制御が緩む。

「伽羅!...どうした?」

「つ・・・・・・どうもしてないわ」

フレドリックの声に正気に返ると、慌てて漏れた力を押し込める。気が付けば窓にひびが入り今にも割れそうに撓んでいた。

私は再生は出来ないので、菊花に伝心を繋ぎ修復を頼んでおく。深呼吸を繰り返し漸く昂ぶる精神を治めたが、やはりこの世界は私には合わないらしい。

慌てた様子でこちらを伺う蒼い瞳に何でもないと首を降ると謝しげな表情ながら彼は引く。

そう。大した理由などないのだ。

何故自分がここまで乱れるか、平時と同じように冷静でいられないか、その理由と原因はわかっている。

私は欠けた存在だ。

悪魔として存在するための『核』が損なわれている。

そしてその損なわれた『核』がこの地にあるから、私の心は安定しない。

『浮ついている』との梅香の言葉は、比喩でも何でもなく私の正確な状態を指していた。

欠けた状態のままフレドリックの傍に居るから、より不安定になるのだろう。

時間が経つになれ徐々に酷くなっている症状は嫌でも自覚を促す。

「伽羅」

先ほどまでの怒りはなりを隠し、心配そうな表情でこちらを覗き込むフレドリックから距離を取る。傷ついたように情けなく眉を下げる『勇者』に、気をつけなければ

力をぶつけてしまいそうだった。

「・・・目的地はもうすぐよ」

「伽羅」

「貴方はそこに行つて何を見たいの?」

「心配も、させてくれないのか」

自嘲して俯いたフレドリックは、首を振ると氣を取り直すように笑つた。

その笑顔はいかにも作ったものだとわかる表情だったがあえて何も言ない。

ビクビクもない嫌悪感を宥めるだけで精一杯だ。

「今までの勇者が案内された部屋は、今俺が居る部屋じゃない」

「そうね」

「だから、そこからの景色を見てみたかった。記された場所は最上階にある一室。この城の何処よりも高い場所に譲えた部屋だな?」

「ええ」

その一室を譲えたのは白檀様で、数百年の時を跨いでその部屋を白室へと変えたのは『勇者』だ。

フレドリックとは違い、正しく『勇者』と表現する相手だった。

「俺はその部屋で見たいものがあるんだ」

「その部屋で?」

見たいもの、と言われ首を傾げる。

何かあつただろうかと思案するが、あの部屋に見るものはなかつた
ような気がした。

勇者が居る数日の間に1、2度足を踏み入れる程度なので記憶にないだけなのかもしれないが、それ以前に興味を持つていないので覚えていないのかもしない。

基本的にあの部屋に足を踏み入れるのは勇者だけだったし、私達は興味も関心も持つていなかつた。

否、現在進行で興味はない。

「俺は見つけなきゃいけない」

「何を？」

思わず口を突いて出た疑問は、曖昧な笑顔で誤魔化された。

自分に違和感を感じているフレドリック。

もしかしたら、あの部屋に欠片を見つける手がかりでも置いているのだろうか。

欠缺た何かを見つければ、彼は勇者として満たされるのだろうか。

蒼い瞳を見詰め返し、視線を廊下の先へ移す。

どちらにせよ、答えはこの先にしかないのだろう。

久しぶりに足を踏み入れた部屋は、覚えている頃と変わっていないようだつた。

流石に百年単位で間を置いているため詳細までははつきりと記憶していないが、雰囲気は何も変わらない。

部屋に明かりをつけて見渡せば、十二分の広さを持つ室内の全域が露になつた。

備え付けの本棚に飾つてある絵画。

白檀様のよりは一回り小さいベッドがあり、備え付けのサイドボードの上には一輪挿しが乗つっている。

本棚の隣には執務机があり、その横のベッドとの間にベランダへ抜ける窓がある。

埃一つない部屋は白檀様の力で時を歪めているからだ。

床に敷かれた毛足の長い絨毯と、夜になれば月光すら透かす薄い色のカーテン。

白檀様の城の一室でありながら、『勇者』が持ち込んだ私物で埋まつた部屋はどこか違和感を感じた。

「これが・・・勇者の部屋」

入り口付近で足を止めていたフレデリックが、引き寄せられたかのように室内へと踏み入る。

きょろきょろと辺りを見渡し、まるで記憶と重ねるよつとつぶつぶつと何事か口ずさみながら一つ一つを確認していく。

ドアにもたれてそれを眺めていると、不意にフレドリックが顔を上げる。

真っ直ぐな瞳でこちらを見ると、操られたように緩慢な動きで手招いた。

首を傾げるが訝しげにしている私の様子も気付かぬように彼は同じ動作を繰り返す。

違和感を感じながらもとりあえず従つと、近くまで来た私にフレドリックは満足気に頷いた。

「伽羅

「・・・え？」

呼び声に混じつた『何か』に首を傾げる。

感覚に触れたのは微小なものが、波紋を広げるように変だと直感が訴えた。

しかし何が変かは見分けられず瞳を眇める。

警戒する私に微笑みかけた彼は、本棚の奥を指差した。

「ここにある、伽羅

「フレドリック？」

「ここを開けて欲しい。今の俺では開けれない

淡く苦笑したフレドリックは本棚を指差すと中心にある畳め金の掛けられた箱を指差した。

見覚えがあるようないようないようないそれに近寄ると、覚えのある力の波動が伝わってきた。

随分と弱くなっているが、間違えるはずがない。
この力は、私のもの。

顔を上げて傍にいるフレドリックを見詰めると、期待を込めた眼差しを向けていた。

まるで子供のような無邪氣な笑顔に益々違和感が深まるが、何が違うと断言出来ずに押し黙る。

「開けてくれないか、伽羅」

「これが貴方が求めていたもの？」

「そうだ。・・・いいや、違うな。そうであり、違う」

自分で理解していないのか、否定と肯定を繰り返すフレドリックにどうしたものかと思案した。

これを開けるのは容易い。

鍵があるがこれの施錠は目で見える鍵ではなく、力で施してある。人間にしては強い力なので、場所も考えると『勇者』自らが封を施したものなのだろう。

この箱自体もどこかで見たような気がするが、はつきりと思い出せない。

私の力を感じるのだから私に関連した何かが入っている可能性が高いが、私に関連する何かを勇者に渡した記憶もない。黙っていると、もじかしげにフレドリックがまた声を掛けってきた。

「伽羅、開けれないのか？」

「・・・開けれないわけじゃないわ」

「なら、早く開けて欲しい」

「その前に一つ確認するわ。これは魔王様に害為すものではないのね？」

「ああ」

「万が一害を為すものであつた場合、私は貴方を攻撃するわ。それでも敢えて受けけると誓えるかしら？」

「・・・言質を取るつもりか？」

「ええ。私から一方的に貴方を攻撃することは赦されないけれど、貴方が誓いを破つたのなら別よ。意味のない攻撃に言質があれば防衛は赦される。この世界の規律の一つね。誓えるのかしら？」

淡々と問えば、きつと柳眉を逆立てたフレドリックは私に掴みかからんとばかりに顔を寄せ、歯軋りしながら頷いた。

酷く立腹しているようだが、言質を取れたなら私も心置きなく箱の封印を解除できる。

箱から感じる力程度であれば、万が一白檀様に向かつても先に私が打ち消せるし、それを理由に勇者への攻撃も認められる。

理由なき力の放出に対する報復だ。殺せなくとも傷は負わせられる。それであるなら条件としては我慢できるので、私は箱に掌を翳した。私の力を僅かに流し、箱を戒めていた封を握り潰す。

ぱきん、と甲高い音を立てて封は弾け、それをそのままフレドリックへ渡した。

頬を赤く染め興奮したように瞳を輝かせた彼は、恭しい手つきで掌ほどの箱を受け取る。

両手で持ち、徐に蓋へと手を伸ばした。

「・・・これが」

感動を堪えるように震えた声を出したフレドリックは、箱の中身へ釘付けになる。

視線より随分上にある上に、ちょうど蓋が邪魔をして私には中身が見えなかつた。

しかし箱を開けたそこから感じる力は微弱で、警戒するにも当たらぬ物体だと推測はつぐ。

確認させると訴えるべきか、それとも後に勝手に確認するか。

どうしようかと考えていると、私の前にフレドリックは跪いた。

「伽羅

「何?」

「これを、覚えているか?」

私の視線の下に移動した箱の中身を、よく見えるように傾ける。そうして目にしたものに、私は僅かに驚いた。

私の力を纏つた『何か』。

それは在りし日に私自身が作り上げた、薔薇の形をした力の結晶だつた。

一見するとクリスタルによく似た物質で出来てゐる薔薇。

今よりも尚未熟だつた力の名残を感じさせるそれは、完全な黒一色ではなく所々赤い線が入つた中途半端な物質だつた。

黒は魔族の力の象徴。つまり、純然なる魔力で出来てゐる証明だ。これが天使族の作ったものなら白。つまり同じ『力』と称されても天力てんりきと呼ばれるものの結晶になる。

赤い線は私の中で一番強い火が押し出でてしまつてゐる所為だ。

力の制御が仕切れない未熟者が力を結晶化させると単色の結晶化が行えない。

だが今の私は当然単色の結晶化は片手間で出来る作業だ。

それがここまで美しくない出来であるのなら、単純に数百年は昔の作品だということだらう。

黙り込んだ私にさりに見せ付けるように薔薇に触れようとしたフレドリックを制する。

確かに人から見れば美しいものだらうが、これは人の身には過ぎた力を持つてゐる。

幾ら未熟であつたとしても、私は昔から魔族だ。

その私が作った純粋な力の集まりに触れたら、勇者であらうと今の状態のフレドリックはただではすまない。

彼が触れる前に薔薇を自分の掌に移動させ、まじまじとその作りを覗き込む。

確かに私の力の結晶なので過去に私が作ったもののはずだ。

しかし在りし日に作成されたそれを何処で見たか正確に思い出せない。

大した記憶ではないからだらうけれど、少しだけ頭に引っ掛けた。

「覚えているか、伽羅

「・・・いいえ」

「そうか。 そうだろうな。君にはその程度のものだらつ

続く言葉に、私は薔薇から顔を上げた。

おかしい。何がおかしいのか気付けない。

こちらを見るフレドリックの瞳は疑問符を浮かべていて、何も変わつてない。

気のせいだと、違和感を振り払つために緩く頭を振る。

「貴方はこれを知つてゐるの？」

「俺か？ああ、勿論知つてゐる。これは先代の『手記』に書かれて

いた。必ず見つけて、あんたに見せるようになると

「・・・私に、これを？」

何の意味があるか全く判らない。

先代の勇者の滞在期間は四日だった。

その間にこの薔薇を見せられた覚えはないし、話題にすら上つていなはづだ。

この物体は私にとっては単なる未熟な力の証。不恰好で歪な物体以外の何ものでもない。

小さく鼻を鳴らし、再び手に取ろうとしたフレドリックの手を避ける。

不服そうに眉を寄せた彼に、仕方なく説明してやることにした。

「やめておきなさい」

「何でだ？」

「触れた瞬間、力の強さに押し負けて内部から破裂するわよ
破裂！？」

「ええ。・・・貴方、魔力の能力値はそれほど高くないわね

「ああ、俺は魔法はからつきしだ」

「でしょうね。在りし日の力の片鱗も感じない。だから止めておき
なさい。貴方では弾け飛ぶだけだわ」

「だが、俺は」

「・・・仕方ないわね」

それでも両手を伸ばすフレドリックに、ため息を一つ吐くと視線に
僅かに力を籠める。

「なつ！？」

息を詰めたフレドリックの前で掌から宙に放った薔薇に力を向ける。
漸く形を維持していただけの物体は、ほんの僅かな力で甲高い音を
立てて碎け散つた。

舞い散る欠片すら残さず全てを消し去る。

残留しそうになる力も微量なものに変化させ塵となす。

目の前で壊された薔薇に口を開けて眺めていたフレドリックは、蒼
い瞳に怒りを宿して鬼気迫る表情でじり寄つた。

私がこの姿でなければ胸倉を掴まれて持ち上げられていたかもしれ

ない。

それくらいの迫力を有し、鋭い怒りをぶつけて来る。

彼は怒りの奔流を納め切れないとばかりに、掠れた声を発した。

「何故

「・・・」

「何故、破壊した！これは、この薔薇は、俺にとつて特別な特別なものだつたんだ！」

「私に見せたことで役目は終えた物体でしょう。どちらにせよ『人間』が扱うには過ぎたものよ。それに厳重な封を施さなければ維持も出来ぬほどに弱体化していたわ。付け加えるなら移動できたとしても、封を施した状態のあれを人間では解除できないわ。少なくとも、今現存する人間では、ね」

「それでも、俺は、俺は！！」

「何故、と貴方は聞いたわね。明確な理由を教えてあげるわ。貴方、あれが存在する限り絶対に触れようとするでしょう。それだと困るのよ。貴方の力ではあれは扱えない。それなのにあれがある限り諦めない。・・・万が一、私の力が元で貴方に傷をつけたなら、それが一方的なものであれば責任を取るのは誰だと思う？」「・・・それは

その時責任を取るのは、フレドリックでなければ私でもない。

『魔王』である白檀様だ。

『魔王側近』の地位にある私の力で、白檀様に手を出されていない状態で彼を傷つければ、天使に付け込む隙を与える。それは赦される所業ではない。

目の前にあつたあの薔薇は、害をなしても特にはならない。

例えフレドリックが気にしていたとしても、私の所為で白檀様に火の粉が降りかかるのは防がねばならない。

ただでさえ自分を抑えるので精一杯の状態が続いている。

失態を重ねれば、梅香により白檀様の傍から排除されるはずだ。

それだけは我慢ならない。

きっと目の前の彼は私に都合よく勘違いしてくれている。

責任を取るのは白檀様でなく『私』だと思つてゐるだらう。それ故に強く出れないのなら、彼の感情を利用させてもらひつつに躊躇が生まれるはずがない。

「勇者の安全が私にとつての優先事項よ。貴方も見たでしょう？私は貴方のためになら自分の眷属を手に掛けるのも躊躇しないわ」

「伽羅」

「（）に滞在する限り、私は貴方を傷つけるものを排除するわ」

「・・・伽羅」

「理解しろとは言わないわ。それでも納得しなさい」

つい昨日口にしたばかりのものと同じ言葉を発する。

そう。彼に理解など出来るはずがない。

そもそも根本を理解していないのだから。

私は悪魔で彼は人間。

歩み寄れる距離なく、歩み寄りたくもない相手。

切なげに瞳を揺らし拳を握るフレドリックの感情など私には意味がない。

私の世界は白檀様で作られている。

あの日、誰からも蔑まれ疎まれた私を拾ってくれた彼こそが唯一で絶対。

だから私は決めたのだ。

彼の傍に居ると心に誓つたその瞬間に、何よりも強い覚悟をしたのだ。

彼のために死ぬのではなく、生きる覚悟を決めたのだ。

どこかで砕けた力の余波に、梅香は顔を上げる。隨分と微弱で未熟な力のようだが、よく覚えがある身近な相手のものなので間違えない。

「伽羅の力の残滓か」

「そのようです」

白檀の後ろに控えたまま首肯する。

彼にとつても養女むすめの力を違えるはずがない。

「力の結晶を砕いたようだな。 それにしても隨分と微弱なものだ。あれは、今のものではなく昔の伽羅の力を使ったものだろ?」

「そうですね。今の伽羅であれば、もつとましなものを作ります」

「砕いた、となれば動きがあつたと判断して構わないな」

「はい」

曖昧な言葉の羅列になるが、それは伽羅の動きを確認していないからだ。

その判断は白檀が下し、梅香も『是』とそれに倣った。

理由は単純で目的を達成するために下手な介入はしない方がいいと判断したからだ。

白檀が、そして梅香が求めるものは、下手に伽羅に動かれるより自然体のままで勇者と接近してもらう必要があった。

腰掛けっていた椅子から白檀^{しらだん}が立ち上がり、慌てて一步下がる。

生まれた瞬間から主と定められていた彼は、梅香にとつて絶対の存在だ。

魂を飞^とくして全てを捧げると誓っている。

それは自分の願いであり、同時に梅香が愛する相手の望みだからだ。執務室にある窓に近寄ると、戯れに雷を落としながら白檀^{しらだん}が笑つた。笑顔はとても鮮やかで穏やかな、まるで伽羅を前にした時と同じようなものだった。

優しげに見える表情の薄皮一枚下にあるのは、^{とべう}時を巻いた深く昏い闇。

狂氣と狂喜の合間で揺れる感情を敏感に悟り梅香も微笑む。

「予定より、時間が掛かったな」

「ええ。ですが、もうすぐです。僕たちが欲したものはもうすぐ手に入ります」

「傷一つ与えてはいけない。欠片も損なわれてはいけない」

「御意に」

「ああ・・・本当に長かった」

吐息に近い囁きを漏らした主につられ、雷鳴轟く暗雲を眺める。暗闇の中から枝分かれして煌く光は幼馴染の髪の色を髪^くとさせ、自然と口の端が持ち上がる。

失われてから自分たちの時でも軽く数百年が経つた。欠けたままの存在は全てを満たさぬ飢えにもがきながら、一切を感じさせぬ美しさを保ち続ける。

万全の形のものが欲しい。欠損なく傷も残さず、美しいまま手に入れたい。

それは、白檀だけでなく梅香の想いでもある。

「綺麗に壊せると思うか」

「当然です。白檀様の直々の指示により動きました。失敗などあり得ません」

「そうか」

頷いた白檀はもうこちらに興味は失つたとばかりに、幾つもの雷を同時に動かした。

児戯に等しいそれを、幼馴染もどこからか見ているだらう。知られていないとつてるらしいが、伽羅が雷を好きなのは梅香も知つてている。

伊達に何百年も傍にいたわけじゃないのだ。

稻光を上げて勢いをつけた稻妻が闇を裂いて大木へと降り注ぐ。火の手が上がるのではなく消し炭とかした威力に、主の機嫌の良さを感じて梅香は瞼を閉じた。

決行の時は、もう、すぐ目の前に。

昼食は仲間と摂ると背を向けたフレデリックを部屋まで案内すると、開いた扉から室内を見る。

双子の眷属が目に入り彼らが領いたのを確認してから部屋を辞した。

昼食はどうしようと思索しながら適当に歩いていると、不意に伝心が入る。

『やあ、伽羅。勇者君の相手ご苦勞様』

『何故かしら。貴方に言わると口先だけのねぎらいにしか感じないのは』

『それは君が捻くれているからだわ。僕に一心はないからね』

『よく言つものね。用件は?』

『昼食を一緒に摂りたいかと思つてね』

『白檀様は?』

『白檀様はもう昼食は摂られたよ。僕は君を待つていたんだけど、

駄目かな?』

『・・・・・』

どうせ拒否権はないのに、態々伺う形を取つた梅香に、聞こえるようになため息を吐く。

すると鮮やかな笑い声が伝わり、瞬間で景色が変わった。

ワインレッドの絨毯に黒の革張りのソファ。さらに応接用の机と、部屋の隅に本棚が一つ。

壁には絵画が一枚だけ飾つており、その絵に眉間に皺が寄る。

いつか勇者が持つてきた絵画を部屋に飾るなんて悪趣味な行為を平然とやつてのけるこの部屋は、目の前の幼馴染がこの城で私室としている部屋だった。

「強制転移？フリーミニストを気取る貴方らしくない荒業ね」

「白檀様は屋敷内の移動手段に転移は多用するなと仰つたわ」

「」の程度で嫌味を言われるような方ではないさ。僕より君の方が知つてゐると思つたけれど

「無論よ。ただ注意されなくとも気にしようと促しただけ」

促されるままにソファに腰掛ける。

応接用の机は食事を摂るためのものではないが、十分な広さがある
ので気にはならない。

相手が梅香なら余計に気にする必要はないだろう。

無言のまま眼差しだけで訴えると、ひょいと優雅に肩を竦めた。

「君は食事の場など気にしないだろ？ 学生時代だつてどんな場所でも一番漢らしく堂々としていたし。上位の魔物が住む森に放り込まれたつて、男子生徒が怯んだ死体の前でも平然と肉を焼いて喰らつっていたじゃないか」

「貴方だつて人のことを言えないでしょ。隣でそれを見た生徒が吐瀉しても平然と私の焼いた肉を奪つて食べていたじゃない」

「そう。僕たちは同じ境遇を過ごしてきた仲だから、今更取り繕う必要もない。互いの嫌な面もとことん知り尽くしているしね」

「それもやつね」

一つため息を吐き回意すると、梅香は笑みを深めた。
何年経つても胡散臭い笑顔だと心の中で思いながら改めて料理に視線をやり目を丸くする。

そこに置いてあつたのは『オムライス』と呼ばれる私の好物の一つだつた。

「これ、どうしたの？」

「さつき黒方に会いに行つたら丁度いいからと渡されたんだ。君の昼食用らしい。確か、君の好物だつただろう?」

「ええ。黒方しか作れないからこひらに来てからば『』無沙汰だつたのだけれど」

ほかほかと湯気を立てる卵の黄色い表面には、赤いソースで文字が書かれている。

字体は見覚えがあるので、多分香だろつ。

『お姉さま、愛してます』と中々の長文を器用に一段に分けて書いてある。

好奇心を刺激されて梅香のも見れば、そちらには普通にソースが掛けたあるだけだつた。

「何、僕のにも何か書いてあると思つたのかい?」

「別に」

「素直じゃないな。表情は嬉しそうにしているのこ

「・・・・・」

「気付いてないかもしないけど、ちょっと機嫌よさげに笑ってる」

突っ込まれてすつと表情を引き締める。

腐れ縁と称されるものだが、伊達に長い付き合いをしていない。

他人から判らぬ変化であつても長年の経験の差か、梅香は割りと私の表情を読むのが上手い。

必要がなれば基本的に表情を作らぬため感情が判りにくいくと言われる私だが、素のままの私を見続けているだけに梅香は感情を読み取るのが得意だった。

もつともそれはお互い様で、どれほど上手に機嫌を誤魔化そうとしても私には梅香の機嫌が読み取れる。

大して嬉しくない特技だが役に立つことはあるので重宝している。

実際今も胡散臭い笑顔でいるが、見た目以上に彼の機嫌がいいのは判っていた。

何かいいことがあったのか知らないが、必要があれば向こうから話してくれるはずだから敢えて問わない。

黒方に教わった作法どおりに食事の前に手を合わせると祈りの言葉を呴く。

梅香もそれに倣つて呴くと、スプーンを手に取りオムライスを掬い取った。

口内に入れてほろりと崩れる卵の柔らかさと、絶妙な組み合わせのソースとライス。

それ一品で他には何もないが、私にも梅香にも十分な食事だった。きっと別室で食事を摑っている勇者達がこの光景を見ると驚くに違いない。

何しろ昼とはいえ彼らには当たり前にコース料理を出しているから。

暫く無言で咀嚼していると、不意に梅香が顔を上げる。

悪戯っぽく光る瞳に、これは来たなと身構えた。

私が嫌そうに顔を歪めているのに気付くと、梅香はこいつと楽しそうに笑った。

「ところで伽羅。 午後には勇者君たちの衣装を決めたいんだけど」

さりげない調子で告げられ、私は思いため息を吐き出した。

にこやかに笑いながら腕を組みゆつたりとした体勢で立つ幼馴染を思い切り睨み付ける。

視線に軽蔑の色を籠めてみたが、さらりと受け流した彼はひらひらと手を振ってきた。

勇者一行の衣装を選ぶので付き合えと言われたのを了承した私は、何故か自分自身が幾度も衣装を取り替える羽目に陥っている。

先ほどから楽しげにこちらを見ている梅香は一切助けるつもりがないらしく、ドレスを選ぶはずのシェリル本人は、次から次へドレスの見本が描かれた本を指差しては私に見本を見せろと願っていた。実際どんな印象か判りにくいとのことで付き合つたが、気がつけばもう一十着は見本を見せている。

しかも彼女はどう考えても自分の参考にする気がないのが感じ取れる上、調子に乗った他の面々までドレスを指定してきた。

いい加減邪魔をしろと伝心で幾度か訴えているのに、何も聞こえないとばかりに返事一つしない幼馴染に腹を立てる。

ふつふつとした怒りを溜めていく私は、ついに我慢の限界に達した。

指差されたのは真っ白なドレス。

小花のレースが幾重にも連なり下に行くほど色を濃くするそれは、ゆつたりとしたドレープを描く独特な作りをしていた。

髪飾りも同色の白で出来たティアラ。

さらに柔らかな真珠のピンを、幾つも緩やかにアップにした髪に飾らねばならない。

着替え自体は簡単に出来るが、それ以前に嫌いな配色にきつく瞼を閉じた。

「 . . . 」

「 あああ、そろそろシリルちゃんのドレスを決めようか。俺のお勧めはこのドレス。深い青色のグラデーションが綺麗だろ？ リットも浅めだし、体に沿つたデザインは華奢な体つきのシリルちゃんに似合うと思つ」

「 え？ でも、私よりキャラちゃんのドレスを」

「 実は伽羅のドレスはもう決まつているんだ。魔王様直々に選ばれているから変更は出来ないし、彼女も力の使いすぎで疲れているから開放してやつて欲しいな」

「 あ・・・ そうよね、もう何着もお願いしてるとんね。『めんなさい、キャラちゃん』

「 いいえ、お気になれり。それより私も梅香の勧めたドレスに賛成ですわ。きっと青はお似合いです」

実際は絵すら確認していないが、笑顔を作り肯定しておく。するとその気になつたのか嬉しげに微笑んだシェリルは漸く私から興味を移すと、仲間達の意見を伺いながら見本誌を確認し始めた。面倒な時間からの開放に息を吐き出す。

私の我慢の限度を良く理解している梅香の絶妙なタイミングの良さに腹は立つが、一応助けてくれたのだから苛立ちを沈める。どうせ怒りをぶつけたとしてものらりくらりと躲されるだけだ。無駄な行為をすることはない。

それよりも私の意識を奪つたのは、彼の発した『魔王様が選んだドレス』に関してだ。

私のドレスを選んでいてくれたとは聞いてない。視線で問いかけるが、笑みを深めるだけで疑問を解消しようと一切思っていないらしい梅香に一つため息を落とした。

そのまま僅かに顔を俯かせ嬉しさに口元を綻ばす。

選んでくれた理由がなんであろうと、白檀様が直々に私のためにご用意くださるのなら、私に否があるはずがない。

白檀様がドレスを選んで下さるのはパーティが十回あれば一回くらいいの頻度になる。

私は毎回でも選んでいただきたいが、毎回は白檀様に負担が掛かると元の世界に住む執事に奢められ、大抵は彼が選んでいた。基本的に私は自分が身につけるものに頼着はないため、選ばれたドレスに文句はない。

文句はないが、白檀様が選んでくださったら歓喜が沸く。

機嫌が良くなつた私に気付いたのか、瞳の色とよく似た碧のドレスに身を包む私を梅香が抱き上げ腕に乗せた。

高くなる視界に瞬きをすると、ぐつと顔を近づけ瞳を覗きこんできた梅香は、吐息が掛かる距離まで来るとくすくすと笑つ。

『嬉しいか、伽羅？』

『黙つていたのはこれ？』

『どう思う？』

『どうでもいいわ。ただ、そうね 嬉しいわ』

想いを混めて呟くと、梅香の瞳が丸くなる。

そしてふわり、と珍しくも純粋に照れたようなはにかんだ笑みを浮かべた。

目尻を赤く染め僅かに視線を逸らした梅香に、私も驚きで目を丸くする。

子供時代ならともかく、年を経る」と私は違つた意味で感情をする。

隠すのが上手くなつた梅香は、それでも今はきっと誰が見ても判るよつに照れている。

一年に一度あるかないかの表情の変化にまじまじと観察していると、彼は表情を隠すよつに片手で口を覆つた。

ここから見える耳までも僅かに赤く染まつてゐるため、あまりその効果はないがあえて口に出さずにいると、暫くして漸く落ち着いたらしい梅香は情けなく眉を下げる苦笑した。

「君は」

「？」

「君は、本当にの方にのみ反応するんだな。昔と少しも変わらない」

あの方とは言わざもがな白檀様を指している。

私は別に白檀様に關してのみ反応する訳ではないが、感情のふり幅の大きさは比較できないものなので、ある意味では彼の言葉は正しいのだろう。

しかしそれはそのまま梅香にも返る。

生まれながらに白檀様に絶対の忠誠を誓つ彼は、白檀様を基準に生きている。

忠誠は悪魔の本分だ。心の核を担う想いは、梅香とて持つてゐる。その部分では私と梅香はよく似てゐる。

表に出る性格は全く違うものだが、根本が酷似してゐるためここまで付き合いが続いたのかもしれない。

そうでなければとつに互いに殺し合つてゐる。

昔と比べれば随分と性格は丸くなつたが、やはり梅香は梅香のままだ。

「急にどうしたの？」

しかし先ほどまで伝心で話をしていたのに、懇々声に出して切り替える理由が判らない。

今更そんなことを確認せざるとも、それこそお互いに誰より理解している。

梅香も私もずっと白檀様に仕えるために努力し続けて、その努力がいかほどのものか近くで見ていたのは互いなのだから。

今回の行為には意味があると直感が訴えているが、角度により僅かに色を変える藍色の瞳から情報は読み取れない。

ただ穏やかに微笑んだ表情だけは嘘がなく、それも話す気はないのかと首を振った。

ぱさりと音を立てて結っている髪が彼の胸に当たる。金色のそれを一房掴むと恭しく唇を落とした。

「魔王様に聞しててしか君は笑わないって話だよ

「・・・・・・」

わざとらじい態度に瞳を眇めるが、先ほどまでと表情を一変させいつもどおりの胡散臭い笑顔に切り替わった梅香は掴んだ髪を放すと機嫌良さそうに頭を撫でる。

幾度も幾度も髪に触れる仕草は優しいものだったが、私は気が付いていた。

彼は私を見ているようで、見ていない。

藍色の瞳が映しているのは、私の後ろにいる人物。

痛いくらいの視線をこちらに向けている、フレドリックその人であるということに。

私を抱き上げて頬に手を滑らした梅香の瞳は、挑発的な色に輝いている。

緩く弧を描く唇、わざとらしく擦り寄る頬に嘆息して俯く。

フレドリックの怒りを煽つて何がしたいのか目的は見えないが、彼の挑発行為のあたりを自分が全て瞞うのだと知っているためにため息が喉までせり上がる。

それを辛うじて堪え近くにある自分よりも色が濃い肌に唇を落とせば、表情こそ変わらずとも明確な動搖が腕を通して伝わり少しだけ溜飲が下がつた。

フニミニストを気取る女誑しのらしくない態度に、彼にだけ見えるよつに晒えれば、その柳眉がきゅっと顰められた。

『私を利用するのだから、少しくらい動搖すればいいのだわ』

『つ、卑怯だぞ、伽羅』

ほんのりと田尻を赤く染め上げた幼馴染が、自分に向ける感情はきつちりと理解している。

あえてしようと思わないが、その気になれば梅香の感情を搖さぶるのは容易いことだ。

普段しないことをすればいい。

作つたものだと理解していくも、それだけで梅香は動搖する。

とても判りにくく湾曲だが、白檀様に忠誠を、そして私には別ものを彼はきつちり捧げてくれている。

彼の師匠と同じで女性に慣れている彼の反応とは思えない初心な反応だが、鼻で笑つてやれば悔しげに睨み付けて来た。

余裕たっぷりの態度で彼の腕から降りると、じとりとした眼差しでこちらを見ている梅香から視線を逸らさぬまま首を傾げた。

『それで、私にどう動いて欲しいの?』

『君は何も知る必要はない』

『それが白檀様の判断?』

『そうだ』

『判つたわ』

白檀様の判断に否ではない。

瞬き一つを了承の返事とし、初咲きの薔薇のような色合いのドレスを翻す。

力を使いそれを下部から黒へと変色させながら向かう先は、一人仲間から外れた勇者の元だ。

何も知らされないなら、知つている任務を全うする。

白檀様が勇者の世話をしろというのなら、彼の望みを出来うる限り考慮するのが役目だろう。

「フレドリック。貴方はど�がいいか決まつたの?」

「男が何を着ても大した違いはない。それとも、そちらはそんなに奇抜な格好で来るつもりか?」

「いいえ。では服の意匠がどれでも構わないなら、貴方がこの場に居る必要もないわね。どうしたい?」

「この場から離れたい。俺と、あんただけで」

「他のお仲間はどうするの？」

「ハーケ様とアーク様が居れば今はいいだろ？あんたの力で移動させろ！」

「場所は？」

「……」の城の裏手にある、湖のほとりに

こちらを見るフレドリックの瞳に眉を寄せた。覚えのある感覚に嫌な感じだと瞳を伏せた。

『行つてくるわ』

『ああ。楽しんでおいで』

『嫌味はよして』

後は頼むと言外に告げれば、からかうよつた調子で軽く返された。私が楽しめるはずがないと知っているだらうに、意趣返しのつもりだろうか。

室内に居るハーケとアークに視線をやれば、他の一行に気付かれぬよう彼ら一人は頭を下げた。

「移動するわ」

「ああ」

本当なら歩いて行きたいところだが、どうやら機嫌が下降している彼の相手は面倒そうなので力を使うことにする。

梅香の言葉を否定しなかつたが、あの程度で疲れを覚えるなら白檀様の傍に居る資格がない。

離れた場所から私たちを見詰めるもう一つの視線に気付いたが、あって反応せずにそのまま力を解放した。

「この場所が

美しいその欠片もない、湖とは名ばかりの湿地のほとりで感極まつて
いるフレドリックを眺める。

一体この土地の何処に彼の心を震わせるものがあるのか、私にはさ
っぱり理解できない。

他の場所と変わらずこの湖も田が差さない。

じめじめとした空氣に、湿地だからこそ苔むした植物。
力を使い一往以上は近づけないようにしているが、虫も多いし空氣
もよくない。

湖の反面以上は良く判らない植物で覆われ、今居る場所からは水面
すら見えない。

例え見えたとしても生態系が著しく崩れている湖で、美しい生き物
は期待できないだろう。

七色に輝く鱗を持つ魚や、純白の羽を持つ鳥。

そんなものの代わりに得体の知れない鳴き声の蛙や、闇のおかげで
昼間でも飛ぶこつもりが居るくらいだ。

胸一杯に空気を吸い込み深呼吸を繰り返しているが、人体にいい影響を与えるとは思えない。

止めるべきか放つておくべきか。

彼の行動を静かに眺めて迷つていると、くるりと嬉しげにひらり振り返つた。

その顔に先ほどの不機嫌な影は見当たらず、機嫌が直つたのかと首を傾げる。

明らかに趣味が悪い湖なのに、こんな場所で機嫌を直すとは、人間の感性は理解できそうになかった。

腕を組んで立つていると、あつという間に駆け寄ってきたフレドリックが瞳を輝かせてきた。

また何か面倒ごとでも頼まれるのかと嘆息すると、一切を気にせず

大げさな仕草で湖を指差す。

嬉しそうに瞳を輝かすフレドリックに、面倒だと思ひながらも仕方なしに口を開いた。

「……どうかしたのかしら？」

「この場所で、力の結晶化を見せてくれ」

無駄に瞳を輝かせて嬉しげに表情を崩したフレドリックに、軽く首を振り嘆息した。

指差された場所は湖の水面で、濁った水に瞳を眇める。力の結晶化を見せろと言うのであれば、つい先ほど壊したあの花をこの場で咲かせると言つているのと同意だらう。何を拘つているのか知らないが、全く面倒なことだ。

「いいだろ！ あんたの力なら結晶化くらい難しくないはずだ」

「そうね、簡単だわ」

「ならいいだろ？ この湖の一面に、昔と同じようこー」

「昔と、同じ？」

「そうだ。さつきあんたが壊した力の結晶は、初代が取つておいたものだ」

「初代……」

「魔王に命じられたあんたが、勇者に力を見せたとき。この湖一面に力の結晶の薔薇を咲かせた。薄暗い闇の中に咲く黒い薔薇。それはこの地の闇と違う黒曜石のよつた黒。花自体が薄く発光し、花弁の先に混じる赤い筋が美しかったという

「……」

熱い光を瞳に宿したフレドリックの言葉に、私は漸く思い出す。

どこかで見た覚えがあると思つたのだが、あれは遙かな昔、初代の『勇者』に請われ白檀様に命じられて発現した力の名残。

暗雲に雷を轟かせた白檀様は、力を操りながら笑っていた。

この湖にお前の美しいと思えるものを力で現せ、と。

私が選んだのは咲き誇る薔薇。

本来の世界で初咲きの薔薇を執事に贈られたばかりだった私は、美しいものと聞き薔薇を連想した。

そして未熟な力を操り、この湖の隅々までを薔薇で覆い尽くしたのだ。

黒く輝く薔薇に勇者は感嘆の声を上げ、何時間もこの湖の辺でじつとしていた。

蒼い瞳を興奮で輝かせ、静かな声で『美しい』と呟いて。

忘れていたのはその記憶を留めておく価値がなかつたから。『勇者』があの光景にどんな意味を持ったのか知らないが、私にとつては何の意味もない行為でしかなかつたからだ。

白檀様の命令により動いただけで、私の自発的な意思はそこにはない。振るつた力に結果がついた。ただそれだけのこと。

あの時の薔薇を『勇者』はこつそりと持ち帰つていたらしい。

昔の『勇者』であればこそ出来た行動だが、フレドリックが何故あの力の結晶に拘るのかは判らない。

彼の目の前で碎いたからこそ余計に執着したのなら、そこには何らかの理由が存在する。

だが今の『勇者』にその理由を見出せない。まだ何がが足りない。

私が知らない、あるいは私には知らされていない、何らかの情報がある。

纏めてある髪の毛先を指で弄れば、癖は強いが櫛通りはいいそれはするりと指から解けて落ちた。

知る必要はないと梅香は告げた。そしてそれは白檀様の意思だと。

「判つたわ」

「伽羅！」

「ただし、触れるのは許さない。私の力はあの時より遙かに強いものよ。近づくだけで貴方の体にはいい影響を与えない」

ぱちり、と指を鳴らすと視認出来る色で結界を張る。私のすぐ目の前までを力で囲い、距離がある湖から僅かにも漏れないうつにした。

「この結界は力の余波を防ぐものよ。あちらからの力の影響を受けないよう遮断した。けれど、この結界はこちからは容易に超えられる」

「・・・・・」

「この意味、判るかしら？」

「俺を試すと言つのか？」

「その通り。私は貴方がここから抜けないと信じるわ」

「俺は」

「約束はいらない。けれど一つだけ覚えておきなさい。この結界は一方通行よ。入るのは出来ても出ることは出来ない。花に魅せられて潜り込めば、生きて出れないと思ひなさい」

じつとフレドリックをの瞳を見詰め、彼が頷いたのを確認して背を

向ける。

背中に羽を出現させ、一気に上空まで舞い上がった。風を支配し勢いをつけた先から湖を見下ろす。

フレドリックの姿は虫のように小さくなり、何故かこちらを見上げて両腕を振つていた。

その姿を軽く無視して、呼吸を整え力を満たす。

湖の広さは大体城の二つ分ほど。

昔はある広さ一杯に力の結晶化を行うのはとても疲労したものだ。だが今の私の力は昔と比べ随分と研磨されている。

瞼を閉じてイメージを膨らませる。

湖一面を覆いつくす薔薇。

赤、黒、黄、緑、青。

全て単一色で混じり気ない力の結晶を。

「ふつ」

短い掛け声を発すると、湖の中心からぱきぱきと音が広がる。

薔、七分咲き、満開、赤、黒、黄、青。薔は緑で茨から薔薇を。

わけの判らない植物で覆われていた湖が、色鮮やかな薔薇に侵食される。

濁つた水の中に存在していた生命を殺し、ただ魅せるために花を咲かす。

美しいだけの存在に意味はない。

強すぎる力の結晶は、この地の生き物を消しつくす。

影響を与えるのは人体だけではない。

私の結界の中に存在した植物も全てが枯れ果て消えていく。
そして命を持たぬ力の塊に飲み込まれていった。

腐れ落ちた何もかもを隠すように薔薇は咲く。

嘗て一度見た光景は、やはり後味のいいものとは思えなかつた。
私達の力はこの世界で与える影響が大き過ぎる。

情弱で脆弱な生き物しか居ないここでは、僅かな力の解放でも存在を踏み躡る驚異と生き得た。

羽ばたきを緩め、ゆっくりと地上へ降りる。

興奮した眼差しで拳を握るフレドリックは、嬉しそうに田尻をほの赤く染めていた。

「 綺麗だ、伽羅」

エサを喰らい終えた獣のよつに満足気に田を細めて笑う彼に、そつと瞳を伏せ頷く。

黒に赤を混じらすような未熟な結晶はこの場にはない。

あの日より遙かに色とりどりに咲き誇る薔薇は、それでも私には美しいとは思えない。

こんなに醜惡な光景も美しいと捕らえる存在は、あの日と同じよう
に私に喜びを伝えた。

午後から白檀様と対談が入っているフレドリックと別れ、私は一人与えられて いる領域へと帰つた。

最近は香に任せきりにしていたが、『拾い物屋敷』に拾つてきた生き物の面倒は基本は自分で見ると白檀様と約束している。

私の我儘を叶えてくださった白檀様に迷惑は掛けれないし、何より責任のないことは出来ない。

部屋に戻ると自室から出た。

この『拾い物屋敷』の構造は二階建ての木造建築だ。

中央に大きな階段があり、一階部分には部屋が6つとキッチンと風呂場がある。

二階は全てが私の私室一面となつていて、特に重傷な『拾い物』が居るときはこの部屋で看病した。

最近はそこまでの重傷な拾い物はしていないので、基本的にこの時間は一階の中央にいる。

階段を降りた後ろにある中央の部屋は私の部屋の次に広く、入り口のドアはいつでも開放されていた。

部屋の中には様々な種類の拾い者が居るが、彼らには生存本能がないのか、食物連鎖をそのまま入れておいても争いはない。

部屋からは中庭に続く窓も全開にされ、日光浴が好きなものは勝手に外に出て夕食時に帰つてくるのが常だつた。

「お姉さま！？どうされたのですか？」

「時間が空いたから昼食はこちらで摂ろつかと思つて。黒方は？」

「まだ眠つておいでです。昨晩白檀様と『』一緒にされてから徹夜でお話されたのですよね？白檀様から自然と目が覚めるまで放つておけ

と命じられました

「そう。なら、昼食は一人で摂りましょうか。用意してくれる?」「はい!飛び切り美味しいお料理を準備いたします!」

そう言えば昨日は子供のように興奮していた黒方は、先に寝た私と違はずと白檀様と話していたのだった。

目が覚めたとき一人とも眠っていたので気にしなかつたが、黒方が眠いなら白檀様も眠たいだろう。

今日は早めに休んでいただからなくてはと心に決めつつ、嬉しそうに頬を染めてこちらを見ていた香に笑いかける。

瞳を輝かせて立ち去った香を見送り、そのまま視線を室内に向かた。少し空気が悪い気がしたので力を使い入れ替えると、顔を伏せていた拾い物たちがこちらを見る。

一斉に何十の瞳を向けられたが躊躇することなく中央まで進み出る。

そして床へと蹲る数匹に近寄り、触診を始めた。

室内に残っていたのは十匹近い数の獣だ。

彼らは四肢を失つたり怪我をしていたりで、満足に身動きは取れない。

ただの獣である彼らに菊花が癒しの力を与えるはずもなく、私自身必要がないと断じているため彼らは基本的に自然回復を待つ事になる。

たまにバークやアークのように例外が生まれるが、この場に私の力を受け継いだ存在は香と、もう一人しか居なかつた。

静かに触診を続け様子に変わりがないのを確かめると、体を摺り寄せたり舌で舐めてこようとする彼らをいなして立ち上がる。

室内の拾い物の確認をし終わったら、次は庭の拾い物の確認が残つ

ていた。

庭に出るとそこに居るのは動けるばかりなので、呼ばれもしないのに勝手に集まつてくる。

大小併せて十を軽く超える彼らも、室内の拾い物と同じように触診し傷が悪化していないのを確認して立ち上がった。

ここでも擦り寄るものや、舐めてくるものが居たが好きにさせる。べた付いた手は洗えば落ちるし、毛だらけになつた服も着替えればいいだけの話だ。

僅かに鬱陶しいと感じる思いもあるが、振り払うほどでもない。従うように付いて来る彼らを余所に、私は庭の中央付近まで歩くと足を止めた。

「まだ生きてるかしら？」

「・・・・・・」

ひゅーひゅーと掠れた呼吸が漏れ、彼は瞬きのみで返事をした。どうやら予想よりも疲労が激しく出血が多かつたらしい。

辛うじて胸は上下しているが、意識を留めておくのも難しそうだ。それでも尻尾を振ろうと力を振り絞るアースの前で、芝が生えてくる地面へと膝をついた。

真っ赤な毛並みに手を伸ばし、耳元を軽く撫でる。

心地良さそうに瞳を細めたアースの瞳孔は縦に開き、焦点は定まつていないうだつた。

この状態だと鼻も利かないだろうし、辛うじて音が拾えるくらいか。私が触れているのに腕一本動かせない彼は、ゆっくりと瞼を閉じる。胸に空いた穴も斬りつけた足も傷は塞がりきっていない。

空氣に触れて固まつた血が出血を留めているが、体温は下がり触れただけで危険な状態だと判つた。

「死にたいかしら?」

「・・・・・」

「殺してあげましょうか?」

「・・・・・」

問い合わせに、一回だけ尻尾が揺れる。

伝心と呼ぶにも未熟な意思疎通方法で流れた感情に、私は僅かに口端を持ち上げた。

『死にたくない』『まだ傍にいたい』

言葉にすらならない想いは、すとんと私の胸の奥に入り込む。人であることを捨てたアースの感情は、悪魔の私には判り易い。

『愛している』『傍において』

繰り返し繰り返し伝わるそれは、とても覚えがあり共感できる。点滅しては消えていく感情に、私はゆっくりと立ち上がった。

これで死にたいと僅かにも思えば、いっそ一息に殺してやるつもりだった。

アースは人間と同じ感情も知性も有するが、所詮は半端な生き物だ。この先どれだけ訓練しても昔のように人語を話すこともないし、人型へと変化することもない。

それは魂の許容量を遙かに超えた分を弁えぬ行為であり、同時に望

んだ瞬間がアースとしての存在の崩壊の始まりだ。

私の傍に居るためだけに魔物になつたアースは、人であることは捨ててている。

「貴方は人間だつたけれど、思考が魔に近かつたのかしら。それとも私が墮としたからそうなのかしら」

「・・・・・」

「私は貴方の親友が嫌いよ。昔も、そして今も、貴方が生まるずつと前からそうだったよ」

立ち上がつたおかげで近づいた背中に、そつと手を触れる。

執念で生にしがみ付くアースに、私は見えないよう微笑んだ。

「死にたくなつたら呼びなさい。優先事項がなければ、殺しに来て上げるわ」

「・・・・・」

ぱたり、と尻尾を振り了承を示した彼は、そのまま意識を失つた。

室内から香に呼びかけられ、アースに対して背を向ける。それきりもう彼の存在は頭からすっかり消え去つた。

閑話【フレドリック】

生まれた瞬間の記憶を有している人間は、果たしてこの世界に何人存在するのか。

フレドリックは生まれた瞬間から、今現在までの記憶を余すことなく覚えている。

母の胎内から生まれ、始めにしたのはむせ返るような呼吸。喉に詰まる何かを鬱陶しく感じながら、背中を叩かれ叫び声を上げた。

泣き続けた自分に向かい誰かが何かを言つたが、聞き取れるほど明瞭に音は拾えない。

そのまま誰かに手を握られ、柔らかな何かに包まれると意識を失つた。

それがフレドリックが覚えている一番初めの記憶。

「レイノルドは凄いね！またテスト満点だつたんだ」

「・・・別に凄くない。ただ覚えている範囲が出たから」

「それが凄いって言つんだよ。きっとレイノルドは天才なんだ！」

無邪気な笑みを浮かべて自分を讃める幼馴染に、フレドリックは瞳を伏せた。

まるで自分ごとみたいに胸を張っているが、自分にとつてテストなど価値がない上に、神童の呼び名は重すぎた。

フレドリックは記憶力がいい。

否、正確に言うと『何かを忘れられない』。

例えば朝起きて瞬きを三回。それから口での呼吸に切り替え、右の拳を握つて小指から開く。

小鳥の鳴き声が一度だけ響き、促されるよう左手を枕元について右肩を前にして上半身を起こす。

普通なら意識一つしない行動でもフレドリックの脳裏には刻まれ、何年経つても忘れる事はない。

例えば数年前の日にちを指定されても明確に答えることが出来るだらう。

テストの点数で頭角を露にしたことで神童と言われたが、こんなものは才能なんかではない。

才能などと生易しいものではなく、『呪い』と読んだ方がぴったりな能力だった。

狂わない為に他人との距離を測りなるべく接触を避けようとしているのに、この幼馴染はいつだつて無遠慮に踏み込んでくる。

最近のフレドリックはそれが疎ましく、同時に疎ましいと感じている自分を心苦しく思つていた。

何しろこの幼馴染の好意はあからさまで、無視しようにも出来ない。名を呼ばれるたびに、微笑みかけられるたびに、発狂しそうになる自分を理解している。

それでも狂わないのは、最後の最後で何かが狂うのを拒否するよう自分感情を押さえ込んでいたからだつた。

何が自分を留めるのか判らないが、少なくとも目の前の幼馴染の好意ではないだらうと重いため息を吐き出す。

とにかく早く一人になりたくて、自分を称賛し続ける幼馴染から相槌を打ちつつ瞳を逸らした。

家に帰ると、ある時期からフレドリックが直行する場所は決まつていた。

代々の勇者の『手記』がある封印の間。そこに入るのは勇者候補であるフレドリックのみで、閉鎖的な世界は心を和らげた。

子供のフレドリックが二十歩ほど歩けば壁にぶち当たるくらいの狭い部屋に用意されているのは、小さな窓と机と椅子。そして壁際に備え付けられている本棚だけ。

勇者の一族とありフレドリックの家は屋敷と呼べるほど豪勢なものだが、その中でもこの部屋だけは異質だった。

狭苦しい空間でりながら暑さも寒さも感じぬ不思議な部屋。まるで時を止めたような場所は、昼も夜もほの明るい。

窓から外は見えるのに、外から中は覗けない。特殊な力が使われているのかもしれないが、少なくとも現代では解析できないだろう。

常人であれば息苦しくなるかもしれない場所だが、これ以上安心できる空間はない。

本棚に足を向け勇者の手記を一冊取り出す。そしてじっくりと読み始めた。

汚れ一つないがペラペラの本は学校の教科書よりも遙かに薄い。記憶力が優れるフレドリックは一回で内容は覚えていたが、それでも本を捲つた。

視線を動かし、一言一句をしっかりと読む。

奇妙なまでに心惹かれる『手記』は、幾度読んでも心が躍つた。書かれる内容は淡白で観察日記のようだ。

登場人物は魔王とその側近。

僅か数日の会合でのやりとりと、彼らの取った行動。

繰り返し読む内に心はどんどん引き込まれ、まるで自分が実際にその世界に居る気になる。

感情豊かな文章ではない。表現が大げさなのでもない。

ただ、何かが心の琴線に触れ、フレドリックを封印の部屋へと誘う。どの手記に書かれる内容も興味深く面白いが、フレドリックが特に気に入っているのは自分の先代のレイノルドが残した手記だ。

そこだけ異常に分厚い本は、他のものと明らかに一線を画していた。

先代レイノルドが残した手記は優に十冊を超える、一日の終わりにそれを読むのがフレドリックの日課だ。

そして数年後に会つべき相手を思い描き、ひとつそりと希望に胸を膨らませる。

本をなぞり記憶した内容ではなく、新たに自分が感じるために。

呪われた記憶力ゆえに何かを楽しみにする気持ちが少ないフレドリックにとって、この想いだけは例外だ。

早く会いたい。会つて、全てを『記憶』したい。

焦がれるように頁を捲る。

一枚一枚読み進める内に、気持ちは募り想いは溜まる。

「早く会いたい。会つて、呼んで欲しい。俺の、俺だけの名前を」

レイノルドと呼ばれるのは絶対に嫌だ。

『勇者』の名ではなくきちんと固有名を呼んで欲しいと思つのは、

『先代』の気持ちを読んだからだらう。

早く、早くと心は急ぐ。

会いたい、逢いたいと希づ。

金の髪に碧の瞳。

美しさと比例し気高い心を持つ異端の悪魔。

「伽羅。 あんたに、会いたい」

意識せず零れた声は、囁らずも年に不相応な熱の籠つたものだった。

城に戻るうとしたが、白檀様とフレドリックの対談はまだ終わっていないと菊花から連絡を貰い、どうしたものかと首を傾げる。城に戻ったは良いものの、予定外に時間が空いてしまった。どうしたものかと迷っていると、菊花から伝心が入る。

『聞こえますか、伽羅』

『ええ』

『今時間が空いているのでしょうか？明日の余興の下見をしませんか？』

『これから？でも白檀様と勇者の会談が終わるかもしないわ』

『力を使って移動すれば良いでしょう。それに白檀様の勅命です』

『先に言いなさい』

一方的に伝心を切ると菊花の元へ移動する。

瞬く間に現れた私に驚きもせず迎えた菊花は、眼鏡を指の腹で押し上げると不満そうに鼻を鳴らす。

「本当に貴女は白檀様大事ですね」

「当たり前のことよ。それで目的地は？」

「・・・はあ、嫌味も通じませんか」

「嫌味にすらなってないわ。さつと目的地を言いなさい」

「判りました」

呆れを含んだ声で頷いた菊花は、畠から紙を取り出すとそのまま広げる。

見覚えのある地形が描かれたそれは、どつやうじの世界の地図だ。この世界の人間が中途半端に作成したものではなく、菊花自身が描いたそれは精巧で緻密なもので、局部を拡大し立体的に見ることも出来る。

彼の力を使つてはいるから」その代物は今の私にはとても真似できない技巧が凝らされていた。

菊花が指を振るつと五つの地形が浮かび上がり、映像として畠に射影される。

一つ畠はごつごつとした筋肌の山が並ぶ地形。

二つ畠は澄んだ水を湛える湖。

三つ畠は色取り取りの花が咲き誇る草原。

四つ畠は溶岩が煮えたぎる火山帶。

五つ畠は木が生い茂る森。

地図を確認すれば、彼が選んだのは大国と呼ばれる国に所有される土地だった。

全く違う環境であるが菊花の選んだ場所には一つ共通点がある。それを余興とするのも通例で、問い合わせる必要もなかつた。

「じいじが貴方が選んだ余興場所？」

「ええ。下見に付き合つてもらつ暁には、貴女に最初に何処にするか選ぶ権利を与えて差し上げますよ」

「何処でもいいわ」

「そう言つと思いました。ですが一応これも白檀様からの勅命です。つまり」

「選択しろ、と言つことね

遠回しな命令に頷くと、菊花は目を細めた。

「「」の地域に何か思い入れが？」

「あるわけないでしょ。私はこの世界で仕事以外で外出する」とはないわ。白檀様のために動くのは苦にならないけれど、好ましいと思える場所はないもの。ああ、でも。敢えて言つなら白檀様がご一緒くだされば何処でも好ましいけれど」

「惚氣ろとは言つてませんよ。ですが、まあそりでしじうね。貴女は極端に世界が狭い。その貴女がこの世界で興味を引かれるものなど、『拾い物』と認識した何か以外はほぼないでしょ」

結構な言い草だが否定する要素もない。

右側の高い位置で一つに結い上げた髪を揺らしながら僅かに首を傾げると、一つ瞬きして菊花は肩を竦めた。

「とにかく、移動しましょ。貴女がどの地を選ぶか知りませんが候補は二つ上げてください。余興は私と貴女と梅香で行います。他の面々が居ない以上、一人が一箇所を担当する」とになるでしょ

「判つたわ」

「順番の希望はありますか？」

「いいえ」

「なら一番遠いところからにじましょつか

菊花が指を鳴らすと同時に移動が開始された。

瞬き一つが終わる前に移動し、場所を確認する。

その作業を五回繰り返し、私は選択した。

「決めたわ」

「そうですか。何処にしますか？」

「第一候補は火山帶。第二候補は湖よ」

「判りました。その旨、お伝えしておきます」

胸に手を当て頭を下げた菊花に頷くと、梅香からの伝心が入る。

『勇者君がお呼びだよ、伽羅』

『判つたわ』

梅香の言葉を同様に聞いていただろう菊花と一緒にだけ視線を絡め、力を解放すると勇者の下へと移動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0001n/>

拝啓、魔王様

2010年12月5日14時02分発行